

人類学研究所 研究論集 第2号 2015年

研究課題「民具と民芸」

目 次

特集にあたって	濱田 琢司 (1)
“民”の発見——民具・民芸から民俗まで——	佐野 賢治 (3)
折口信夫の造形伝承論	小川 直之 (13)
ホリ・京タケノコ・京料理	印南 敏秀 (36)
「民具」から何を学ぶのか——潜水メガネからみた海女の生活——	小島 孝夫 (40)
民具と民芸とモノの機能	濱田 琢司 (56)
民芸運動と台湾原住民の工芸	
——学説史及び集積された資料の整理に向けて——	角南 聡一郎 (69)
アメリカ民俗学におけるフォークアート	後藤 明 (81)
町工場の機械工がもつ熟練技術	
——金属切削加工の「段取り」を事例に——	加藤 英明 (89)

Research Papers of the Anthropological Institute Vol.2 (2015)

Anthropology of Events, 'Mingu' and 'Mingei'

Contents

On the special feature	Takuji Hamada(1)
Discovery of the Common People Culture: From Folkimplement, Folkcraft to Folklore	Kenji Sano(3)
The Formative Tradition Theory of ORIKUCHI Shinobu	Naoyuki Ogawa(13)
Hori, Kyo-takenoko bamboo shoots, Kyoto Cuisine	Toshihide Innami(36)
The Lessons of Mingu: A Case Study of Female Divers and their Goggles	Takao Kojima(40)
Mingu, Mingei and its function	Takuji Hamada(56)
Mingei Movement and Formosan Aborigines Arts and Crafts	Soichiro Sunami (69)
The concept of folk art in American folklore studies	Akira Goto(81)
Expertise Skill of the Mechanic in Small Factory: The Case of "Setup" of Metal Cutting	Hideaki Kato (89)

特集にあたって

濱田 琢司 (南山大学)

『人類学研究所 研究論集』第2号は、2014年7月5日に人類学研究所にて開催された5大学研究所連合公開研究会「民具と民芸」の内容を中心としたものとなっている。この研究会は、成城大学民俗学研究所、國學院大學折口博士記念古代研究所、神奈川大学日本常民文化研究所の在京3大学の研究所の間で始まった連合研究会をもととし、2013年度に愛知大学総合郷土研究所が主催となり、同大にて連携シンポジウムが開催された際に南山大学人類学研究所も加わり、5大学連合研究会となったものである。2014年度は、南山大学が担当校となり、「民具と民芸」をテーマとした公開研究会を、上述の通り、人類学研究所にて実施した。

本特集号の複数の論文においても言及されているように、民具と民芸とは、ともに、大正から昭和初期という同じ時期に発生した対象である。民具は、渋沢敬三のアチック・ミュージウムの活動とそれに連なる動きのなかで、民芸は、柳宗悦の民芸運動を通して、それぞれに類似したモノに、しかし異なったベクトルを持ったまなざしが向けられることで、分類され、価値付けられていった。それぞれを大雑把に位置付けるとするならば、前者は生活・生業用具、後者は諸工芸となるだろうか。しかし、いずれも前近代に起源を持つ「民衆的」で「伝統的」なものを対象としていたために、具体的な収集品も含めて、様々な側面において重複するところが多い二者なのである。そうした類似性は、一方においては、両者の対立の要因ともなり、戦後になると、特に民具研究者の側から民芸への批判的な意見や、民芸との別を強調するような意見もしばしば見られるようになった。1960年代から70年代にかけての「民芸ブーム」と呼ばれる民芸の消費ブームに、民具が巻き込まれてしまったことなどがその背景にあった。

しかし、1990年代になると、民芸運動や柳宗悦についての学術的な研究が増加したこともあり、両者を分析的に比較し検討するような機会も増えていった。2001年に開催された民族芸術学会の年次大会「特集 民具と民芸」もその一つであった。その内容をまとめた『民族芸術』の特集号(第18号、2002)では、国立民族学博物館に受け継がれているアチック・ミュージウムの旧コレクションと日本民芸館の収蔵品との具体的な類似を示してみせるなど興味深い試みもみられた。

それから10年強ほどが経過し、民具、民芸ともに新たな視点からの研究蓄積がみられるようにもなった。また、近年では、文化人類学や地理学、民俗学、あるいは美術史学等の人文・社会諸科学において、マテリアルなモノへの関心が高まっているという状況もあり、民具や民芸は、そのテーマとしても有効な対象であるといえるだろう。

こうした状況を踏まえ、公開研究会においては、「民具と民芸」という対象を広く解釈しつつ、民具と民芸を中心としたモノ・物質文化をテーマとして報告と討論が実施された。濱田(南山大学人類学研究所)が民具と民芸の関係を、民芸を中心としながら概観したの

ち、佐野賢治（神奈川県立日本常民文化研究所）が「民」をキーワードとして渋沢敬三と柳、柳田國男らの思考を整理し、小川直之（國學院大學折口博士記念古代研究所）が折口信夫の物質文化への関心を紹介した。また、印南敏秀（愛知大学総合郷土研究所）は京都のタケノコ掘りの道具「ホリ」を「美」という視点から考察する可能性を示し、小島孝夫（成城大学民俗学研究所）は、自身の研究史とともに民具研究を基軸とした発表を行った。本研究論集では、これらの報告をもととした論考とともに、公開研究会においてコメントーターを務めた角南聡一郎（公益財団法人元興寺文化財研究所）が民芸運動と台湾原住民の工芸との関わりを、また後藤明（南山大学人類学研究所）がアメリカ民俗学におけるフォークアートの位置付けとその研究動向を、加藤英明（南山大学大学院人間文化研究科博士後期課程）が町工場の機械工を事例に、民具や民芸という枠の中で「機械」を理解するための可能性を提示している。

濱田論文においても簡単に触れているように、民具と民芸とは、近年になってもなお、積極的な比較研究の対象となることは多くない。本特集も十分にそれが実現できているわけではないかもしれないが、同時に、民具と民芸を端緒として、より大きな視点から、モノや技術、機能を捉える論考が含まれることで、民具研究、民芸運動研究のそれぞれの深化とともに、新たなモノ研究への展望も見出すことができるものとなっている。これを受けて、さらに深く民具と民芸を交差させる試みへと展開できることを望みたい。

“民”の発見

——民具・民芸から民俗まで——

佐野 賢治 (神奈川県立民俗学研究所)

キーワード

民具、民芸、民俗

1. “民”の発見—伝統と近代の相克

明治維新以来の日本の近代化の諸矛盾が露呈してきた大正末期から昭和の初期において、近代化に対して伝統的な生活文化の見直し、再評価をしようとする一連の動向があった。

提唱者の生年順で主な事績をあげてみると、

- | | |
|-----------------------|---|
| 民俗—柳田國男 (1875～1962) | 『民間伝承論』1934、『郷土生活の研究法』1935 |
| 民家—今和次郎 (1888～1973) | 白茅会編『民家図集』第一輯1918 (民家調査の最初の報告書)、後に考現学を提唱1927 |
| 民謡—町田嘉章 (1888～1981) | 柳田「民謡の今と昔」1927、1937年より町田式写音機で全国の民謡を採音。新民謡運動の提唱 |
| 民芸—柳 宗悦 (1889～1961) | 「日本民芸博物館設立趣意書」1926。『工藝』を創刊1931。日本民藝協会を設立『美と工藝』を創刊1934。日本民藝館の設立1936。『月刊民芸』創刊1939 |
| 民具—渋沢敬三 (1896～1963) | アチック・ミュージアム (屋根裏博物館) 設立1921、民族学会理事就任1934、「所謂足半 (あしなか) に就いて (予報)」1935、『民具蒐集調査要目』1936 |
| 民俗芸能—本田安次 (1906～2001) | 柳田・折口ら「民俗芸術の会」を設立1927。日本民俗芸能学会設立1984 (初代会長・本田) |
| 民話—木下順二 (1914～2000) | 関敬吾『島原半島民話集』1935 (“民話”の初出)、「彦市ばなし」1946、「夕鶴」1949。民話の会発足1952 |

など、従来、近代化の進展の中で取り残された頑迷で、汚ない、遅れたものとマイナスの評価しかされなかった庶民の生産・生活文化へ新たな視角から目が注がれた。柳田の民俗学がその集成といえた。今日考えるとなんともないが、当時庶民の日常生活に光を当て、その意義を説き、また学問の対象として考えたことは慧眼だったといえる。こうした庶民の生活文化に対する関心を、私は、“民”の発見、と呼ぶことにし、そのそれぞれの成立の事情を探り異同を確かめた上で総合し、学史上で意味づけたいと考えている。

2. 柳田の民俗学—経世済民、常民の幸福を求めて

柳田の民俗学については、多くの論考・評論がある。ここでは、柳田の嫌った儒教・仏教用語であえて表すと、柳田民俗学は経世済民（思想）を本尊とし、温故知新（学問）、知行合一（実践）を脇侍とする三位一体に特徴があり、戦後の日本民俗学が個別科学としての定立を志向したのと相違し、学問の目的を第一に問うたことを指摘するにとどめ、よく引用される一文をあげ再確認しておきたい（下線筆者）。

個々の郷土が如何にして今日有るを致したか、又如何なる拘束と進路を持ち如何なる条件の上に存立して居るかを明らかにし、その志ある者をしてこの材料に基づいて、どうすれば今後村が幸福に存続して行かれるかを覚らしむるようにより便宜をあたえてやらねばならぬ「郷土誌編集者の用意」1914

郷土を研究しようとしたので無く、郷土で或るものを研究しようとしていたのであった。その、或るものとは何であるかと言え、日本人の生活、殊にこの民族の一団としての過去の経歴であった、それを各自の郷土において、もしくは郷土人の意識感覚を透して、新たに学び識ろうとするのが、我々どもの計画であった

「郷土研究と郷土教育」1933

一国民俗学が各国に成立し、国際的にも比較綜合が可能になって、其の結果が他のどの民族にもあてはめられるようになれば、世界民俗学の曙光が見え初めたと云い得るのである。しかし、比較法の恩恵はその華やかなる夢を実現するには、今日はまだ十分に材料が揃って居ないという他ない

『民間伝承論』1934

柳田の言う郷土、今日風に言えば地域・領域の範囲・性格は、村から国、世界まで、その対象も村人から民族まで可変性を持つこと、そして何よりも、柳田は学問の目的が地域社会全体の幸福を求めることにあると一貫して説いている。中でも「家の光」の一文は、長短があるにせよ宮沢賢治の「世界全体が幸福にならなければ個人の幸福はありえない」（『農民芸術概論綱要』1926）と文意は一致しており、その背景に初代駐日フィンランド公使、C.J.ラムステッド博士（1873～1950）の影響が考えられる。言語学者である博士は、フィンランドの歴史地理学的方法を東大で紹介するとともに、農本主義というべきか農業が人間の生活にとって根本的なものであることを各所で説いていた。また、エスペランティストでもあり、日本のエスペラント運動に大きな貢献をした人物でもある。柳田も宮沢もエスペラント語には人一倍の関心を持った。柳田の『遠野物語』（1910）の話者、佐々木喜善もエスペランティストであり、当時の世界認識の思潮の具体的な表れの一つとして、このことは明記しておく必要がある。

柳田の郷土研究、民俗学は当時の日本の農村の抱える緊近の問題「農民はなぜ貧なるや」から、将来にわたる世界全体の人々の幸福の希求まで見渡していたのであり、一国民俗学の主張もその段階の一過程であったといえるのである。

また、柳田は、民間伝承すなわち民俗を、

- ①有形文化（生活外形）－衣食住など、「旅人」が「目」で見ることができるもの
- ②言語芸術（生活解説）－昔話・伝説など、長く滞在した「寄寓者」が「言葉」を理解し「耳」で聞けるもの
- ③心意現象（生活意識）－共同幻想など、郷土で生まれ育った「郷土人」が「心」で共感するもの

と3分類し、生活文化を物から心で、外面から内面に至る把握、最終的に共属・共感意識を共有する人々による郷土研究の重要性を説いた。近代化論からいえば、内発的な自己認識のあり方に帰着し、必然的に自文化研究とそれぞれの地域の生来の郷土人、ネイティブの人々により醸成された異文化との比較研究が要請されることになる。

柳田がいう民俗の国際的な比較総合をインターネット社会化した今日、どう考えるかは大きな課題であるが、ここでは柳田の分類から見ると、民具、民芸は一義的には有形の物質文化、物に現れた表象ということになり、人々の心意、精神文化に収束する民俗との関係性が問われることになる。

3. 渋沢の民具研究－共同研究による一級の資料の作成

渋沢敬三の造語である民具は、一般庶民が、その日常生活の必要から、製作・使用してきた伝承的な器具・造形物の総称（『民具収集調査要目』1936）と定義される。渋沢は、日本近代資本主義の父と称される渋沢栄一（1840～1931）の嫡孫であり、19歳の若さで祖父の期待を負い渋沢宗家・爵位（子爵）を継いだ。祖父のモットー“論語と算盤”、学問と実践の両立を生涯貫き、自らは第16代日銀総裁、幣原内閣の大蔵大臣まで務めた経済人でありながら、学問を陰で支える裏方として、第一級の資料を学界に提供、また各種の援助を行った。

渋沢の学問に対する考えの一面は“ハーモニアス・デベロップメント”という言葉によく示されている。共同研究・学際研究の重要性を説き、早くに1921年、仲間とアチック・ミュージアム（屋根裏博物館）ソサエティを設立、戦後は九学会連合を組織して対馬調査に臨むなど、日本の人文科学ではなかなか実効性の上まらない共同研究を組織・推進した。また、「論文を書くのではない。資料を学界に提供する」（『豆州内浦漁民史料』）と自らの解釈・論考を提示するのではなく、あくまで学問の黒子に徹し、1934年日本民族学会の設立に尽力するなど斯学の振興を多方面から支援した。学際的であるのはむろん、正確な資料を残すために時代の最先端の技術を導入したことは、足半の調査に、レントゲン撮影を試み、当時はまだ貴重品扱いであったカメラ、映写機を積極的に導入し、今日アチック・フィルムと総称される民俗映像資料を残したのである。

もともと生物学志向だった渋沢の学問の特徴は、柳田の民俗学と較べるとわかりやすい。漁民・漁村を主なる対象（→農民・農村）、有形・物質文化である民具に注目（→精神文化・心意伝承）、文字・非文字にかかわらず原資料を重視（→口頭伝承・民俗語彙の重視）、共同研究を推進（→柳田個人による解説）、索引・絵引き作成、博物館建設など資料公開を積極的にはかったことなどがあげられ、常民生活に関するあらゆる資料の収集・整理を研究者の

複数の視角、共同作業により、また最新の機器の利用もはかり可能な限り正確に記録し、その資料の利・活用に対しては公開・公平性を図ったのである。

しかし、両者のパーソナリティはかなりの違いを見せる。共にダンディでありながら温容とした渋沢の還暦記念のポートレイトをはじめ西郷どんのような着流し姿、それに対して柳田は世にいう白足袋の思想である。渋沢と写っている人々の写真は笑みが見えるのに、柳田と写っている人々の表情は硬い。一方は新華族の出であり、一方は日本一小さな家の出身であるのにその姿勢が逆転している。これは偶然の結果ではなく、渋沢の人間性、映像に対する取り組みがその背景にあることが近年の研究で明らかになってきている。

柳田が、文学→農政学→民俗学と展開したのに対し、渋沢が生物学的思考を持続し、銀行家など実業の世界と学業を並行させていたのも大きな違いと言える。柳田と渋沢の学問の性格と意義については、早くに敬三の二高時代の友人、有賀喜左衛門（1897～1979）が柳宗悦をその間におき、民俗－民具－民芸の連関から説いている（『一つの日本文化論』1976）。

近年では、柳田の『明治大正史 世相篇』、『明治文化史 風俗編』と敬三の編著『明治文化史』の生活編と社会・経済編の内容を仔細に比べ、近代化の中での常民生活の実態を描く共通項はあるものの両者の志向の違いを指摘する原田健一（「モノをめぐる渋沢敬三の構想力」『国際常民文化研究機構 年報』1 2010）の論などが行われている。

油井常彦は有賀も登場する旧制二高での渋沢の3年間は、彼に真・善・美、ヒューマニズムと教養を刻したといい、敬三の「私は真なるもの、美なるものにひかれる」の言葉を引き、事実をたくさん集める実証主義に繋がったとし、善については何が善であるのかは難しいからと語らなかつたと指摘している。（『歴史と民俗』30 2013）佐藤健二は人間として気高い心持を持つ、総合上の美として、渋沢は「チームワーク」、「ハーモニー」の語を適用したという。渋沢の人当たりの良さは、決して生来ではなく努力の賜物であったといえる。（同『歴史と民俗』30 2013）

戦前に高等教育を受けた青年たちは、世俗的な金・権力・快楽を超えた真・善・美に価値を認め、それを求めることが幸福であるとするドイツの形而上学、観念論哲学の影響を多かれ少なかれ受けていた。真・善・美へ対する希求とその表れが文化であり、芸術・学問・宗教がそこに至る道として考えられた。戦後、文化という言葉はアメリカの文化人類学的な語用の影響もあり、生活の全体、生活文化であるとの見解も徐々に普及していく。早くに庶民の日常性、生活文化に着目した柳田・渋沢・柳はこの意味でも先駆的であった。

実業家である渋沢自身は学術方面では表面には出ず、宮本常一ら研究仲間を作りその基盤づくりに尽力した。アチックミュージアムの収蔵民具は1937年、渋沢と高橋文太郎・今和次郎の尽力で保谷市にある民族学博物館に移され、1962年の閉館後、その民具標本約47,000点は国に寄贈され、文部省史料館を経て現在、国立民族学博物館に移され日本常民の生活を再現する一大コレクション資料として収蔵・展示され今日に至っている。渋沢は、一級の日本人の生活資料を後世に残したのである。

4. 柳宗悦の民芸運動－生活の中の用の美

民芸とは柳宗悦が、民衆的工芸を指して用いた言葉である。柳自身の言葉を借り、その対象と意味を示しておく、

民芸とは一般の民衆が日常用いる工芸品を指すのであります。即ち、日々の生活を助ける実用的な器物の世界をいうのであります。それゆえ生活の必需品であって、決して生活を離れた趣味品とか、骨董品とかを意味するのではないのであります。民芸品が重要な意義を齎らす所以は、これら日常の器物に、一番民族性の直接的な表現があるからであります。民芸品の貧弱な国は、やがて国そのものの文化の低いことを意味します。それに民芸品は実用品であり、いわば働き手であるため、必然に健康な性質が呼ばれてくるのであって、この健康性ということこそ、やがて民芸の大きな美的内容を形造るものであります。(下線、筆者)

柳宗悦「北支の民芸」1941年1月25日放送講演(全集15巻所収)

よく知られるように、渋沢とアチックミュージアム同人による初期の収集品はおもちゃであり(河岡武春「アチックのおもちゃ時代」『民具マンスリー』)、いわゆる民具の蒐集と研究に目が注がれるのは、同人の早川孝太郎に奥三河の花祭りを案内されたことを契機にしてからである。有形文化である民具と民芸の差はどこにあるのか、ここでは問わないことにするが、三者がそれぞれの立場を主張していた戦前期、染木煦は、民芸品は民具の一部に含まれると明確に指摘した。

民芸は鑑賞を前提とする。民具の内、鑑賞に適する物を取捨選択して民芸品と称へ、近時、好事家の玩ぶところ、結句玩弄物となるに過ぎず。民具は然らず、其の物の美醜と新旧を問わず、又、健康的なると不健康的なるとを訊ねず、凡そ生活に必需のものはすべてこれを民具とする。

『北満民具採訪手記』1941

柳田の民俗学と柳の民芸運動の関係は、一度だけ『月刊民芸』での対談(1940. 3.22)があるものの、双方誤解が解けず、その後会い交わることなく平行線で終わったという。この時、柳田は民俗学を「過去の歴史を正確にする」学問とし、過去ではなく将来を射程におくという民芸運動に対して木で鼻をくくったような対応をしたという。その背景には、沖縄の方言問題に対する柳の政治的な発言があったという。(池田敏雄「柳宗悦と柳田国男の不親切」『民芸手帖』260 1980)

このように柳田・渋沢・柳の三者の視角・活動は、それぞれ柳田―「民俗学」、渋沢―「民具研究」、柳―「民芸運動」と名づけられるような性格を持つようになり、民俗・民具はその性格を内包しながらも運動の名にはなじまず、民具は民具研究にとどまっていたが、民具学としての定立に田辺悟は言及している。(『民具学の歴史と方法』2014) 三者は隣接しながらも互換的とは言い難い関係性を有していたのである。

しかし、この三者に直接深く関係した有賀喜左衛門は、「何人も見るべくしてみなかった日常平凡の事象の中に生活の基本があることを指摘した点で共通していた」(『一つの日本文化論』)と指摘する。有賀は、学生時代、朝鮮に対する民族文化抑圧政策に抗議していた柳宗悦の影響を受け、東京帝大美術史専攻では朝鮮美術の研究に取り組み、「新羅の仏教美術」として卒論をまとめた。その後、柳田門下となり、1925年には、岡正雄とともに『民族』創刊に協力している。戦後は、東京教育大学で農村社会学を講じ、アチック・ミュージアムの後身、日本常民文化研究所の運営に尽力するとともに、1975年成立の日本民具学会では初代会長を務めた。

ここでは庶民の日常性、常民の生活文化に着目した三者の関係を、その対象とする領域、性格などから以下のように纏めておきたい。

柳田國男		渋沢敬三		柳 宗悦
民俗	>	民具	>	民芸
民俗学	—	民具研究	—	民芸運動

5. 「民俗」・「民具」・「民芸」と私

美と生活とを結ぶものこそ工芸ではないか。工芸文化が栄えれば文化は文化の大きな基礎を失ふであろう。なぜなら文化は、何よりもまず生活文化でなければならぬからである。
柳 宗悦『工芸文化』 1942

私は国立大学で初めて民俗学講座を開設した東京教育大学文学部史学方法論教室で個別科学としての民俗学を学んだ。専任教官は、直江広治・竹田且・宮田登であり、日本史教室から和歌森太郎・桜井徳太郎先生が参加し、柳田の学統に連なる錚々たる教授陣であった。教室は考古学とともに2専攻からなっており、国分直一・増田精一・岩崎卓也先生からは物質文化を見る目も教授された。その一方、学園紛争の余燼がくすぶる中、野の学・民俗学の経世済民の志を宿して各地を旅した。こうした中、山形県米沢市六郷町で農村の未来は教育にありと私費で幼稚園を設立、また農村の将来は過去を見据えてこそ開かれると、見捨てられていく農具を貰い受けやはり私設の「がらくた館」を建てていた篤農家・遠藤太郎氏との出会いが、民具と私との邂逅であった。手探りの民具の整理の中で仲間と物質文化研究会を立ち上げ『がらくた』というガリ版の冊子を作っていたが、それが日本常民文化研究所の河岡武春先生の目に留まり指導を求めることになった。民具研究の草創期でもあり、学会成立時には、有賀会長以下、宮本常一・宮本馨太郎はじめ、岩井宏美・木下忠ら大先輩が並ぶなか、最年少の幹事として加えてもらった。

こうして学生時代から40年余の米沢通いの中で私は、二人の民芸的作り手と出会い、親交を重ねてきた。(佐野賢治「置賜通い」『あるく・みる・きく』247 1987)

その一人陶芸の水野哲氏は、上杉鷹山が財政再建のために興した御用窯、成島焼に萩・唐津・上野焼などで修行した技法を加味し、成島の地で米沢の土、廃屋の茅、リンゴの芯など地元産の陶土、釉薬のみを使い、手回し、足けりの轆轤で「米沢焼」鳴洲窯として、明治期に廃窯、大正期に再興後、再び廃窯した成島焼を1975年から再再興している。(「やきもの断想—成島焼との出会い—」『がらくた』7 1977)

柳宗悦は、この成島焼について、

この窯の名は広く知られていない。また、広く知られるにすれば、質素なものばかり焼く。しかし出来栄えからすると窯の少ない北国では大事にされていいと思う。手法、様式に別に変化はなく黒釉一式である。火の具合で海鼠釉になると景色が出る。形確かで骨っぽい。都会では有てない特権である。(中略) 長型丸型の水甕、片口、飯鉢、平鉢、土だら、切立

等いう名は地方窯に相応しい。場所は米沢市に近い。詳しくは南置賜郡広幡村にある。どの系統の窯か歴史は審らかではないが、作風からすると本郷の窯と兄弟である。

「現在の日本民窯」『工芸』39 1934 (全集 12)

と高く評価している。

成島焼は今でも農家の漬物甕として、日常生活の中で使われているのを見ることができ。米沢地方の夏野菜の浅漬け、「三五八漬」(塩3麴5米8の割合)には木桶よりも成島焼の方が塩加減がよく出て重宝するのだという。成島焼には、湯たんぽ・尿瓶・飯の湯通しなど雪国の暮らしぶりをうかがわせる雑器が多く、まさに日常生活に密着していた(写真1)。



写真1 成島焼 置賜民俗資料館

もう一人は染織家(伝統工芸士・置賜紬)の山岸幸一氏である。市内の米沢織の織元の次男に生まれた氏は高卒後家業につくが機械生産の反物に疑問を持ち、結城紬など手織り世界に魅かれ、草木染色家、山崎青樹氏に師事、染と織の技術を身につけた。その後、アルカリ性を帯びた濁りの無い自然流水を求め米沢市郊外の赤崩に工房を構える。山岸氏は染料となる紅花・藍などから山繭まで自ら栽培、飼養し、草木や蚕と会話しながら草木染を仕上げ、糸に対して気後れしなくなったときに織りを始めるという(写真2)。



写真2 機を織る山岸氏と山繭

山岸氏は、当地に特徴的に分布する草木供養塔の拓本の掛軸を自身の「カミさま」として

床の間にかけて、「心豊かな貧乏人」をモットーに染織に励んでいるが、中でも寒中湿度が少ない2月、それも真夜中に冷やし染めする「寒染紅花」の染色で知られている。煮染とは違う風合いは素人目にもわかり、呉服商はもとより反物を求める個人の中にはわざわざ工房を訪ねその過程を実見して納得し帰る人もいる。

二人に共通するのは何よりも郷土、地元米沢の人文・自然環境が培った風土に根ざし、国内のみならず広く世界に関心を向け、技の向上に意を用いていることである。また、作り手と使い手との意思疎通が、相互に「モノ」を通してできる関係を築いており、それぞれの作品に反映されていることである。私も日常的に水野氏の焼き物を使っている。気心が知れ、当方の意も汲んで焼かれた器物での飲食は一味もふた味も違うのは確かであり、柳のいう生活の中での工芸、用の美を体感するささやかながらの実践をしている。(写真3)



写真3 我が家の米沢焼と愛用の酒器

ところで、遠藤太郎氏の「がらくた館」はその後、地元の農民たちが役員となって設立した(財)農村文化研究所付設の「置賜民俗資料館」となり成島焼コレクションも含む約一万点の民具を収蔵している。小さな研究所ではあるが、毎夏、農村文化ゼミナールを主催し、2014年の夏で26回を数えるが、昔話研究の一人者・故武田正、有機農業家・星寛治、そして私と、3人が常任的に講師を務めながら関係者を招き話題を提供してもらい民俗学的角度から農業問題はじめ地域の課題を取り上げ、論議する場となっている。星寛治氏は『地下水』の同人、詩人でもあり、宮沢賢治の農民芸術をまさに体現している人でもある。水野・山岸両氏も常連である。

農村文化研究所に集う人々の活動は、郷土人による郷土研究を地で行く実践といえ、そこでは、「民俗」－「民具」－「民芸」は生活の中に息づいているものとして一体として捉えられてきたといえる。私はその一端に触れえたことを実感している。

6. 郷土研究から世界常民学へ

今回取り上げた柳田の「民俗」、渋沢の「民具」、柳の「民芸」はじめ、庶民の日常生活、「民」への関心は、近代化という西欧文物の圧倒的な攻勢に対し、伝統的な自文化を軸足にしつつ、その流れに対抗・対応し、さらに新たな意味づけを加える志向では共通していたが、それぞれの対象のとらえ方、望まじきあり方については異同があった。いずれにしる三者の

生活文化への眼差しとそれぞれの認識は当時としては斬新であったばかりでなく、今日新たに注目されている庶民の日常生活を対象とする学問、日常史・history of everyday life 研究に対しても多くの示唆を与え、またグローバル化の中、ポストモダンから近代化の途次にある国々まで、世界の人々の生活文化が均質化する一方で個別性も持続し並行する今日、庶民の日常性、生活文化に注目する現代的意義を問う契機になると考えられる。

私の所属する神奈川大学日本常民文化研究所は海民研究と並び民具研究を研究の二本柱とするが、さらに文科省の認定を受け「国際常民文化研究機構」の拠点として、国家や民族の枠組みを超え、いずれの社会においても大多数を占める庶民層を「常民」として概念化し、等身大の生活文化を総合的に調査・研究・分析する方法論を確立し、多文化共生社会といわれる現代社会にあって、真の国際理解・異文化理解に資することが求められている。民具は可視的な物質文化であるだけに、言葉の壁を乗り越えて、国際的な常民文化研究の最適の資料となる。インターネットも利・活用できる IT 社会にあって、柳田の世界民俗学の構想も夢ではなくなったのである。今日、世界全体の幸福の実現、逆に最も不幸をもたらす戦争をなくすには、遠回りのようでも国や民族の境界を越えてお互いの生活文化を知り、理解しあうために“民の発見”の視点を再び見直す必要があるのではないだろうか考える。この拙文を、日中戦争の最中、満州の庶民生活への眼差しを『北満民具探訪手記』で著した、染木の言葉で結びたい。

民具は世界的に普遍性を持ち、政治の埒外にある。(中略) わが日本の人々もそういう苦い経験を味わっている筈である。著者はそれを思い、政治、時代に最も影響されがたい、もっとも簡素な民具と、それを作り成した風土、及び無害且可愛の物を記述せんとしたのだった。
染木煦『北満民具探訪手記』復刻版 1986 より

*本小論は2014年7月5日、南山大学人類学研究所で開催された5大学研究所連合公開研究会「民具と民芸」における発表の要旨である。内容が広範にわたり、又、当日はパワーポイントを使用したために、発表意図が散漫になってしまった感がある。この研究ノートでは、筆者が述べたかったことの要点を報告させていただいた。

参考文献

有賀 喜左衛門

1976 『一つの日本文化論』、中央公論社。

鶴見 俊輔

1976 『柳 宗悦』、平凡社。

芹澤知広・志賀市子(編)

2008 『日本人による中国民具収集—歴史的背景と今日的意義』、風響社。

丸山 泰明

2013 『渋沢敬三と今和次郎—博物館的想像力の近代』、青弓社。

Research Papers of the Anthropological Institute Vol.2 (2015)

前田 英樹

2013 『民俗と民藝』、講談社。

武田晴人・由井常彦

2015 『歴史の立会人—昭和史の中の渋沢敬三』、日本経済評論社。

Keywords

Folkimplement, Folkcraft, Folklore

折口信夫の造形伝承論

小川 直之 (國學院大學折口博士記念古代研究所)

キーワード

折口信夫、造形伝承、澁澤敬三、民俗学、民具研究

1. 折口信夫と澁澤敬三

この2人がどのような経緯をもって出会い、どのような交流をもったのか、今後調べてみなければならないが、澁澤敬三は『折口信夫全集』の月報第30号(昭和32年3月)に「なつかしい折口さん」という一文を寄せている。「折口さんについて私が先ず思い出すのは花祭のことです」という言から始まり、「特に花祭に憑かれたようにこの山中を訪れ、更に信州の遠山や新野、又遠州の西浦等へ足をのぼし、当の早川さんをしのぐ程歩き廻つたのが折口さんであります。同時に折口さんも又澤山の人々をこの方面へ誘い込んだのでした。私も何回か御一緒致しました」と、折口と花祭とこれを伝える村で一緒に過ごしたことがあるという。さらに、「折口さんは私の主宰して居たアチックへもよく来られ、つつしみ深い挙措の中にもれる茶目気から、新蒐民具等を只見るばかりでなく、じかに身につけて喜んで居られました」と、折口は澁澤邸に置かれていたアチック・ミュージアムへも足を運んでいたことを述べている(澁澤 1957: 1-2)。

澁澤がいう花祭とその村で折口と一緒に過ごしたというのは、昭和5年(1930)1月の園村(東栄町)足込の花祭りである。「原田清日記」によれば、4日朝に、澁澤敬三、今和次郎、折口信夫らはすでに現地入りしていた早川孝太郎らの出迎えを受け、原田清宅に行き、原田宅で「信州山そば」などを食べている。この時に折口は、色紙2枚、短冊1枚に歌を書いているようだが、12時前には本郷に出て、大崎屋で中食をとった後、夕方から「足込長畑北原」の花祭を見学している。見学は翌5日まで続き、「清等澁澤、早川、折口氏等午后三時迄足込ノ花見物し」、夕方から大崎屋まで帰り、早川、折口、澁澤、宮本の4人が残って、原田清らと「民俗学談ニ耽ル」とある(刈田 2002: 36-39)。

2人は昭和5年1月4、5日とともに足込の花祭を見学し、5日の晩には早川孝太郎、宮本(勢助か馨太郎か¹⁾、原田清を交えながら民俗学談義を行っている。明治20年(1887)生まれで当時43歳の折口信夫、明治29年(1896)生まれで34歳の澁澤敬三、明治27年(1894)生まれで32歳の原田清、明治22年(1889)生まれで41歳の早川孝太郎らは、奥三

¹ この時には宮本勢助とその子息である馨太郎と一緒に現地に行っており、日記の記載は「宮本」だけなので、勢助なのか馨太郎なのかは不明。

河など天竜川流域の民俗や暮らしぶりなどについて、熱く語り合ったのではなかろうか²。

折口と澁澤は、これ以前から知己があったのか、それとも足込の花祭での出会いが所謂「松坂の一夜」となったのかは不明だが、折口が仙石原から澁澤に宛てた昭和5年(1930)4月1日の封緘はがきには、「先日来、度々失礼いたしました。おわびおわび。袖山君今日、松本から帰りましたよしの、そのあしで俄にこゝにまゐりました。さうして話を聞きますと、私のぐずぐずしてゐるうちに、急にかはつた事情がふつてわいてまゐつたのです」「御心いれの件、数年後にのぼしてやつて頂く外はない様な事になりました」「袖山君のため、こゝの処はからうてやりたいと存じます。いづれ御目のまへに、いろいろ」と書いている(折口1930b<1998: 137-138>)。この手紙は、後に澁澤邸に住み、アチック・ミュージアムで文庫や『アチック・マンスリー』の編集などに携わる教え子の袖山富吉(國學院大學高等師範部を昭和10年に卒業)を澁澤のもとに置いてもらうことを頼んでいたが、事情ができて、数年後にして欲しい旨を依頼するものである。昭和5年(1930)の春には、折口と澁澤との間にはこれだけの信頼関係ができていたのがわかる。澁澤は昭和8年(1933)9月に書いた「アチックの成長」(澁澤1933<1992: 13>)の中で、アチックの藤木喜久麿が柳田國男の委嘱で作成した東京府庁所蔵の近藤富蔵『八丈島実記』の謄写本1部を折口信夫に贈ったと述べているが、これは現在も國學院大學折口博士記念古代研究所に所蔵されている。

折口信夫といえば、国文学の研究や民俗学、なかでも日本人の精神世界への関心が強く、物質文化・民具への関心はなかったように思われがちだが、折口が昭和初期に澁澤とつながりを持ち、このように交流を深めていったのは、折口が提唱した文化理論あるいは文化研究の指標を検討すると、そこには物質文化を構成するモノから発想し、論理だてを行っている理論がいくつも存在しており、折口にはこうした思考性向があったからではないかと思う。折口は、柳田國男については『古代研究』民俗学篇2の「追ひ書き」や、戦後昭和22年刊の『民俗学新講』に「先生の学問」を寄せるなど、自分の研究と結び付けながら述べているのに対し、澁澤やアチック・ミュージアムについては寡黙だったといわざるを得ない。しかし、澁澤がいうように、折口がアチック・ミュージアムをよく訪ね、藁帽子を被っておもしろがり、澁澤やアチックの同人たちと一緒に写真に写っていることなどからは、約10歳若い澁澤を近くに感じていたように思える。

本稿の目的は、折口信夫がいう「造形伝承」論を検討するとともに、折口の文化理論構築にどのようにモノへの視点関わっているのか、その発想のあり方も含めて明らかにすることにある。それは今後の物質文化、民具研究の方法論的な検討に資するため、ここでは最初に澁澤らによる民具研究論について若干振り返って、その特色を述べ、その後で、折口の「造形伝承」論とモノからの発想を検討していく。

² 昭和6年(1931)7月には設楽民俗研究会の結成と雑誌『設楽』の発刊が始まっている。本郷町長をつとめる原田清は『設楽』創刊号で「廻り遠くても手間がとれても結局は郷土の研究に第一歩を置かねば吾々の生活は良くなって行く可能性がないことになるのではないでせうか」と述べている。こうした考え方と設楽民俗研究会の結成、雑誌『設楽』の発行という活動は、折口、澁澤らとの交流が無関係ではなかろう。

2. 澁澤敬三の民具研究論

戦後の高度経済成長によって日本人の生活様式、なかでも日常の暮らしを組み立てるためのモノのありようは大きく変化したといえよう。端的にいうなら、私たちの生活にはすでに自らが手作りした道具類は殆どないといえる。これがモノをめぐる現状であるが、アチック・ミュージアムでは昭和11年(1936)に『民具蒐集調査要目』を出版し、民具の蒐集と研究のための基準と分類を示し、この中で民具とは「我々同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」(アチック・ミュージアム 1936: 1) という定義を行った。この定義の文章をどう解釈するかについては、いく通りもあろうが、素直に読んでいくなら、「我々同胞が」は一人の個人がというのではなく、私たち日本人がとか、同じ地域で生活する人たちがという集団性を示している。「日常生活の必要から」というのは、説明するまでもなく生活をおくるために必要となるということである。判りにくいのが「技術的に作り出した」という表現で、わざわざ「技術的に」と言っていることである。「作り出した」という言い方には、当然ながら作るための技が含まれ、その技がなければ作ることはいわけて、この前に「技術的に」というのは、屋上に屋を重ねる表現となる。であるなら「技術的に」は「我々同胞が」自らの技で、と読むことになり、自らの技で作りに出した、つまり手づくりした身の回りの道具が民具であるという定義である。

こうした「民具」の概念をめぐる議論は、昭和50年(1975)11月に日本民具学会が設立された後の1980年代を中心に、「準民具」「在来民具・新民具」「伝統民具・流行民具」「自製民具・流通民具」など、さまざまな用語とともに「民具」概念の再検討が活発に行われている。このことについてはすでに検討を行ったことがあるのでここでは取り上げないが(小川 1991: 335-353)³、要は高度経済成長によって日常生活の中のモノのありようが大きく変化し、当時の民具研究は、アチック・ミュージアムによる民具概念では立ちゆかなくなっていたのであり、民具概念を拡大する方向で議論が進んでいたといえる。いうまでもなく民具研究というのは、庶民生活のなかに存在し、用いられるさまざまなモノの中から「民具」を発見、抽出して行う研究であるので、研究対象の「民具」が無前提に存在するわけではないからである。こうしたことは「民具」だけのことではなく、「民俗」「民芸」「民謡」「民家」「民俗芸能」などの術語も同じで、これらはいずれも、庶民生活のなかから特定の属性をもつ事柄やモノを発見、抽出し、これを研究対象として位置づけるための用語である。言い換えれば、これらの用語は生活や文化を認識し捉えるための視点であり、そこに生活や文化をめぐる哲学や思想が存在しているのは当然のことである。

生活のあり方が変化すれば、これら術語の概念や概念を構築する哲学や思想が変化していくのが当然であろうが、少なくとも「民具」という用語が術語として定立されようとしていた時代には、昭和11年(1936)の『民具蒐集調査要目』の民具概念で庶民生活の実態や歴史などが把握でき、対応できたと理解することができる。こうした時代に澁澤敬三は、民具研究のあり方、換言すれば民具研究の目的を「アチック根元記(二)」で次のように述べて

³ 民具の概念など研究の方法論に関しては、直近では田辺悟『民具学の歴史と方法』(2014年12月、慶友社)でも取り上げられている。

いる。それはアチック・ミュージアムで足半研究が進む中で気づいたのは「民具研究は個体或は同一種の民具の研究より更に進んで異れる民具との比較研究に至り、茲に初めて我々と民具との交渉に関する重要な理法を見出し得ると云ふことであつた」のであり、そのためには次の7項目の研究が必要であるという（澁澤 1935: 1）。

- (一) 民具研究に際しては先づ第一に民具個体（同一種）の諸相を研究して其の根本的な特質を正確且十分に理解しなければならない。
- (二) 与られたる一つの民具は我々の特定の生活様式と自然的環境とに基き、その発生、持続、又は変化性に就て一定の基本的法則に支配されて居ると思はれるが之の法則の考究は第二に来るべき問題である。
- (三) 次いで如上の生活様式自然的環境及時間に従つて起る法則が異れる各種の民具間の関係に於て夫々分化作用異化作用又は同化作用を惹起して居ることは出来得る限り明瞭にしたい。
- (四) 変化そのものの性格に就いても一般的なものから特殊化された複雑なものへ自然的且つ系統的に変化する場合と偶発的且つ無機的に因子の附加さるゝ場合とに分ち注意研究することを要する。
- (五) 相異つた民具類に適用さるゝ類似現象を究め、同時に民具類の相互間に於いて各種の関係が成立するとして、此所に見出すべき幾多の概念を整理することに努める。
- (六) 民具個体の短き寿命と之を造出する我々の記憶及び技芸との関係、並に之に伴ふ幾多の誤差を考慮しつゝ概念として永き生命を有する民具を明瞭に把握すること。
- (七) 民具名称の発生変化分布に注意を要することは勿論であるが更に名称附与の根本的法則を把へることが出来れば幸である。

『アチック・マンズリー』第2号の巻頭に、1頁にも満たない短い文章で述べているので抽象度が高いが、(一)から(七)は(一)に「先づ第一に」、(二)に「第二に」ということから、研究課題の手順を念頭に置いているのがうかがえる。その上で、まずは個別民具がもつ根本的な特質を理解し、その民具を生活様式、自然環境と関連づけながら、その民具の発生、持続、変化を捉え、これらについての基本的法則を明らかにすること。そして、こうした法則が、他の民具類との関係性の上に、どのような分化、異化、同化を起こしているのかを明らかにすること。民具がどのように変化するのか、その傾向についても一般的な場合と特殊な場合とがあろうが、必然的に系統的な変化をする場合と、偶発的で単独的な変化の要因が存在する場合とがあるので、両者を見極めながら変化を捉えていくこと。(五)はなかなか理解が届かないが、これは(二)から(四)について別の民具で確認して類似現象の存在を見極め、関連する民具に存在する(二)から(四)を関連づけながら検討し、その関係の中に現れる概念(論理)を整理することであろうか。(六)は、民具は恒久物ではないので、いずれ壊れたり廃棄されたり、つくり替えられたりするので、これをつくる人たちの記憶と技芸との関係、つまり技術伝承のあり方を明確にするなかで、このようにつくるのだという記憶(言説と理念)と実際の技との誤差を考慮しつつ、概念として生き続ける民具を把握することと理解できる。最後の(七)は民具名称のことで、その発生、変化、分布に注

意し、名称付与の法則を把握することである。

この文章を執筆するにあたって澁澤は、各項とも具体的な事象があり、それをイメージしながら止揚していると思われる。当時、進展していた足半研究を振り返ることで、澁澤がイメージしている具体事象がとらえられるかわからないが、全体を見て言えるのは、民具の変化や技術伝承のあり方は民具研究の目的に加えてはいるが、民具研究によって庶民生活史の叙述を行うという目的は、この時点ではあまり考えていなかったように思える⁴。課題の力点は、生活や環境との関係性、さらに民具相互の関係性、これらの関係性のなかで起こる発生、持続、変化という時間軸上での民具存在の法則にあったといえよう。

この時代の澁澤の民具研究に関する考え方については、礒貝勇が「あしな研究のころ(一)」で述べている。これを読むことで、先の澁澤の7項目の課題は理解しやすくなる。礒貝は、澁澤の民具研究の課題は「ぼくたちはこのお話を先生の文化構造における分子構造式理論と大げさによんでいた」といい、澁澤の考えを紹介している。それは文化構造を有機化学の分子構造式にあてはめた説明で、エチルアルコールとメチルアルコールは、分子式は同じだが構造式が異なるように、文化というのは文化要素がどのように結合しているかが問題となる、という内容である(礒貝 1969: 1)。礒貝の言に従うなら澁澤の民具研究論は文化構造論的研究に主眼があったといえよう。

アチック・ミュージアム、後の日本常民文化研究所における民具研究については、たとえば日本における物質文化研究の方法についての学史的な検討も行っている祖父江孝夫・大給近達・中村俊亀智・大塚和義「物質文化研究の方法をめぐって」では、アチック・ミュージアムの背負梯子や足半の研究が顕著な成果をあげられなかったのは「その方法の中心は物質文化を構成するひとつひとつの要素についてその分布をたしかめ、その要素についての呼称や使用法、つまり要素についての伝承を全国共通の項目別に調査していくというやりかたを採用した点にあった」、そのため「作業的には文字通り項目別に分担してまとめていく方法がとられている」。結果、「これは要するに「型わけ」の仕事であって、その段階において追求を終えてしまっているのではないかと思われる点に大きな難点がある」と評している。組織的な文化研究、物質文化研究としては先見的であるが、これは柳田國男のもとで行われた「山村生活の研究」や「海村生活の研究」と同じく、断片主義的な研究であったというのである(祖父江他 1978: 293-294)。こうした評価からいうなら、先にあげた澁澤敬三の民具研究の課題をめぐるとの見通しは、アチック・ミュージアムの民具研究には十分に反映されず、成果をあげられなかったことになる。

しかし、澁澤が『アチック・マンスリー』第2号に「アチック根元記(二)」を書いてからは、昭和10年(1935)10月10日の同誌4号に高橋文太郎が「民具の研究」と題して、民具に付随する伝承調査の必要性を説いたり、同年11月20日の5号では山本二三丸が「民具に就て」で、民具の分類案を示したり、同年12月30日の6号では礒貝勇が「民具研究の方法」を書いたりしており、同誌35号までさまざまな議論が繰り広げられている(小川

⁴ この時点でというのは、よく知られているように澁澤は、戦後には絵巻物を用いてここに描かれる民具や行為などを分析、叙述することを行っている。こうした研究は、まさに生活史の叙述であり、民具に対する歴史的な関心は強くもっている。

1991: 335-353)。こうした動向のなかで、実際の足半研究などでは、どうして要素主義的な研究になったのかなど、改めて研究史をたどってみる必要があるであろう。

「民具」の概念について宮本常一は、澁澤敬三や桜田勝徳らとの議論を踏まえて自分自身としてはということで7項目を基準にあげている。「二 民具は人間の手によって、あるいは道具を用いて作られたものであり、動力機械によって作られたものではない」、「五 民具は人間の手で動かせるものである」、「六 民具の素材になるものは草木、動物、石、金属、土などで原則としては化学製品は含まない」などの7つの基準である(宮本 1979: 76)。この宮本の民具定義は、高度経済成長期の日本人の生活が大きく変化変容する時代に行われており、ここでいうような民具の衰亡期にあったことからの思いかもしれないが、庶民生活の中のモノの文化のごく一部を「民具」とするという考え方で、宮本はこれを素材にして「根本問題は民具の形体学的な研究にとどまらず、民具の機能を通じて生産、生活に関する技術、ひいてはその生態学的研究にまで進むことに意味があると思う。生産、生活の技術、民具の生態学的な研究は、同時に人間の生態学的な研究にふかいつながりを持つものである」(宮本 1979: 11) という。さらに「民具の研究は民具と民具の持つ技術を通じて人間生活を構造的にとらえてゆこうとするのが最後のねらいになるのではなかろうか」(宮本 1979: 104) と研究目的をいい、また民具研究によって「民衆の日常生活と技術の発達を追求することができる」のであって、「私は民具を通じて文化発展の新しい見方を持ちたいと思っている。そして民具の形態の中に文化発展の様相をも見つけたい」(宮本 1979: 13) と、歴史的には発達史的な指向が強い。宮本の民具概念は、それがどのように作られたのかという製作論を基盤にし、その研究は、民具を自然と人間との関係性の中におくことによって人間生活を構造的に捉える一方、民具を近代の文明化のプロセスに位置づけたい、というように読み取れる。

こうした考え方に対して中村たかをは、民具を用具論的に捉えている。それがどのように作られたのかではなく、その使い途や使い方から捉えていくという見方である。中村は民具研究の目的としては、民具を通時代的な概念として捉えることでの民具史、民具変遷史の叙述と、民具を近代ないし近代を中心とする時代のものに限定し、近代から現代までの民具の様子をきめ細かく分析することの2つがあり、自分は後者の立場に立ちたいという(中村 1981: 10)。

民具研究の現状については、別途稿を起さなければならないが、近年の物質文化研究をあげておこなうなら、大西秀之は社会人類学の立場から、今まで行われてきた、人がモノをどのように認識するのか、あるいはどのように意味づけるのかという言説の分析をいかにして乗り越えるかを模索し、モノと人とが形づくる関係性の、非言語領域の検証を進めている(大西 2014)。また後藤明は、身体と道具の関連性をどのように捉え、理解していくのかに関する研究動向を、そこで示されている分析指標とともに論じている(後藤 2011: 201-218)。これらはいずれも民具学からの研究ではないが、ここで取り上げたのは、これらの研究は大きな枠組みとしては先にあげた澁澤敬三が示した民具研究の課題の(六)につながりをもつのではないと思われるからである。このように判断すると、澁澤があげた7項目の課題は、まだまだ検討すべきことがあるであろうということである。いずれにしても民具研究などの物質文化論は、モノをどのように作るのか、あるいはどのように使うのかという技術論と、そのモノが「歴史」や「文化」「宗教」などのコンテクストのなかでどう位置づけら

れるのかという認識論のなかで進んでいるのが大勢ではなかろうか。

3. 折口信夫の民俗学

折口信夫の造形伝承論という本題に入る前に、昭和10年(1935)頃のアチック・ミュージアムや澁澤敬三の民具研究論などを取り上げたのは、折口は、ほぼ同じ時代である昭和9年(1934)に『日本文学大辞典』で「民俗学」を説明する中で「造形伝承」というカテゴリーを設けているからである。「先づ民間伝承を採訪し、組織するための便宜上、種目を立て、凡そこれを五つの部類に分けて置くことにする。即、週期伝承・階級伝承・造形伝承・行動伝承、並びに言語伝承がそれである」(折口 1934<1996: 162>)という。

折口は「便宜上」といいながらも、こうした民俗学研究の枠組みを提示するのは学問的な体系化をはかる意図に違いないが、これに先だって大正9年(1920)12月10日に國學院大學で行った特別講義「民間伝承学講義」では次のような分類案を述べている。項目の後に記す内容は、各項の説明で述べている内容である(折口 1971a: 25-39)。

精神伝承 民間宗教、宗教家の伝記、神ならびに布教者の奇跡、生き死にに関する考え、他界の考え、靈魂の問題、神社および寺院の問題、神社・寺院に付属した人と土地、講社、宮や寺と撰社・末社・塔頭との関係、叢祠、祭礼、妖怪、医療、物忌み

習慣伝承 一般の年中行事、冠・婚・葬・産のこと、獵師・漁夫の行事、百姓の行事、商人の行事、衣食住、階級に関する習慣的伝承、特殊民

言語伝承 民譚、民謡、童謡、呪文、神拝詞、祭りの囃し詞、諺、謎、隠語、洒落、舌もじり、あさな

表出伝承 自分自身の感情を表すときの固定した方法、遊戯、勝負事、子供の遊び

この講義を行う大正9年(1920)までに折口は、大正2・3年(1913・14)に「三郷巷談」、大正4年(1915)に「髯籠の話」「盆踊りと祭屋台と」、大正5年(1916)には「稻むらの陰にて」「異郷意識の進展」「依代から「だし」へ」など、大正7年(1918)には「幣束から旗さし物へ」「だいがくの研究」「愛護若」「まといの話」など、というように民俗学関係の論文を次々に発表しており、折口の言葉でいえば「民間伝承学」の全体像についての思索を重ねていたと思われる。

ここには「習慣伝承」に衣食住があっても、造形伝承や造形物に関する項目は設定されていない。そして、この後に示される民間伝承研究の枠組みが、大正11年(1922)に啓明会に出したという「民間伝承蒐集事項目安」(折口 1931<1996: 315-331>)で、その中項目までを抄出すると次のようになる。

- 一、信仰に関するもの
 - 1 国家的信仰 2 民間信仰 3 世界観念
 - 4 巫術・蠱術・妖術 5 神社と寺院と 6 叢祠其他 7 祭礼 8 妖怪
- 二、医療・禁厭
- 三、一般風習
 - 1 地方的一般年中行事 2 特殊年中行事 3 婚姻 4 誕生 5 葬儀

- 6 由来不明なるしきたり 7 社会的訓諭の文句 8 町村の交渉
9 衣服 10 食物 11 住家・建築
四、階級制度 1 親方と子方と 2 老若制度
五、口碑・民譚
六、言語・遊戯 1 方言 2 言語遊戯 3 遊戯
七、民謡・民間芸術 1 労働謡 2 民間声楽
八、童謡
九、舞踏及び演芸
十、演劇
十一、影絵
十二、ノゾキカラクリ
十三、従業手工職人の余興演芸
十四、右の外、地方地方の事情によって、特殊事項の加はるべきは勿論なり。

大正 11 年 (1922) の「民間伝承蒐集事項目安」にも「造形伝承」はないが、これは大正 9 年 (1920) の「民間伝承学講義」と、一、三は内容が近く、「民間伝承学講義」の内容を組み替えて「民間伝承蒐集事項目安」の一部に組み込んでいるのがうかがえる。ただし、これらの項目だてを昭和 2 年 (1927) 4 月刊のチャーロット・ソフィア・バーン編著・岡正雄訳『THE HANDBOOK OF FOLKLORE 英国民俗学協会公刊 民俗学概論』(岡書院)の目次と比べると、近似した構成となっており、折口の「民間伝承蒐集事項目安」は岡正雄による翻訳本が出版される前に、バーン編の『民俗学概論』を参照している可能性がある。『民俗学概論』の目次は次の通り(節以下は省略)である(バーン 1927: 1-5)。

- 序章 一 民間伝承 (Folk-lore) とは何か
二 如何にして民間伝承を採集し且記録すべきか
第一部 信仰と行為と
第一章 土地と行為と 第二章 植物界 第三章 動物界
第四章 人間 第五章 人造物 第六章 霊魂と他生と
第七章 超人間的存在 第八章 予兆とト占と 第九章 呪術技法
第十章 疾病と民間医術と
第二部 慣習
第十一章 社会的及び政治的の制度 第十二章 個人生活に於ける諸儀礼
第十三章 生業と工業と 第十四章 暦、齋日及び祭礼
第十五章 競技、運動及び遊戯
第三部 説話 歌謡及び言慣し
第十六章 説話 第十七章 歌謡と譚歌と 第十八章 諺と謎々と
第十九章 諺語的韻語と地方的言慣しと
附録 A 用語篇 B 問題篇 C 印欧民譚型表 D 引用文献

折口の「民間伝承蒐集事項目安」とバーン編著・岡正雄訳『民俗学概論』を比べると、両

者とも最初に信仰にかかわる部を置き、折口の「二、医療・禁厭」はバーン編著の第一部最後の第十章疾病と民間医術と重なる。折口の「三、一般風習」はバーン編著の「第二部慣習」、折口の「五、口碑・民譚」から「七、民謡・民間音楽」はバーン編著の「第三部説話歌謡及び言慣し」と近似しており、折口は、バーン編著『民俗学概論』の三部構成をもとに「民間伝承蒐集事項目安」を編成したように考えられる。折口の手元にあった昭和2年(1927)4月刊のバーン編著『民俗学概論』は訳者の岡正雄が折口に贈呈したものであるが、これには写真1に見るように折口による直筆の書き込みがある。上段書き込みの一番左には「歴史学問である民俗学」、一番右には心意→祈・禁・呪→とあって、最後は「造形」と記している、心意が展開して造形をつくるという着想を見ることができる。

大正9年(1920)の「民間伝承学講義」においても、折口の伝承分類は「精神伝承」「習慣伝承」「言語伝承」に「表出伝承」を加えた4部構成であるが、「表出伝承」という分類は後にはなく、これを除くと、精神、習慣、言語の3部となる。これもバーン編著『民俗学概論』の信仰・行為、慣習、言語という3部仕立てと近く、このあたりから『民俗学概論』の影響を受けている可能性も否定できない。バーン編著の『THE HANDBOOK OF FOLKLORE』のイギリスでの刊行は1914年(大正3年)である。

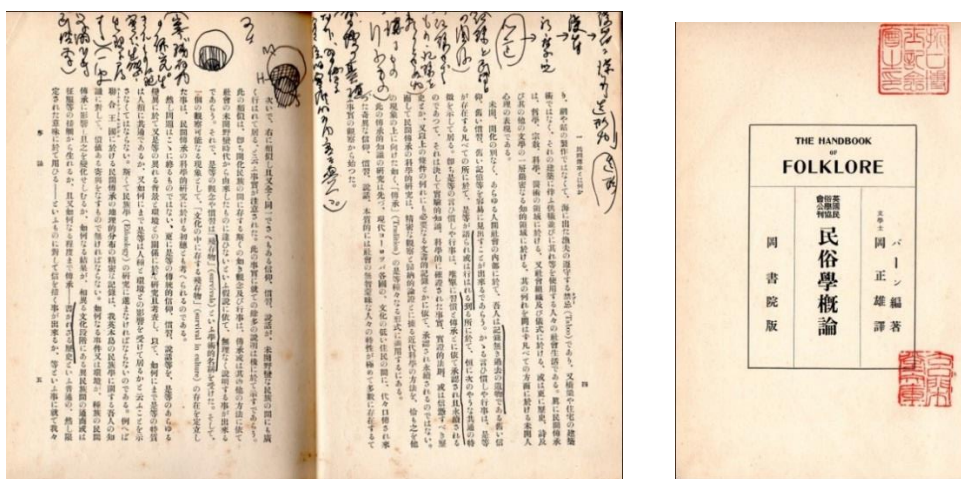


写真1 折口の書き込みがあるバーン編著『民俗学概論』

4. 「造形伝承」の立項とその内容

折口が「造形伝承」の分類を設けるのは、前述のようにこの後、昭和9年(1934)の『日本文学大辞典』の「民俗学」である。その内容検討に入る前に、折口がいう「造形伝承」に対して第三者はどのように理解したのかを見ていくと、早川孝太郎は、昭和11年(1936)3月刊の『アチック・マンズリー』第9号に「一つの回顧」を書き、この中で「たしかはじめは民具に対して、私などは民俗品の語を使つて居た」ことをいい、民具をアチックで懸命に蒐集したことについて次のようにいう。

吾々民族の有つ生活伝統が、汎い意味の言語、行動に表はれた以外に、造形物に写し示された過程への探求であつた。折口博士なども、この微衷に賛意を与へられて何時だつたか年度はじめの相談会に、諸国の正月行事に關した削り掛とか、或は鉦、斧、鉞の

類の蒐集を提言された。現在のアチック収蔵中に、生々しい正月の削り掛が案外に多かつたり、貧弱ながらも、諸国の鉦、鉞が在るのも、斯うしたいきさつの結果もあつた。

民具の多くが経済生活に関係の物が多いこと、而も、それ等を通して、前代の精神生活へのつながりの強かつた事を、如実に識り得たのも、実は集めて後論へられた感があつた（早川 1936: 33）。

早川は、アチック・ミュージアムに正月のケヅリカケが多くあつたり、多くはないが鉦や鉞があつたりするのは、折口の提案⁵でこれらを集めたことを言い、また民具が前代の精神生活とのつながりがあることを知ったのも、民具を集めてみて判ったことだと言っている。早川は、折口とは近い人物であつたが、これは決してひいき目のことではなからうし、折口が言う「造形伝承」の考え方が、それなりの影響力をもったのがうかがえる。

折口は「民俗学」の中で「造形伝承」を次のように説明している。

造形伝承は、寧ろ、造形伝承物と言つた方が適切なのである。近来、その名称の民俗芸術に除外すべからざるものであるところから、右の一部門として加へられることになつたが、他の種目に入るもの、この記述からすれば、芸術的な部分と見るべきものとは、一致しない性質を持つてゐる。彼はすべて抽象的な存在であるにかゝらず、これは具象的なものである点である。而もあまりに具象的で、文学・芸術的なものに対して、技術の側から芸術的と思はれる外には、交渉がないとすら考へられる程である。併しこれと呼び更へて造形伝承といふと、如何にも所謂造形の民俗芸術が含むところの、他の民俗芸術との共通要素を思ひ得ることが出来る。信仰方面が殊に形式に固定した結果、原意を辿ることの出来なくなつたものが多い。それは、主として経済生活が、新しい目的を無限に展開して行つた為であつた。さうした二次的目的を持つやうになる前から、その以後の経済的利用の上まで、一つの繋りが見られる。即、信仰的な扱ひ方である（折口 1934<1996: 167-168>）。

ここで「近来、その名称の民俗芸術に除外すべからざるものであるところ」と言うのは、民俗藝能の会の雑誌『民俗藝術』第1巻11号（昭和3年11月）で特輯として「造型美術」を組み、今和次郎「上州と甲州の民家」、土橋長俊「自在鉤に就て」、木村幸一郎「東京近郊の土神像」などを載せ、同誌第2巻第1号（昭和4年1月）でも「造型美術採集図」として、吉田謙吉「正月の船」、今和次郎「信州諏訪中州村の道祖神」などを載せていること

⁵ 早川がいう折口が鉦、斧、鉞の蒐集を提案したというのは、現時点では推測にしかすぎないが、この時期に折口は奥三河の花祭や新野の雪祭りなどに盛んに出かけていて、鬼の持ち物に鉞があること、また折口の「まれびと」論は、来訪する神である「まれびと」と在地の精霊との問答、「まれびと」による精霊の調伏が重要なことで、その発想は小正月の成木責めにあり、これには鉦や斧などが使われていることと関連があるように思われる。また、斧や鉞の刃には片面は3本、もう片面には4本の筋が引かれていて、この筋には呪的な説明伝承があり、こうしたことを知っていた上での提案かも知れない。

である。これらの記事は「造型美術」と言いながらも、モノとして造形の姿を図示し、その説明は民芸的でも、美術的な捉え方でもないが、折口は民俗藝術に抽象的な造形としての芸能と、具象的な造形としてのモノ（造形物）を考えているのである。モノは技術の面から芸術的ということができ、これを造形伝承という、芸能としての造形伝承との共通要素が考えられ、そこには信仰的な原意を辿ることができる。つまり、信仰的な意味をもった造形が、実生活上の経済的な利用を行うモノに取り込まれたというのである。

「民俗学」の「造形伝承」の説明では、その具体例として建築をあげ、これにはモノ、つまり住居としての造形伝承（技術）と家誉め・室寿の造形伝承（文学）があるし、胴衝き・木遣り・石挽き・踏鞴踏みは技術としての造形伝承というだけではなく、踊りや歌という芸能をつくりあげていることを指摘している。

「民俗学」の中での「造形伝承」の説明は短文で終わっているが、國學院大學郷土研究会の昭和12年（1937）5月27日の「民俗学とは何か」という講義では、「私は民俗に対して、いろいろな伝承に分けることを考えている。言語、行動、周期、階級、心意、造形の六伝承を考えている」（折口 1971b: 85）という。造形伝承を民俗学の一分野とすることは同じで、昭和12年（1937）11月11日には造形伝承の一つとして「かまどの話」をしていて、『折口信夫全集ノート編』第7巻では、これに続いて講義で扱われた「二 刀の話」「三 ほこ、やりの話」「四 枕の話」「五 「ろじ」と「つじ」と」「六 古墳の話」「七 門と垣と」「八 宮門の話」「九 「じょう」の話」を「造形伝承」としてまとめている。

これらのすべてをここで検討することはしないが、「一 かまどの話」を取り上げておくと、これは「造形伝承を今まで問題にしたことがなかったから、今度話してみたい。一つには、民間伝承が、すべて経済から始まって経済関係で終わるという見方が、正しいかどうかの検査の話にもなると思う。柳田先生や私は、フォークロアが経済をもって終始するとは思わない」で始まり、「かまど」について次のような例をあげている。順に列記すると①家は炉が中心で、これは火の神の祭壇で神聖なもので、煮炊きをしない炉もある。②家の火床が炉と「かまど」に二分した。③「かまど」には煮炊きに使わないかまど、時々使うかまど、いつも使うかまどの3種がある。④「かまど」は荒神の祭壇で、神聖な蓋が置かれ、ここに河童をまつところもある。⑤一つの屋敷を「かまど」と算える。⑥吉凶の場合は「かまど」を別にする。⑦奈良では大晦日から庭に「かまど」を設え、この「かまど」で煮炊きしたものを庭の蕨の上で食べた。⑧葬式には別の「かまど」で煮炊きをする場合と常の「かまど」で煮炊きをする場合がある。⑨葬式には、村中の者が葬家に行き、その家で煮炊きしたものを食べる習俗がある。⑩黄泉国の「へっつい」で炊いたものを食べると現世に帰れない。⑪葬式の別火は、村の家が増えていく系統が出来てからのこと。もとは一つの「かまど」から別れた家々で構成されていたので、葬家の「かまど」で煮炊きしたものを村人みんなが食べた。⑫沖縄には三つ石を並べた炉があり、神をまつためのものになっている。⑬次は「かまど」に関連して火を入れる火桶、すびつなどの話をする。

ほぼこれら13のことがらを関連させながら次々に述べているのである（折口 1976c: 395-481）。「かまど」そのものの形状は簡単な説明に留まり、多様な使われ方や「かまど」の意味付けについて各地の民俗情報・伝承事例をあげて説明するとともに、葬式時の「かまど」の別火については、村落社会の歴史的な推移と関連づけながら変遷を説くなど、多角的な把握を促すような説明をしているのである。

ここであげられている民俗情報・伝承事例の豊富さからは、折口の論述は、詩人的な想念とか、恣意的な思い込みと決めつけることは出来ないことが示唆されが、説明の最後には、次には火桶、すびつについて話すと、家の火所ということで連関するものを取り上げるといふ。こうしたところに折口独特の連鎖的思考、あるいは自身がいう「類化性能」⁶に基づく事象の連結という思考が現れているといえよう。このような思考に基づく理論構築には、現在の研究水準では適切とはいえないものも含まれているが、「類化性能」にもとづく論理構築は、いわゆる折口学の特色の一つといえる。

折口が民俗学の枠組みの一つとして設ける「造形伝承」は、『折口信夫全集ノート編』7に収められた國學院大學郷土研究会での講義では、昭和15年(1940)にも続いているが、和田正洲によれば、昭和14年(1939)の講義では、週期伝承、行事伝承、芸能伝承、言語伝承、行動伝承、心理伝承の6分類に改訂していたといふ(和田1984:7-8)。「造形伝承」という枠組みは前景にはない。昭和12年(1937)3月30日に愛知県教育会・民間伝承の会共催講演会で行った「国語と民俗学」という講演では、「民間伝承の種類を私が申す必要はないんですけども」としながらも、民俗学の枠組みの一つに「物を以てする伝承、物体伝承とでも名前をつけて置いてよろしいでせう」と、「物体伝承」という分類を示している(折口1938<1996:265>)。また、昭和13年(1938)9月から11月にかけて郷土研究会で行った「芸能伝承の話」の講義では、従来「民俗芸術」と言っていたことについては、芸術という場合は「民族」と言うべきで「民族芸術」が正しいと訂正している。「民族芸術」も「民俗」であるからというのが根拠である(折口1972:72-73)。このように昭和10年代前半の「造形伝承」などの折口の言説には、訂正や別の用語への置き換えなどがあって不安定な部分もあり、この時代に前景的に考えていた「造形伝承」「民俗芸術」には、折口のなかに概念の揺れがあったようである。

「造形伝承」ということでの折口の具体的な説明は、ここではこれだけに留めるが、やや注意すべきことは、『日本文学大辞典』の「民俗学」の項で具体例として取り上げた建築と、昭和12年(1937)11月に行った郷土研究会講義の造形伝承で最初に例示する「かまど」は、先にあげたバーン編著『民俗学概論』の附録にある「問題篇」には、「五 人工物」の項があり、その具体例に「住屋」「竈」「家具」「料理法及び其の他の家政」「呪術＝宗教的物具の製作」があげられている。この「問題篇」というのは、「観察者に依て採録される諸事項の一個の要略として役立てられたい」(バーン1927:21-23)とあるように、実地調査時の具体的内容案である。その例示の最初が「住屋」で、家の建築をめぐる諸儀礼や住居中の儀礼や俗信などが観察事項にあがっている。「竈」は「竈は祭祀又は儀式の対象であるかどうかを観察せよ」で観察事項が始まり、竈をめぐる信仰や俗信があがっている。『民俗学概

⁶ 折口は『古代研究』民俗学篇第二(昭和5年6月、大岡山書店、『折口信夫全集』3所収)の巻末に、それまでの自伝的な文章ともいえる長文の「追ひ書き」を書き、その中で「比較能力にも、類化性能と、別化性能とがある。類似点を直観する傾向と、突嗟に差異点を感じざるものとのである。この二性能が、完全に融合してゐる事が理想だが、さうはゆくものではない。私には、この別化性能に、不足がある様である。類似は、すばやく認めるが、差異は、かつきり胸に来ない」と言っている。

論』の附録「問題篇」と造形伝承の具体的例示には、事項の一致があるわけだが、これは偶然の一致とは思えない。ここにもバーン編著『民俗学概論』からの影響が現れているのではなかろうか。

5. 造形伝承・造形物からの発想

折口の教え子でもあった和田正洲が、すでに「一体に折口信夫の論文には造形伝承に関するもの、あるいは造形物が関係してくるものが多い。多分文学作品（国文学）、演劇等には、造形に関するものが多く出てくるので、民俗学を知る以前から関心が深かったのであろう」と指摘するように（和田 1984: 12）、折口の理論構築には造形物、造形伝承が重要な意味をもつ場合が多々みられる。そのすべてをあげることはしないが、造形物や造形伝承を核にして論理構築している典型例が、大正4年（1915）4・5月、同5年（1916）12月に雑誌『郷土研究』に発表する「髯籠の話」（折口 1915・16<1995: 176-202）である。この論文は「標山」と「依代」「招代」の基本的な論理の提示から始め、その論理は4つのステージをもって展開している。理論化の学史的な検討や論文自体の判釈、ここで示された理論に基づく研究などはすでに別稿（小川 2005: 361-392, 2014a: 349-368）で行っているので、ここでは造形伝承・造形物からの発想と、論理や理論の構築だけに限定して述べていく。

よく知られているようにこの論文は、日本人の神観念や信仰にとって重要な意味をもつ「標山」や「依代」「招代」の理論を提示したものである。この理論を構築するのに、第1ステージでは、まず『万葉集』巻3の「ちはやぶる神の社しなかりせば、春日の野辺に粟蒔かましを」という歌などから、神が天空から降臨する場所として「標山」を設けるという論理を立て、さらにこの「標山」には神降臨のための目印、つまり神からいえば「依代」、人間からいえば「招代」を設けるという神観念理論を示している。そして、「依代」は「標山」の喬木というのが元の姿で、これが後には人工の柱や旗竿に変化したと説く。さらに、神霊が依り憑くということでは、陰陽道の式神が依り憑く馬牛の偶像、盆の瓜・茄子の牛馬、神殿の鏡、仏壇の像や位牌、写真なども依代であるという。また、人間の髪・爪・衣服なども魂の宿るもので、魂呼びからは名前も同じような性格をもつとする。そして、「今少し進んだ場合では、神々の姿を偶像に作り、此を招代とするようになった」と、依代表象の進展を説明している。この偶像については、「直観的象徴風の肖像」から、仏像の渡来に影響されて具象化が行われたとする。

これはこの論文の最初の方で行っている「依代」の列記であるが、ここでは神霊の依り憑くモノということで、折口の類化性能、つまりアナロジー（analogy）によって同じ機能をもつモノがたぐり寄せられている。象徴的な偶像から具象的な偶像へという変化は、形象の変化を言っているわけで、歴史的な変遷も視野に入れているのがわかる。このように「依代」を論じた後に、この論文での重点ともいえる髯籠に移る。ここからが第2ステージで、生まれ故郷である木津の古老というダイガクの髯籠は「日の子」であるという伝承と、これを上から見たときの形象から、髯籠は太陽神を迎えるための「依代」とであると論じている。髯籠というモノを太陽神の依代というのは、一つには木津の「日の子」からの民間語原説（フォーク・エティモロジー folk-etymology）であり、もう一つは形象からのアナロジーによる見解といえよう。このアナロジーは、髯籠の籠を「日神」、髯を「後光」とするのであり、

同じ形象をもつ御会式の御祖師花（万灯）、左義長の飾り物、葬列の花籠、さらに近年のものであると、日の丸の竿先につける玉、端午節供の幟竿の先につける髻籠も同類のものであると、アナロジーによる解釈を進めている。

類化性能をさらに働かせ、第3ステージでは、髻籠と武蔵野一带の事八日の目籠を結びつけ、盆の切籠灯籠の幾何学的な構造は目籠の造形から展開したものであって、これは「全く髻籠の最観念化」されたものであると説明している。折口の説明の中ではモノの「観念化」という表現が重要で、これは元来の機能、この場合は神霊が依り憑く目印である「依代」という機能が、形を変えても埋め込まれて持続するという意味である。ここまでの論述で、依代の進化は、髻籠形式の籠から髻籠へ、これが目籠へと進んでから切籠灯籠になるというプロセスを示すのである。そして、これ以降が、やや時間を置いて後に発表した「依代から「だし」へ 髻籠の話の三」で、この部分から第4ステージへと進み、髻籠の籠の部分は、平安期には供物の容れ物となり、これが贈答の器へ転じていくというように、形象からのアナロジーは次々に広がっている。

このように折口は、神霊が依り憑くための目印という機能からのアナロジーと、髻籠という造形をもとにした形象からのアナロジーによって、「依代」「招代」を発見しながらその多様性を提示し、形象の「観念化」などによって進化していく道筋を示すことで依代理論を構築していくのである。それは時系列になかで、時間軸に沿って順に変化・変遷していくというような単純な論理ではなく、進化の各段階が共時的に存在するという文化様態を示しているのである（笹原 2014: 67-93）⁷。

こうしたアナログカルな思考は、折口学の特質の一つでもあるが、折口の造形伝承・造形物からの論理構築についてももう少しあげると、大正15年（1926）講演の「はちまきの話」では、「現在の事物の用途が、昔から全く変らなかつた、と考へるのは、大きな間違いである。用途が分化すれば、随つて、其意味もだんだん変化して来る」、その例として「はちまき」は都合がいいという。この論文では、はちまき、手拭い、かつら、かづらを結びつけながら、これは「物忌みのしるしであり、神に仕える清浄潔白な身であることを示す」ものであると説明する（折口 1930a<1995: 19-26>）。そして、これらを機能からのアナロジーによって烏帽子、帯へとつなげている。また、「まれびと」論を説く「国文学の発生（第三稿）」（折口 1929a<1995: 11-66>）では「簑笠の信仰」の項を設け、ここでは「簑笠」姿が何を意味しているのか、「簑笠」姿が現れる場面をアナログカル（analogical）に抽出し、その姿は「遠い国から旅をして来る神なるが故に、風雨・潮水を凌ぐ為の約束的の服装だと考へられ、それから簑笠を神のしるしとする様になり、此を著ることが神格を得る所

⁷ 笹原亮二は参考文献に示す最近の論文で折口信夫の造形伝承論、「髻籠の話」などを取り上げ、「折口の造形伝承の視角は、依代の造形とそれに関わる人々の信仰や感性や経済性など様々な面において生じた変化に焦点化していた折口の依代論に通じる」ものであり、「ハレのかたち」の研究に有効な視点であるという。「対象を、それが依存している現実の様々な文脈から切り離すことなく、変化が連続する歴史的な過程において捕捉する折口信夫の造形伝承の視角の有効性が改めて注目される」とも指摘するが、こうした事象の把握は造形伝承に限らず、日本の文学史や芸能史などの叙述にも見られることであること、また「変化が連続する歴史的な過程において捕捉する」というのは、間違えとはいえないが、折口の昭和初期までの研究には進化論的な思考が強く、もう一歩踏み込んだ分析が必要である。この意味において笹原の指摘は、折口論としては従前の枠にとどまっている。

以だと思ふ様になつたのである」という見解を導き出している。蓑笠については、スサノヲの青草を束ねた蓑にも結びつけるが、「鬼」の衣装として考えるようになるなど、見解を拡大していく。

6. 造形伝承・造形物への関心

折口学にみられる造形伝承・造形物へのアナロジカルな思考を前景化しようとするれば、まだ多くをあげることができる。また、造形や造形物の名称に対するフォーク・エティモロジカルな理解をもとにした論理や理論の構築も、たとえば「行器」から「ほかひびと」、「裳」から「喪（服喪）」など、いくつもあげられる。こうした意味では、折口は造形や造形物に注視しながら文化研究を進めたといえるのであり、このような学問的性向は、前述のように和田正洲は「多分文学作品（国文学）、演劇等には、造形に関するものが多く出てくるので、民俗学を知る以前から関心が深かったのであろう」（和田 1984: 12）というが、具体的には折口が残したフィールドワーク記録からもうかがえる。本稿では最後に、このことに触れておきたい。

折口信夫の民俗学のフィールドワークについてはすでに別稿で述べたが（小川 2014b: 199-211）、それは大正2年（1913）12月『郷土研究』1巻12号から大正7年（1918）年10月『土俗と伝説』1巻3号に、都合5回にわたって大阪の巷間に存在する伝承を「三郷巷談」として発表するのが最初である。これにはいわゆる被差別集落が実名で登場するのであり、昭和5年（1930）6月刊の『古代研究』民俗学篇第二（大岡山書店、『折口信夫全集』2所収）では全24話を掲載せず、15話だけを収録している。

これは「三郷巷談」という題名からうかがえるように、大阪三郷を中心とする地域での伝承を書き綴ったもので、中には幼少期から聞き慣らされていたこともあろうが、現地での聞き書きを行っていると思われる箇所もある（小川 2009: 10-28）。折口のフィールドワークへの入りは、生まれ故郷である大阪という都市からといえるが、「三郷巷談」の中には造形物や造形伝承にかかわるような話題は含まれていない。

折口のフィールドワークは、大正5年（1916）1月には神奈川県の小田原に武田祐吉を訪ねながら行った道祖神祭り調査、同年8月の王子田楽見学、大正7年（1918）9月の鹿児島県大隅半島から宮崎県での調査（折口 1918<1996: 362-364>）などもあるが、目的をもった意図的なフィールドワークで、記録（調査手帖、写真など）を残している最初のもものは、大正9年（1920）7月17日から7月25日までの、現在の岐阜県恵那市から長野県阿南町、天竜村、静岡県浜松市天竜区水窪町などを経て静岡市まで歩き通した民俗探訪で、「信州探訪手帖」（折口 1998: 205-232）がある。翌大正10年（1921）7月中旬から8月下旬まで沖縄本島を中心とした沖縄、そしてその足で壱岐へ渡り、8月23日から9月中旬まで調査を行う。大正12年（1923）には7月18日に東京を出て、沖縄本島と石垣島などで調査し、9月1日に門司に帰着。大正13年（1924）8月には再び壱岐へ行って講演と調査を行っている。

その後、沖縄には昭和10年（1935）12月から翌年1月まで行き、民俗探訪などを行うのであるが、折口の調査記録は、大正期の信州探訪、2度の沖縄探訪、壱岐探訪が主なものであり、昭和になってからのフィールドワークではほとんど記録を残していない。記録には

前述の「信州探訪手帖」と大正 10 年 (1921) の「沖縄探訪手帖」(折口 1997a: 101-154)、大正 12 年 (1923) の「沖縄探訪記」(折口 1997b: 155-204)、壺岐探訪の記録である「壺岐の水」(折口 1929b<1997: 219-230>、「壺岐民間伝承探訪記」(折口 1929・30<1997: 231-290) などがある。

これらの記録には、現地で目にした事象をスケッチしたり、写真に撮ったり、あるいは図化したりしており、言葉では表しきれない造形物や造形伝承がいくつも含まれている。そのすべてを紹介しないが、大正 9 年 (1920) の「信州探訪手帖」には、歩きながらの旅中見聞した護符、絵馬、石塔・石碑、削り掛け、家の間取り、囲炉裏の座と名称、ニューギ、草でつくった宝、石造の道祖神や不動、地蔵などをスケッチするとともに、その場の状況などを手帖にメモしている。



写真 2 「信州探訪手帖」日吉の図



写真 3 「信州探訪手帖」向市場道祖神図



写真 4 現在の向市場・道祖神像 (小川撮影)

写真 2 は現在の長野県阿南町日吉で見た光景で、この光景を手帖に「前の川をこえて山に上ると蚕玉大神と書いた石がある。大正五年四月為御大典建之とある。小さな木の枝に繭が沢山かけてある」「日吉の真上は馬頭 庚申 こだま と並んでいる。庚申だけが堂がある。堂の中には、向方の石工が掘つた三十三体が並べてある。庚申様は新しい様式で頗拙である。絵馬がある張り紙の願書がある。萱の様なものゝ根元を輪に結んだものも三本ほどあつた」と記している。写真 3 は浜松市天竜区水窪町向市場の道祖神を描いた図で、手帖には「高橋といふ橋をこえるとその袂に(向市場側)四五尺の地蔵様が小屋根の下に居られる。其脇に馬頭尊が沢山あるうしろに山伏し形の頭巾着た偶像像がある。道祖神に違ひない。よく見ると、交歓の像である」とある(折口 1998: 214・222-223)。図示したものの手帖への説明をあげると切りがないが、このように目に映ずる造形物をいくつも図化して様子を手

帖に記しているのである

大正10年(1921)「沖縄探訪手帖」、大正12年(1923)「沖縄探訪記」も、見聞したものを文章で記すだけではなく図化したり、これらの時には写真撮影を行ったりしている。「沖縄探訪手帖」には、津堅島で写真5のように民家をスケッチし、その間取り図がある。見てわかるようにスケッチと間取り図は、採寸はないが、適正な縮尺ができて見えるように見える。折口は大正10年(1921)の探訪旅行からカメラを持って歩いていて、昭和10・

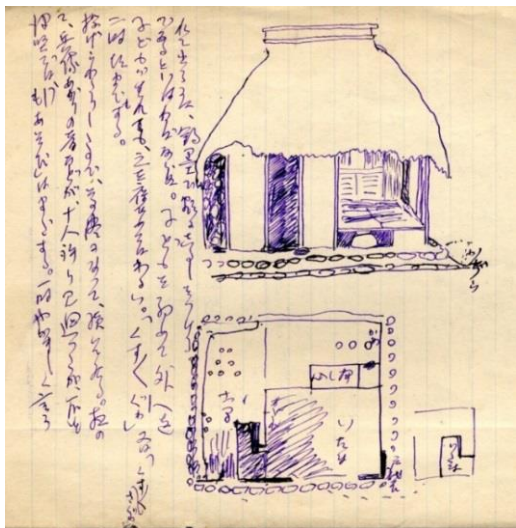


写真5 津堅島の民家スケッチと間取り図

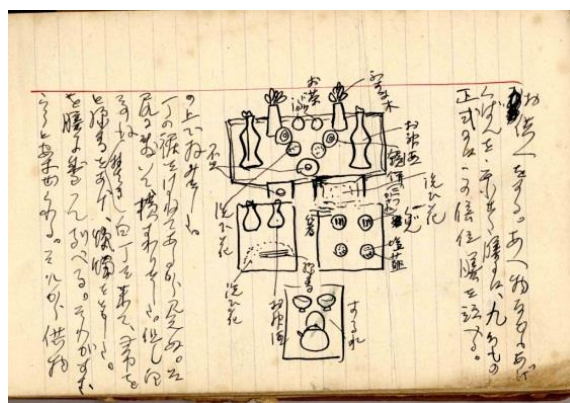


写真6 石垣島・名蔵御嶽への供物図



写真7 石垣島・名蔵御嶽への供物



写真8 首里・三平等殿内の祭壇

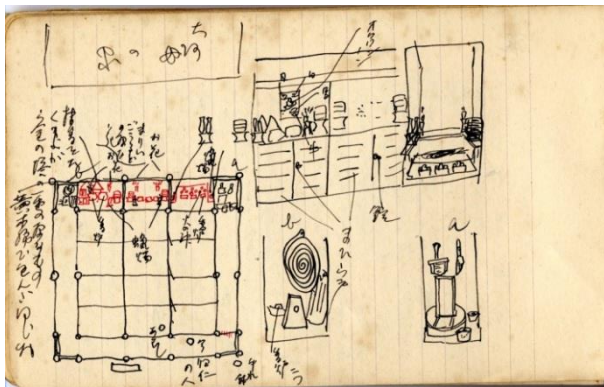


写真9 首里・三平等殿内の図

11年(1935・36)の沖縄探訪も含めると沖縄・八重山については多くの写真が残されていて(小川 2004a: 131-142)、図と写真を組み合わせて記録を行っている場合もある。

写真6と9は「沖縄探訪記」に記された図であるが、これらとはともに対応する写真が残されている。写真5の図は「沖縄探訪手帖」では、津堅島での探訪記録の最後にあって文章記録には説明はないが、民家の間取り図には、中に「土間」「かめ」など若干の注記をし、家屋周りには雨だれ石と思われる配石まで描き込んでいる。写真6と7は大正12年(1923)8月25日に名藏の司で大川に住んでいる「黒島なび」の案内で名藏大嶽に行った時のものである。「沖縄探訪記」には、司は「頭に乘せて来た風呂敷包みの供物」をひろげ、「供物を膳に盛って列べる。それがすむと線香を焚きあげ、蠟燭をともした。その後白丁を着て、箒を尻に敷いて、横すわりをした。但白丁の裾をはねてあるから見えぬ。その上で拝みをした。正式にはこの倍位膳を並べる。くぼんを乗せた膳には、九色のお供へをする。あへ物などもあげるのである。くぼんの肴は焼く。生はあげない。牛をあげる。牛は一二寸位づゝに切つて立てかけて、ばなをかける。豚はあげない」(折口 1997b: 199-200)と記しているが、図には供物に個別の説明を入れている。写真を撮っただけではなく、その場を丹念に図化しているのである。この場面については、供物をはさんで座る2人の司が拝んでいるところのスケッチと写真もある。

写真8、9は石垣島に行く前に首里の三平等殿内に行ったときのもので、「沖縄探訪記」には「今日、川平氏に頼んで、末吉氏・島袋氏と四人連れで、天龍寺趾の三比等殿内を一つにした三殿内へ行つた」「大阿母しられの家は真うしろにある」「香炉は青磁色の焼き物に金のもやうのあるもの。以前のは、右側の籠の中に二つほど入れてあつた。深い緑色の物であつた、と川平氏いふ」(折口 1997b: 189-190)などの記録をしているが、これも殿内の祭壇などには多くのメモが入っているし、a、bと位置を記してそこにあるものを別に図示している。

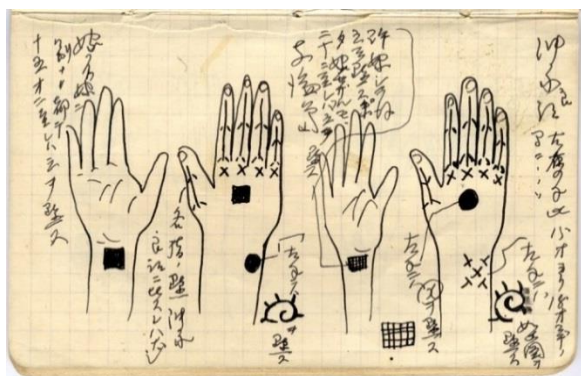


写真10 「針突」の図 大正12年8月

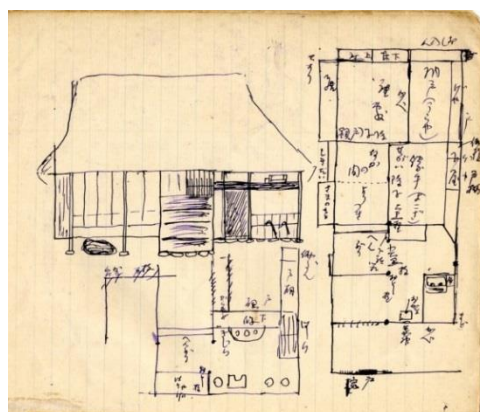


写真11 壱岐の民家

「沖縄探訪記」では、現在の糸満市兼城での聞き書きの後に「童謡」「成女式」と項目を立て、「成女式」のところで「はぢ」の説明をし、左右の手の針突を図示しているが、写真10は、その下書きと思われる図である。折口の「沖縄探訪記」は、現場では別の手帖にメモや図を書き、これと記憶をもとにして書き整えられたものである。こうした下書きがいくつか残されている。この図でも針突の紋様などに注記をいれていて、実際の女性の針突を見ながらスケッチと説明を書いたのではないかと思う。写真11は壱岐の民家図で、これも壱岐での調査ノートに記されたもので、「壱岐の水」「壱岐民間伝承探訪記」にはこうしたスケッチなどは入っていない。壱岐の民家も正面からのスケッチと間取り図を描き、間取り図には部屋名などを書き込んでいる。

もう一つだけ折口のフィールドワークをあげておくと、昭和5年(1930)10月には國學院大學と慶応大学の学生などを連れて、現在の長野県阿南町新野で村落調査を行っている。これは雪祭りを伝えるムラの実生活と民俗伝承を幅広く捉えることで、この祭りの背景を明らかにすることが目的だった。この時にも多くの写真を撮り、その写真と学生たちが作成した稿本が残されている(小川 2004b: 59-105; 松本 2004: 107-192)。

次の写真はこの調査時のものである。折口自身の撮影ではないと思われるが、調査は折口の指導によって行われていて、折口の指示によって撮られた可能性が高い。



写真12 新野村落調査時の農具写真



写真 1 3 新野村落調査時の写真（中央が折口信夫）

写真 12 は鋤、万能、田下駄、馬鋤、斧などの集合写真であり、写真 13 は神社の、おそらく御神体として祀られる 3 本の幣束を撮ったものである。この調査では、学生がまとめた稿本に折口が朱を入れているが、この稿本の章立ては、1 経済状況、2 家屋調査、3 村落組織、4 行事伝承、5 口頭伝承、6 物的伝承となっていて、物的伝承は「造形の方面」「呪ひの方面」「玩具に属するもの」「農具其他職業用具」「地物・記念物」「記録類（歴史）」「着物・食物」をあげている（松本 2004: 116-117）。

折口が造形伝承や造形物に対して、民俗採訪、フィールドワークの現場でどのように向き合い、記録を行ったのかの一部を紹介してきた。もちろん折口が関心をいただいた民間伝承、民俗情報はこれだけではないが、対象に向き合う態度は極めて客観的であったのがわかる。ここに例示しただけの調査記録からも、造形伝承や造形物に対しては、言説ではなくスケッチや図、写真による記録を優先していることがそのことを如実に示している。

折口信夫という詩人的な直感、文化的な現実との乖離など、その論理構築にはさまざまな批判や揶揄があるが、ここで示したように、こうした謂いはあてはまらない。折口は事実を尊重し理解しようとする研究者だったのである。ただ造形伝承や造形物に関しては、それ自体の形や構造などに終始するという普通の研究にとどまるものではなかった。前述のようにそのものの機能や形象を軸にアナログカルな思考によって、さまざまな造形や造形物を結びつけ、そこに底流する観念とか文化原理を見出し、この観念や文化原理のもとで造形や造形物が時系列上にどのように展開しているのかを明らかにしようとしている。

こうした思索の基底に、ここに紹介した実地での造形伝承や造形物の観察と記録があったのである。その観察と記録は、目に映ずる情景を短歌に詠むことと不可分の関係にあったと思うが、関連づけられる造形や造形物に通底する文化原理の発見という問題関心は、「澁澤敬三の民具研究論」でのべた澁澤の民具への文化構造論的な関心と隔絶するものではないのではなかろうか。澁澤は、自らの研究である『日本魚名の研究』（澁澤 1959）などでわかるように、ものごとを分類して考えるというタクソノミカル（taxonomical）な思考を持った人物で、折口の思考性向とは異なるが、何を問題とするかという学問的感性は比較的近

かったのではないかとも思える。

本稿の目的とした、折口信夫の「造形伝承」論の内容、折口のモノへの視点とそこからの発想のあり方を明らかにすることは、ある程度はできたと思うが、造形や造形物についてのアナロジカルな研究法が、折口を離れてどこまで普遍化できるかは今後の課題である。

参考文献

アチック・ミュージアム

1936 『アチックミュージアムノート第7 民具蒐集調査要目』、アチック・ミュージアム。

礒貝 勇

1969 「あしなか研究のころ (一)」『民具マンスリー』2巻2号: 1-2。

大西 秀之

2014 『技術と身体の民族誌—フィリピン・ルソン島山地民社会に息づく民俗工芸』、昭和堂。

チャーロット・ソフィア・バーン (編)

1927 『THE HANDBOOK OF FOLKLORE 英国民俗学協会公刊 民俗学概論』、岡正雄訳、岡書院。

小川 直之

1991 「民具・技術論」、日本民俗研究大系編集委員会 (編) 『日本民俗研究大系』第一巻方法論、pp.335-353、國學院大學。

2004a 「折口信夫の沖縄写真」國學院大學21世紀COEプログラム (編・刊) 『「日本における神観念の形成とその比較文化論的研究」研究報告Ⅱ 神を迎える』、pp.131-142。

2004b 「折口信夫の新野調査と写真」『折口博士記念古代研究所紀要』第七輯: 59-105。

2005 「神去来観念と依代論の再検討—「髯籠の話」を読む—」、小川直之 (編) 『折口信夫・釋迢空—その人と学問—』、pp.361-392、おうふう。

2009 「折口信夫「三郷巷談」の意趣」『口承文芸研究』第32号: 10-28。

2014a 「「依代」の比較研究」、神奈川大学国際常民文化研究機構 (編・刊) 『国際常民文化研究叢書7 アジア祭祀芸能の比較研究』、pp.349-368。

2014b 「折口信夫の民俗探訪」『現代思想』<五月臨時増刊号>第42巻第7号: 199-211。

折口 信夫

1915・16 「髯籠の話」『郷土研究』第3巻2・3号、第4巻9号 (『古代研究』民俗学篇第一所収、1929年4月、大岡山書店、折口信夫全集刊行会 (編) 『折口信夫全集』2所収、pp.176-202、1995年、中央公論社)。

1918 「日向通信」『土俗と伝説』1巻3号 (折口信夫全集刊行会 (編) 『折口信夫全集』17所収、pp.362-364、1996年、中央公論社) (伊勢清志の名前で発表)。

1929a 「国文学の発生 (第三稿)」『古代研究』国文学篇、大岡山書店 (折口信夫全集刊行会 (編) 『折口信夫全集』1所収、pp.11-66、1995年、中央公論社)。

1929b 「壺岐の水」『民俗学』1巻2号 (折口信夫全集刊行会 (編) 『折口信夫全集』18

所収、pp.219-230、1997年、中央公論社。

- 1929・30 「老岐民間伝承探訪記」『民俗学』1巻3～6号、第2巻2～4号（折口信夫全集刊行会（編）『折口信夫全集』18所収、pp.231-290、1997年、中央公論社）。
- 1930a 「はちまきの話」『古代研究』民俗学篇第二、大岡山書店（折口信夫全集刊行会（編）『折口信夫全集』3所収、pp.19-26、1995年、中央公論社）。
- 1930b 澁澤敬三宛書簡（書簡130、折口信夫全集刊行会（編）『折口信夫全集』34所収、pp.137-138、1998年、中央公論社）。
- 1931 「民間伝承蒐集事項目安」『民俗学』第3巻第1号（折口信夫全集刊行会（編）『折口信夫全集』19所収、pp.315-331、1996年、中央公論社）。
- 1934 「民俗学」『日本文学大辞典』第3巻、新潮社（折口信夫全集刊行会（編）『折口信夫全集』19所収、pp.158-178、1996年、中央公論社）。
- 1938 「国語と民俗学」『愛知教育』第609・610・611号（折口信夫刊行会（編）『折口信夫全集』12所収、pp.245-302、1996年、中央公論社）。
- 1971a 「民間伝承学講義」、折口博士記念古代研究所（編）『折口信夫全集 ノート編』第7巻、pp.11-64、中央公論社。
- 1971b 「民俗学への導き」、折口博士記念古代研究所（編）『折口信夫全集 ノート編』第7巻、pp.65-97、中央公論社。
- 1971c 「造形伝承」、折口博士記念古代研究所（編）『折口信夫全集 ノート編』第7巻、pp.395-481、中央公論社。
- 1972 「芸能伝承の話」、折口博士記念古代研究所（編）『折口信夫全集ノート編』第6巻、pp.72-172、中央公論社。
- 1997a 「沖縄探訪手帖」、折口信夫全集刊行会（編）『折口信夫全集』18、pp.101-154、中央公論社。
- 1997b 「沖縄探訪記」、折口信夫全集刊行会（編）『折口信夫全集』18、pp.155-204、中央公論社。
- 1998 「信州探訪手帖」、折口信夫全集刊行会（編）『折口信夫全集』35、pp.205-232、中央公論社。

刈田 均

- 2003 「奥三河への旅」、横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所（編）『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問—』、pp.36-39、横浜市歴史博物館（「原田清日記」の該当箇所が写真で掲載されている）。

後藤 明

- 2011 「民具研究の視座としての *chaîne opératoire* 論から物質的関与論への展開」『神奈川大学国際常民文化機構年報』2: 201-218。

笹原 亮二

- 2014 「造形伝承と造り物—ハレのかたちに対する民俗学の視角を巡って—」、福原敏男・笹原亮二（編）『造り物の文化史 歴史・民俗・多様性』、pp.67-93、勉誠出版。

澁澤 敬三

- 1933 『祭魚洞雑録』、郷土研究社（『澁澤敬三著作集』第一巻所収、pp.11-18、1992年、平凡社）

- 1935 「アチック根元記(二)」『アチック・マンズリー』第2号:1(「祭魚洞生」の名で執筆)。
- 1957 「なつかしい折口さん」『折口信夫全集月報』第30号:1-2。(これは『澁澤敬三著作集』第五卷(一九九三年、平凡社)に「折口信夫について」という題名でも収録されているが、ごく僅かに文章に異なる部分がある)。
- 1959 『日本魚名の研究』、角川書店(『澁澤敬三著作集』第二卷所収、平凡社、1992年)。
祖父江 孝夫・大給 近達・中村 俊亀智・大塚 和義
- 1978 「物質文化研究の方法をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』3巻2号:280-336。
- 田辺 悟
- 2014 『民具学の歴史と方法』、慶友社。
- 中村 たかを
- 1981 『日本の民具』、弘文堂。
- 原田 清
- 1931 「設樂の發刊について」『設樂』創刊号(伊藤良吉・岡田松三郎・木立英世・永江土岐次・夏目一平(編)『設樂』所収、pp.9-11、1974年、愛知県郷土資料刊行会)。
- 早川 孝太郎
- 1936 「一つの回顧」『アチック・マンズリー』第9号:33-34。(『アチック・マンズリー』は、第2号から第43号までページ数が通し番号でふられているため33頁となるが、第9号としては1・2頁である)。
- 松本 博明
- 2004 「折口信夫・新野村落調査ノート」『折口博士記念古代研究所紀要』第七輯:107-192。
- 宮本 常一
- 1979 『民具学の提唱』、未來社。
- 和田 正洲
- 1984 「造形伝承論」、日本民俗研究大系編集委員会(編)『日本民俗研究大系』第五巻造形伝承、pp.7-35、國學院大學。

【附記】

- 1、本稿に掲載した図版・写真ならびにその原版は、ことわりのない限り、國學院大學折口博士記念古代研究所所蔵であり、同研究所からの提供による。
- 2、折口信夫の著作については、初出の年次を基準にしたが、ページ数表記については、現在、その初出誌を見るのが困難なものが多いので、その著作が収録されている『折口信夫全集』のページ数を<>内に明記した。澁澤敬三の著作についても、一部を同様に『澁澤敬三著作集』のページ数で記した。

Keywords

ORIKUCHI Shinobu, Formative Tradition, SHIBUSAWA Keizo, Folklore, Study for MINGU

ホリ・京タケノコ・京料理

印南 敏秀 (愛知大学総合郷土研究所)

キーワード

ホリ、京タケノコ、京料理、食文化

1. はじめに

特集号「民具と民芸」(『民族芸術』18号、2002)は、双方を代表する研究者の講演を掲載して民具と民芸の違いと共通点をうまくまとめている。

基調講演Ⅰ「民具と民芸」では、岩井宏實氏が民具の視点から、渋谷敬三にはじまる民具研究は、生活全般にわたる器具・造形物一切が対象で、文化庁の有形民俗文化財に踏襲されている。研究方法は宮本常一の『民具学の提唱』にあるように民具をとおして、文化とか技術を実証的にあきらかにする。そして、民具には古くからのアイデアとパターンが伝承されていて、時代をこえて継承され、新しい時代にも展開していくという。

基調講演Ⅱ「民具と民芸」では、水尾比呂志氏が民芸の視点から、柳宗悦がはじめた民芸は、民具と対象はおなじでも、基本的に美への共感という個人的感受(直観)に発し、客観的にとか科学的にとかの検討や研究になじまない。したがって、民具は多くの量を集める必要があるが、民芸品は量ではなくて選ばれた美資、工芸品としての美をもつものでなければならないという。

私がおはじめて日常生活で使うモノについて、最初に関心をもったのは民芸だった。きっかけは柳の美しい装丁の民芸の本で、「用の美」という言葉を知ったからで、優れた職人がつくり出す民芸品に芸術作品にはない「用」の「美」があると書いてあった。日常雑器のなかに美を見いだす、柳の視点が新鮮で、民芸館などにも足を運ぶようになった。

その後、宮本常一が所長だった近畿日本ツーリスト日本観光文化研究所がおこなった沖縄の民具調査に参加した。グループで手分けして民具を資料化して、沖縄の生活文化を知るための調査だった。地道な調査ではあったが、実証的に少しずつ生活文化があきらかになることに関心が移った。そして、東北や関東、東海、瀬戸内などの民具のグループ調査に参加するようになった。いつの間にか日常生活で使うモノの「美」について忘れていた。それを再び思いだしたのが、7年弱京都府立山城郷土資料館で学芸員として南山城地方の民具と向かい合ったときだった。

2. 出荷籠と流通民具

南山城地方の農家の納屋で、野菜などを市場に出荷するための足付きの野菜籠をとときど

きみかけた。南山城地方は京都と奈良の間に位置し、農業経営において早くから商品作物栽培を手がけてきた先進地域である。『農具便利論』で紹介されている商品作物の栽培にあわせて機能分化した農具の種類が多かった。なかで鍬や鋤などの農具がよく知られていたが、収穫物を市場に運ぶ出荷籠にまでおよんでいたのである。

伝承では足付きの出荷籠は、船で木津川を下って市場に運ぶとき使われたという。四方についた高い脚は、船に水が入った時に野菜などの荷が濡れないためのものだという。

それまで知っていた出荷籠は、野菜をいためずに市場まで運ぶ目的でつくられていた。そのため軽くて、材料がたくさんとれる竹の表皮の内側の身の部分を使い、荒く編んだ簡単なものだった。

ところが、南山城地方では何度でも利用できるように、力が加わる口縁や脚は丈夫な竹の表皮を使い、全体は軽い身の部分を使うなど工夫がみられた。籠には屋号が墨書されていて、使わなくなった今も納屋に大事に保存していた。南山城地方では出荷籠にも、先進地方の民具の特徴がそなわっていたのである。

当時、南山城地方のこうした民具の特色を説明するとき、流通民具という概念で説明していた。自家製ではなく優れた職人が作成した洗練された形は、機能にくわえて野菜の価値を高める洗練性がそなわっていた。

3. ホリ

流通民具とした出荷籠では、美をとりあげることにはなかった。ところが、その後長岡京市の鍛冶屋で「京タケノコ」を掘る専用のホリを見たとき美しさに感動した。鍬と鋤の両方の機能を兼ね備えた洗練された形とく、名刀のような美的感動があった。

京タケノコは、京都式軟化栽培によって作られる京野菜の一つである。この栽培法は一年中タケノコ畑を世話して、柔らかいタケノコをつくる。春の収穫後、施肥→芯止め→草取り→施肥→親竹更新→敷草→土入れ→収穫を毎年繰り返す。ここまで手をかけるため、竹藪ではなく地籍も竹畑なのである。

食材としてのタケノコの特色は、時間が経過するとエグ味がでることである。だから朝掘りで知られ、朝早く掘ってすぐに錦市場まで運ばれ、昼前に下処理して、その日の夕方に料理として供される。掘るためのスピードと、素材の美しさをもとめる京料理に使うためタケノコを傷つけてはならない機能性が求められる。

こうしたホリは長年にわたって農家と鍛冶屋が意見交流しながら作りあげてきた。長岡京周辺の鍛冶屋は元々刃物鍛冶で、腕のよい鍛冶屋が競争しながら洗練された美しさもみだした。30年程前でホリ1つが7万円もしたが、ホリでないと朝掘りの「京タケノコ」が出荷できないのである。

ホリは、家々の畑の地形や地質や、掘る時期にあわせてつくる。したがって、すぐに使いこなせず、子供のころから使って高度な身体技術を身につける。

それほどまで苦勞して京タケノコを栽培したのは、地元の産地仲買をとおして、錦市場で高く売れるからである。錦市場で京野菜を売る店で聞くと、地方から出てきた人が一番驚くのが京タケノコが高いことだという。

4. 生産と食文化の総合化

洗練された美しいホリで掘った京タケノコは、日本料理を代表する京料理の主演をはれる食材だった。世界無形文化遺産に登録された「和食：日本人の伝統的な食文化」は「自然を尊ぶ」日本人の精神に基づいた食習慣をいい、多様で新鮮な食材と素材の味わいの活用や、自然の美しさ四季節の移ろいの表現などをあげている。京料理の特徴は、食材の持ち味を活かし、自然で料理したとみえない料理にある。

全国から京都に集まった優れた素材を、最大限にいかす栽培法でつくられた。その食材の特徴を、薄口醤油を使い、だしをしっかりときかせ、京都の軟水を使いいかすのである。

京タケノコのフルコースの1例をあげると、先付：タケノコ豆腐、椀：タケノコとクルマエビの煮物椀、向付：タケノコ造り、炊き合せ：タケノコ土佐煮、焼物：タケノコステーキ、強希：タケノコ饅頭、タケノコごはんと赤だし、デザート：タケノコシャーベットがでてくる。

タケノコの根元の固いところ、柔らかい中ほど、さらに先端部分や姫皮に至るまで、部分の素材の特色を引き出しながらコース料理に仕上げているのである。それには全体にエグ味が少なく、柔らかくて香りのよい、洗練された京タケノコが必要だった。

京都は、一〇〇〇年の都として政治・文化・経済の中心地だった。その間、生産と食文化を結ぶ生産者・仲買・市場・料理人・客の長年つちかわれてきた信頼のネットワークの伝統がうまれた。生産の場のホリ、白くて柔らかい京タケノコ、消費の場の京料理は、根底でつながっていた。その正体こそが、洗練された機能であり、美意識だったのである。

民具は、地域がうみだし、洗練された機能として継承されてきた。民芸は、個人の熟練した技術を、美的感覚で発見し、美術工芸品として評価してきた。これまで、機能や美意識を差別化してきた。ところが今は、民具と民芸ともに調査研究は大きく後退してしまった。基調講演の2人が最後に今後についてふれたなかで、民具と民芸を生活の中の実用性と機能性と造形美として一体でとらえ、連携を図る必要がある。

さらに民具や民芸といったモノだけではなく、タケノコ畑とホリと京タケノコと京料理のように、地域文化を集合体としてとらえ、総合化して多様な魅力を発見する必要があるそうである。

Keywords

Hori, Kyo-takenoko bamboo shoots, Kyoto Cuisine, Food Culture

図版



ホリを修理する加茂辰造氏 (『京タケ/コと鍛冶文化』長岡京市教育委員会、2000)

「民具」から何を学ぶのか
——潜水メガネからみた海女の生活——

小島 孝夫（成城大学民俗学研究所）

キーワード

海女、潜水メガネ、関係性

1. はじめに

武蔵野美術大学において宮本常一先生に出会ったことが、「民具」との出会いともなった。武蔵野美術大学在学時から現在まで、民具を資料化する作業をとおして、当該地域の日常生活の成り立ちや移り変わりについて、理解を深めてきた。

民具と総称される生活用具は、日常生活を維持するために、当該地域の所与の環境のなかから選択された素材を加工して製作されたものが多い。そのために、当該地域の生産活動の成り立ちや移り変わりなどを実証的に検討するための指標にもすることができる。

こうした民具の有する特性は、文化研究においては当該地域を理解するためのインデックスとしても利用できるため、筆者は大学での教材としても多用してきた。

ところが、民具の素材や機能は、学生たちにとってわかりやすい教材になる反面、民具を標本的に捉えてしまうことにもなり、民具と総称されるものを必要とした当該社会や当該集団と、所与の環境との間の関係性について考える視座を欠落させてしまうことにもなった。このことは、筆者にとっても民具研究の課題となっていった。

本稿では、潜水漁で用いられる潜水メガネを題材として、民具が当該地域や当該集団を安定した状態で維持するために果たしてきた役割を検証することをとおして、民具を題材として日常生活の成り立ちや移り変わりを検証することを試みたい。

2. 問題の所在

(1) 『アイヌの民具』の試み

筆者が「民具」という存在を強く意識することとなったのは、武蔵野美術大学生活文化研究会の一員として、昭和53年3月から30余日にわたって北海道沙流郡平取町二風谷の故萱野茂氏宅で経験した民具の実測作業であった。

当時は、民具を展開図で図示するという試みは一般的には行われておらず、この作業に参画するに際して、同研究会では相沢韶男先生を中心に、民具を実測する方法や展開図として記録する方法が模索されることになった。この過程で、建築用の図面や考古学の実測図などを検討しながら、機械製図などで用いられていた正投影図法の一つである第三角法

により実測図を作製することになった。正投影図法は、立体の形状を平面上に正確に表すことができる図法で、正面図を中心にして箱を開くように各投影図を平面上に配置していく方法が、対象物の実形を示しやすいうえに、正面図を中心にして直角に展開する図法が、読図という点からも優れているという判断によるものであった。第三角法を選択した事由には、同じ正投影図法の第一角法では、正面図に対して平面図と下面図とがさらに、右側面図と左側面図とが、展開画面の反対側に表記されるため、図を読む側に混乱を与えてしまうことが危惧されたこともあげられる。

学内で第三角法による作図法や投影図を描くために実長を正確に計測する練習し、二風谷での実測作業に臨むことになった。現地での作業対象は、植物繊維を素材とした編組品など、教室で練習した題材とは全く異なる形状や素材のものばかりで、作図作業以上に計測作業に多くの時間を費やすことになった。このことは、『アイヌの民具』刊行運動の刊行計画に影響を与えることになったが、現地で作業をする筆者たちにとっては、実測図の作製作業の本質は観察であるということを知らせてくれることになった。

(2) 民具の実測作業

『アイヌの民具』は同年6月に刊行された。この刊行運動は、アイヌ民族の生活を支えてきた生活用具を介してアイヌ民族が所与の環境とどのように接してきたのかを検証していくための資料を作成する作業にもなった。この経験が契機となって、筆者は武蔵野美術大学在学中に山口県柳井市「むろやの園」民具調査、東京都東大和市宮鍋家生活用具調査、福島県下郷町大内宿民家調査、山梨県塩山市甲斐黒川金山調査などにも参加し、民具を介して地域社会の成り立ちや移り変わりを理解していくという経験をしていくことになった。

昭和59年度から学芸員として勤務した千葉県立安房博物館（現、館山市立博物館分館）では、同館が当時すすめていた房総半島沿海部の漁撈用具の収集とその資料化作業に専従することになった。これらの資料群は、昭和63年に「房総半島の漁撈用具」として重要有形民俗文化財に指定されることになったが、この間に、漁撈用和船や地曳網のような大型資料から釣針にいたる小型資料まで2144点の漁撈用具の実測図やスケッチを作製することになった。館員だけでは整理作業が効率的にすすめられないため、一般の人たちから希望者を募り、実測方法を理解してもらいながらアルバイトで作業をすすめることができた。一般の人たちがこの作業に従事してくれたのは、個々の漁撈用具が内包しているさまざまな情報を読み解く楽しさを見いだしたからであり、この作業をとおして、材料の選択、形状や加工方法の必然性にまで言及していくようになっていった。

成城大学に転じてからも同様な経験をしていくことになった。学芸員課程の博物館実習で、生活用具を収集したままそれらの分類整理がすすんでいない博物館・資料館や教育委員会に受講生を引率し、それらの分類整理や個々の生活用具の実測図作製作業を現在まで続けてきたが、受講生たちは、まず個々の生活用具の用途や材質に興味を示し、それらが用いられていた場所や時代に思いをいたすようになっていくのである。

卒業後にも、こうした整理作業に参加してくれる人たちがいたり、進学して学芸員をめざす人たちもこうした経験をした学生のなかから現れるのである。

(3) 民具研究の課題

実測作業を経験した人たちが、当該民具が用いられた地域の日常生活の成り立ちや移り変わりに関する理解を深めていく様子は、柳田國男が提示した文化理解のための「有形文化」の位置づけが現在も有効であることを示している。

ところで、二風谷の事例と前項で述べた内容とは大きく異なる点がある。二風谷の事例は、対象としたのは萱野茂氏自身が収集したか使用した生活用具であり、当時の二風谷の日常生活において用いられていたものも含まれていた。また、一過性の用途のために製作された生活用具は、その場で廃棄されてしまうことも多いため、萱野氏が未使用品として新たに作製した生活用具も含まれていた。私たちが二風谷で経験したことは、二風谷という生活の場で、その生活を支えてきた生活用具を資料化するということであった。私たちは生活用具の実測図を作製することをとおして、当該生活用具を必要とした主体とその対象との関係性を検証することができたのである。

それに対して前項の事例は、日常生活から切り離された生活用具を対象とした作業であり、生活用具からうかがい知れることがあったとしても、その生活用具を必要とした主体とその対象との関係性を資料化することにまでは至らなかったのである。

アイヌの民具調査以後に私自身が関わってきた民具調査は、概して、生活の場から切り離された生活用具を資料化する作業であった。民俗調査において伝統的な民俗事象を定型化したものとして記録していく作業と同じことをしてきたと、換言してもよい。

当該生活用具が果たしてきた役割は、日常生活において主体となる人びとが所与の環境に働きかけることであり、所与の環境からの働きかけへの対応を目途としたものであった。日常生活において用いられてきた用具類は、主体となる個人や集団とそれらを取り巻く環境との接点に位置し、両者の関係を取り結ぶ役割を果たしてきたのである。

二風谷で行った民具調査の目的はアイヌ民族の日常生活を総体的に捉えることを目的としたものであった。そして、アイヌの人たちが取り結んでいるさまざまな関係性を検証していくための手段として生活用具を資料化することが試みられ、その手法として実測図の作製が行われたのであるが一方で、その後の文化財保護行政の取り組みにより、生活用具の実測図は日常生活の分析の手法としての意味よりも、日常生活の成り立ちを示す記録や標本としての役割に重きが置かれるようになってしまったのである。

このことを民具研究という視点から捉えなおすと、次のような課題を指摘することができる。

生活用具が内包している情報を、当該地域や集団の日常生活の成り立ちや移り変わりを示す標本やインデックスとしての位置づけから、主体となる個人や集団が所与の環境との間で取り結んできた関係性を示すメディエーターとしての位置づけへと転換する視座が必要なのである。民俗学が個々の民俗事象の分析や研究に専心するあまり、当該地域や集団の生活の成り立ちを総体的に捉えられずにいるという陥穽を克服していくためにも、生活用具を分析の対象とする民具研究もまた、メディエーターとしての役割を果たさなければならないのである。こうした民具への視座の転換が民具研究の課題であり可能性でもある。

本稿では、民具研究の視座の転換を図る一つの試みとして、素潜り潜水漁において用いられてきた潜水メガネが、潜水漁や地域社会の存立のために果たしてきた役割を明らかに

してみたい。

3. 潜水漁の成り立ちと移り変わり (写真1・2)

(1) 潜水漁の概要

本稿において具体的な日常生活の題材とする潜水漁について概説しておきたい。

アマとは、歴史的には、沿海地域に居住し魚貝や海藻を採捕するのを業とする者、つまり漁師を総じて指す場合もあるが、一般的には、海に潜って貝・海藻などを採捕することを職業とする女性のことを指す。さらに、海に潜って貝・海藻などをとることを職業とする男性を「海士」、女性を「海女」と区別して表記し、前者をカインあるいはオトコアマなどと呼び分けることがあるが、いずれもアマと総称されることが多い。

女性による素潜り潜水漁の起源は明らかではないが、沿海地域での生業という視点にたてば、沿岸域より沖合の方が単価の高い大型の回遊魚を大量に漁獲できるので主要な生業ということになり、そのために操船技術や大型の漁具を使用するため危険が伴い体力も必要なため、主に男性の役割となった。一方、女性は育児や家事をしつつ、畑仕事や沿岸部での海藻取り、潜水による貝類の採取などの仕事に従事してきた。つまり、男性による換金を前提とした漁撈活動に対して、女性の日常的な労働は1日あるいは年周期の生活において、日常生活を安定した状態で維持するための役割を担ってきたといえる。その活動のなかで、潜水漁は換金を前提とした生業としての意味合いを強く有していたのである。

(2) 三重県下の潜水漁の概要

筆者が1982年から継続して調査を続けている鳥羽・志摩市域でも、女性で素潜りによる漁を行っている漁業者を総じて海女と呼称している。三重県教育委員会が平成22年度から2カ年間にわたり実施した「海女習俗基礎調査」によれば、三重県下で女性による潜水漁が行われているのは28ヶ所で、従事者数は978名である。このうち、鳥羽市域においては612名、志摩市域は366名という分布状況である。平成元年に実施された海の博物館の調査では1,937名であったので、この20年間ではほぼ半減したことになる。

海女の操業は、①カチドと呼ばれる、陸から比較的近い漁場まで自力で泳いで移動し、操業する形態、②ノリアイあるいはフナドとも呼ばれる、複数の海女が1つの船に乗り込んで移動し、広範な海域で操業する形態、③夫婦あるいは親子の男女1組が船で移動し、男性が滞底時間を延ばすための介助を行いながら、広範な海域で操業する形態に大別されるが、それぞれの呼称には地域差がある。

海女の年齢構成は、60～80代で全体の68.1%を占めており、高齢者が多く占めている。海女漁における熟練期は概して高齢期に現出する傾向がみられるため、加齢に応じた操業戦略を想定することが可能である。詳細は後述するが、当該海女の体力・知識・技能などに応じて操業調整ができるという潜水漁が有する特性が高齢期にいたっても潜水漁に従事できる事由となっているのである。

海女の年周期活動は、漁協が定めた潜水漁の操業期間では、口開けに応じて漁を行い、それ以外の時期は、他の職種や潜水漁以外の漁業に携わっている。夏磯と冬磯とを行う地域の海女は、春季と秋季は体を休める期間と位置付けており、農作業などを中心とした生

活を送るようにしているという。海女たちが携わっている職種としては、農業、海女漁以外の漁業の補助作業、飲食業、旅館業等に従事している。鳥羽・志摩地域で盛んな観光関係に関わることも多く、地域性が垣間見える。「海女である」ことが、漁期以外の兼業選択に寄与する場合があるようである。

海女の操業期間は、一般漁場が10～236日間と幅がある状況であった。概して、鳥羽磯部漁業協同組合管内の出漁日数は少なく、三重外湾漁業組合管内の出漁日数は多い。

(3)潜水漁の特性

①潜水漁における体力（写真3）

潜水能力は、いかに深くまで潜れるか、いかに長時間潜れるか（息こらえができるか）、いかに多くの回数を潜れるかに集約される。通常、午前と午後とに設定される操業時間内に滞底時間をいかに長くできるかということである。このことは漁獲機会を増加させることになり、漁獲量・漁獲額の増加にもつながっていく。

潜水能力は身体的な条件を除けば、概して若年齢層のほうが優れている。潜水・海底探索・浮上を海面で繰り返すことは、疲労を蓄積させていくことだけでなく、身体を冷やすことにもなるため、高齢者にとっては過酷な活動ということになる。なお、高齢者は潜水時間や潜水深度の低下に加えて加齢にともなう視力の低下も大きな負担である。

寒さから身体を保護するウェットスーツの使用については、現時点では制限がないところが多く、禁止している地区はないが、ウェットスーツの厚みの制限（3～5mm）を、行っているところもある。ウェットスーツの導入は早い地域では昭和55年頃から始まり、昭和60年頃には多くの地域で用いられるようになったようである。ウェットスーツの導入当時は、排尿を我慢して膀胱炎になる事例などもあったが、現在では全地域で着用されている。平成24年12月から導入した安乗の事例をみると操業時間内の海面での滞在時間が伸びており、漁獲対象物に対する負荷が増すことが確認された。

先行してウェットスーツを導入した地域では、こうしたことを勘案して操業時間の調整が図られたはずであるが、ウェットスーツの導入が海女漁における漁獲量を増加させる画期となっており、ウェットスーツの導入が海士の参入を容易にしたことを考え合わせると今後、漁場単位での漁獲総量規制なども検討されることになるだろう。

②潜水漁における知識

カチド・フナド・チナという集団の漁場利用慣行は、互いに競合しないことが意識されたものになっている。たまたま競合した場合は、互いに牽制し合うなどして、現場での調整が図られる。

カチドは潜水漁に初心者やフナドから転じた高齢者から構成されており、海女小屋から自力で、浮き輪に上体をあずけながらバタアシで目的の漁場にまで移動して潜水漁を行う。漁場やアジロについての知識が豊富な高齢者の様子をみながら若い海女たちはアジロに関する情報を増やしていくことになる。

フナドは同じ海女小屋に所属する海女たちが一艘の漁船に数名ずつ乗り合わせて漁場まで移動し、そのまま洋上に漁船を待機させておき、復路も船で移動するため、カチドよりも漁場の選択の幅は広がる。そのことは多くのアジロを知る海女にとっては好都合であるが、アジロの情報をもたない海女にとっては漁場を探す手間がかかることになる。その

ため、アジロをあまり持たないフナドは他のフナドとツレで潜ることで新しいアジロを覚えていくことが多い。

肉親を介助者にして単独で船を利用するチナなどの場合は、介助者が釣り漁などに従事しており海底地形を熟知している場合が多く、トマエと呼ばれる介助者任せで漁場が選択される。そのため、トマエが不在でフナドの船にチナが乗り合わせるとアジロが見つからないということも起こる。

③潜水漁における技能

現在、海女漁で用いられる漁具には、潜水メガネ、ウェットスーツ、浮きと網袋、イソノミ、コノミが用いられており、海女の種別や地域によっては、オモリやアシヒレを使用する場合もある。

採捕作業に用いられるイソノミは、対象物によって使い分けられている。潜水漁における採捕技術は次の三点に大別される。一つはサザエのような素手で直接採捕できる対象物に対する技術。他の二つは岩などにはりついているアワビやトコブシをイソノミなどの道具で剥がし採る技術である。とくにアワビの場合は太陽光が届くところにはりついているシロ（マダカアワビ、メガイアワビ）と、暗部を好むクロ（クロアワビ）とでは全く異なる採捕技術が必要となる。

シロの場合は肉眼で確認できる場所にはりついていることが多いので、アワビの貝殻の薄い方からイソノミを差し入れ、貝殻の厚い部分を梃子の支点となるように剥がせばよい。それに対してクロの場合は、肉眼で確認できない場所にいることが多いので、岩陰などに手を差し入れ、手の感触でアワビを探し、掌に添えたコノミをアワビの貝殻にあてがい、掌そのものや腕を梃子にして剥がし採るといものである。貝殻や肉を傷めずに採捕するためにはイソノミを用いるのとは全く異なる身体のコントロールや冷静な判断力が求められるのである。イソノミを作用点とすると、支点として利用するのは手首・肘・肩で、それらの使い方は一様ではない。

潜水漁の特徴として、用いる道具はいたって単純であるが、それらの使用方法は極めて多様で、個人の性格や技能等の差異が顕在化する。イソノミは腕の延長や掌の一部として用いられるが、これらの技能は海女個人の身体技法として位置づけられるもので、道具が単純な分だけ個人差が顕著になるのである。

先述した、個々の体力と漁場に関する知識に加えて、これらの三種類の採捕技術を駆使することができれば、すべての漁獲対象物を採捕することが可能になるのである。

そのうえで、漁獲対象物をいかに傷めずに採捕するかという、採捕に関する技能の熟練度が漁獲量や漁獲額に反映されていくことになる。

4. 潜水メガネからみた海女の生きかた（表1）

次に、潜水漁に従事してきた一海女の一生の稼ぎの分析をとおして、潜水漁を選択した女性の生き方とそれを支えた事象について検討していくことにする。

(1) 潜水漁における加齢と老化

表1に示した事例は昭和3年に三重県志摩郡大王町畔名（現、志摩市大王町畔名）の農家に生まれて、同地の鰹節製造業を営む家に嫁ぎ、三人の子供を出産し、第三子が乳離れ

してから、潜水漁を開始している。嫁として家業に従事するよりも海に行く（潜水漁に行く）方が気楽で楽しかったため、という理由からであったが、家業が最も忙しい時期に家を留守にすることになるため、家業を怠けるために潜水漁に従事しているのではないという成果を示すことで、家族からの承認を得なければならなかった。彼女の場合は、潜水漁を好きで始めただけでなく、家族の承認を得られるだけの成果を自分自身に課していた面もあるため、一生の稼ぎを分析してみると、戦略的に潜水漁に従事していたことがわかる。

彼女が恒常的に潜水漁に従事することをやめた平成8年までの39年間のアワビの生涯総漁獲量は18,495.5キログラム、サザエは7,883.05キログラムでアワビを主要漁獲物としてきた様子がよくわかる。彼女が最も盛んにアワビを採捕した昭和62年の1,281.49キログラムを頂点として昭和56年の561.5キログラムから平成6年の723.8キログラムまでの14年間は、常に年間500キログラム以上のアワビを採捕していたことになるが、この期間の彼女の年齢は53歳から66歳である。

また、彼女が日平均漁獲額で50,000円以上になるのは60歳から66歳までの間で、64歳の時には日平均漁獲額が66,414円となっている。彼女の場合、潜水漁の熟練状態というべき状態になったのは50歳代からで、そのピークとなったのが64歳ということになるようである（小島2002:120-123）。

なお、海女を引退することを決めた翌年以後の平成9年と10年にも気が向いたときに漁を行ったというが、そのデータによると、操業日数は平成9年が32日間、10年が34日間に減少しているが、日平均漁獲額はそれぞれ28,016円、24,977円で、引退を決めた年までの生涯日平均漁獲額22,694円を上まわっており、平成9年は主にサザエを、10年は主にアワビを採捕していたことがわかる。素潜り潜水漁に永年従事した海女の潜在能力をうかがわせる結果である。

加齢に応じて衰える体力に対して、増大していくアジロについての情報、経験の蓄積によって柔軟な対応が可能になる採捕技能との組み合わせにより潜水漁従事者としての熟練状態が、社会一般で通例とされる定年年齢よりも高齢時に現出しているのである。

(2) 老眼仕様の潜水メガネ（写真4）

彼女はなぜ70歳まで潜水漁を続けることができたのだろうか。そして、60歳代前半に熟練状態を現出できたのであろうか。

漁獲データをさらに検討していくことにしたい。彼女の潜水漁における戦略は、漁を開始した32歳～37歳頃まではサザエを主要対象物とし、37歳～56歳頃までクロアワビを主要対象物としてきた様子が確認できる。そして、56歳を境にして傷アワビの含有率を減少させることが試みられている。その試みは引退するまで続けられているが、その間に、60歳の時から老眼仕様の度付き潜水メガネを使用し始めている。そして、その年から日平均漁獲額が50,000円を超えていくようになるのである。

クロアワビは、先述のように岩陰や岩の裂け目などを手探りで探しながら採捕するため、クロアワビを主要対象物とする場合は視認にあまり頼る必要がなかったが、加齢にともない息が短くなってくると、シロも採捕することになっていったという。肉眼で確認しながら慎重に採捕しているつもりでもアワビに傷をつけてしまったのが60歳の時で、そ

それを契機に老眼仕様の潜水メガネを使うようになったのだという。この選択が功を奏して、傷アワビの割合は漸減していくことになったのである。併せて、サザエやホラ貝なども積極的に採捕していったのである。その結果が、日平均漁獲額の増加につながっていったのである。

老眼仕様の潜水メガネは、彼女の熟練期を現出するための用具となったばかりでなく、70歳まで潜水漁を続けるための要件にもなっていたのである。

(3) 老眼仕様の潜水メガネと潜水漁の存立

1982年度に同地で実施した当該海女集団22名の日平均漁獲額は4,095.9円である。ただし、この金額は漁協の伝票を基に算出したものであるため、漁協に納めなかったナイシヨウリの金額は反映されていない。

操業形態別では、カチド・フナド・チナのそれぞれの日平均漁獲額は2,191.3円・5,286.6円・10,040円となる。フナドの場合はこの額から必要経費としての油代を引くことになる。チナの場合はトマエと二人で操業しているため、割りかえすと5,020円ということになり、さらに必要経費としての油代もひくことになる。その結果、フナドとチナの日平均漁獲額の差異はほとんどないことになる。これに対して、カチドの日平均漁獲額は低額であるが、カチドたちは必要経費を意識せずに気儘に採捕活動ができることを評価している。

また、この集団内では年齢差に応じた漁獲額の差異がみられる。49歳までの日平均漁獲額は2,371円、50歳から54歳までは4,896円、55歳から59歳までは4,888円、60歳から64歳までは2,449円、65歳以上は2,076円で操業形態の差異にかかわらず、50歳代を頂点とし、40歳代と60歳代がほぼ同額という結果になっている。

一方で、日平均漁獲額を1000円刻みにみていくと、1000円台の海女の平均年齢は53.8歳、2000円台は56歳、3000円台は55.3歳、4000円台は53歳、5000円台は53.5歳、7000円台は52.5歳、8000円台は54歳となり、平均年齢差は52.5歳から55.3歳まで2.8歳の差があるが、日平均漁獲額単位で分けた小集団内では年齢差が総じて漁獲額に反映されていないという指摘もできる(小島 2002: 119)。

当該海女たちが漁獲額についてあまり話題にしない背景には、各海女が自身の主要漁獲物を明確に意識しており、それぞれがアジロを持っていることに起因する採捕成果に対する自負があるのだという。それは、自分の畑に収穫に行くような感覚だというのが、漁獲額に拘泥せずに海女集団を維持していける事由として、潜水漁には加齢によって規定されない生産活動の自由度が内在しているのである。集団の横断的な分析によると、潜水漁において熟練期という年代がある一方で、潜水漁従事期間をとおして、一定した漁獲額を確保するための個々の戦略を自在に案出できる生産活動であることがうかがえる。

こうした現実的な裏付けがあるからこそ、各海女がそれぞれの志向に則した操業形態や漁具を選択できるのであろう。そして、高齢の海女たちにとって、潜水漁を存立させる要件になっているのは、老眼仕様の潜水メガネの存在なのである。

(4) 海女という生きかた

現在、海女漁に従事している女性たちの多くは、昭和20年代から30年代にかけて生ま

れた世代である。彼女たちの多くは学齢期から青年期にかけて高度経済成長期を経験した世代で、当時の鳥羽・志摩地方は第1次産業が基幹産業であった。当時は中学校を卒業すると男子は漁師になるか大工や左官などの職人になる場合が多く、女子は結婚の適齢期を迎えるまでの間、真珠養殖場などで働いた。就職先自体が限られていた時代であった。

結婚して出産を経て子育てをしながら家計を支えていくためには、家を離れずにできる職業選択が求められた。多くの女性たちが選択したのは、自給用の作物づくりと夏季の潜水漁であった。当時の潜水漁は、潜水メガネとイソギとイソオケ、漁具のイソノミがあればできる漁であったから、多くの女性たちが夏季の季節労働として潜水漁を選択していくことになった。潜水漁に用いられる用具類は、海という自然との関係性を結ぶことが前提となっており、近年のウェットスーツや老眼仕様の潜水メガネについても集団内の規制を除けば、基本的に個人の意思によって選択されてきたのである。

そして、潜水漁の特徴は、男性が従事する漁法と異なり、漁具などに資本の差異が反映されることが少なく、海女個人の体力や技能や知識そして気力がそのまま漁獲額に顕在化するという、漁法のなかでも個人差が表出しやすいものであった。そのことが、他者の漁獲額を羨ましく思うことはあっても、他者を妬む気持ちを抑制してきた。それは、羨ましく思う相手が自分にとっての目標となる存在にもなったからである。こうしたことを端的に表しているのが、先輩海女のアジロを覚えていくという行為である。先輩海女たちも自分自身のアジロを隠すようなことをせず、むしろ転石を裏返したり戻したりすることを手伝ってもらうことで、アジロを教えるようなこともするのである。女性の潜水漁は一般的に漁業を評する「早い者勝ち」といった競争の論理とは異なる、協力の論理によって成立しているのである。

なぜ、こうしたことが可能になるかといえば、先輩海女は漁場を知られたとしても、他にもアジロを持っているし、アワビを傷つけずに剥がし採る技能を有しているなど、先輩海女としての自負があるからなのである。海女間の信頼関係は、他者の存在を評価し、仲間として一人前と評価してもらえるように努力することを基点としているのである。潜水漁をとおして形成された信頼関係は、海を離れた日常生活においても継続しており、高度経済成長期という競争を前提とした時代背景のなかで、海女として限られた資源を共有しながら生活しなければならなかった時代を、ともに乗り越えていくという経験を共有していくことにもなったのである。この時代を振り返って海女たちは「海女しかなかった」と評するが、むしろ「海女があったから」現在につながる生活を維持することができたのである。潜水漁でつながった女性たちによって地域社会の安寧が保たれてきたのである。女性による素潜り潜水漁が現在まで存立してきた事由について考えてみると、女性の潜水漁は集団による操業が基本となっており、協力を前提とした操業形態が海女たちの間で過度な資源利用を相互に規制する意識を共有させてきたのである。海女たちが有してきた集団性あるいは共同性といったものが、巧まざる資源管理を可能にしてきたのである。こうした海女の生き方は、現代社会における人間関係のあり方を捉え直すという点でも評価されるべきものである。

歴史的にみれば、素潜り潜水漁は当該地域の社会の成り立ちや漁業をはじめとした産業構造の特徴と密接に関わりながら展開してきたといえよう。小資本での操業が可能で、個人の技能等が直接、漁撈活動に反映することができるという特徴が、全国で多様な素潜り

潜水漁を展開させてきたともいえよう。そして、個人の技能や知識を体現できることを可能にしてきたのが、間接的に潜水漁を支えてきた、ウェットスーツや老眼仕様の潜水メガネの存在なのである。

5. 民具からみた関係性

(1) 民具研究の意義

潜水漁を題材にして、漁撈用具が担ってきた役割を検証することを試みてみた。翻って、「家業」なき時代の地域社会や集団の成り立ちを、生活用具などの民具によって捉えなおしていくことは可能であろうか。

民具を研究するという陥穽から抜け出して、民具で研究するという民具研究の本義に立ち返るためには、日常生活で用いられている生活用具を題材にして、現代社会におけるさまざまな「関係性」の抽出とその論理を明らかにしていくという方法に思っていた。

私たちは他者という「鏡」に投影した姿をとおして自分自身を自覚することができる。他者とは、人間や社会でもあるし、自然や生活用具などの卑近の事物でもある。主体となる人間を取り巻くあらゆるものが他者として存在し、それらとさまざまな関係性を結ぶことによって、主体の生活は成り立っている。

民具研究においては、調査者が当該生活用具に自己投影することで、それらが内包している関係性を抽出し、それらを必要とした主体の生活文化の成り立ちや移り変わりの必然性を明らかにしていくことが必要なのである。

(2) 民具が示す関係性

宮本常一の『民具学の提唱』は、宮本の民具試論の集大成であると同時に、民具研究の啓蒙のための概説書として大きな役割を果たした文献である。

宮本は、あとがきにおいて、次のように述べている。

そのほか地方在住の方々の協力と示唆がきわめて大きかった。それらを私なりに渋沢先生に教えられたことを軸にまとめたのが本書であるといっている。しかも私にとってここでのべたことの多くは発見として映った。そして、たえずあるおどろきをもった。

と同時にこうしたことの研究のおくれていることをも痛感した。そしてたえず焦燥感を持って来た。事象はそこにあるのである。長い歴史を持って生活の中に存在している。なぜその中から民衆の意思を読みとろうとしなかったのだろうか。

生きるということはどういうことなのか。生きるためにどのような方法と手段を必要としてきたのか、民衆の学問はたえずそこから出発し、この問いに対する答えを求めてゆかなければならないように思う。しかしまだ何ほどの答えも見つけていない。この答えは高遠なものではなく素朴で卑近なものでなければならぬと思っている。生活からはなれた生活はないからである。(宮本 1979: 254-255)

また、次のようにも述べている。

つまり民具研究の根本問題は民具の形体学的な研究にとどまらず、民具の機能を通じて生産、生活に関する技術、ひいてはその生態学的研究にまで進むことに意味があると思う。生産、生活の技術、民具の生態学的な研究は、同時に人間の生態学的な研究にふかいつながりを持つものである。(宮本 1979: 11)

前者の「民衆の意思」そして「生きるためにどのような方法と手段」という記述と、後者の「その生態学的研究」および「民具の生態学的研究」という記述を、「主体と他者との関係性」と読み替えれば、前項で述べた民具研究の新たな視座が明確になってくるのではないだろうか。

民具から主体と他者との関係性を見いだそうとした試みは、既に『アイヌの民具』の刊行作業においても宮本のもとで行われていた。附録として巻末に付された「本書でとりあげた民具の材料一覧表」と「本書でとりあげた民具の一覧図」というものである。前者は民具の多くが植物繊維を用いたものであったことから、日常生活を維持するために用いられていたものが、所与の自然のなかから資源として選択されているのかを確認しようとしたもので、後者はある行為や目的のためにどのような民具が必要なのかを相関図として表したものである。

運動協力者版の『アイヌの民具』の刊行は、予定より半月ほど遅れて刊行されたが、その遅れの原因の一つは、解説文と実測図および写真とで構成された本文に加えて、アイヌの人たちが用いた生活用具間の関係性を抽出することで、アイヌの人たちの生活世界を確認しようとする作業を行ったためであった。その作業を担当したのは、当時の日本観光文化研究所の有志の方たちで、現地で実測作業を担当していた私たちとは全く接点がないまま、この作業は行われたのであるが、用途や材質による細別化と体系化とが意図されていることが看取される編集がなされている。

こうした作業の背景には、『アイヌの民具』刊行運動ニュース紙上で、宮本が「この文化を標本としてでなく、生きたものとして伝えていくことができるのではないかと思う」と述べている試みが、この二つの作業に籠められているのだと考えられる。しかし、こうした試みは、その後の民具調査や民具研究では稀にしか見られなくなった。民具の標本化ばかりが優先されるようになり、民具が内包している関係性を読み取る作業は等閑視されたまま現在にいたっているのである。

(3) 新たな関係性の模索にむけて

本稿で試みた潜水漁の事例は、民具と総称される生活用具が、主体と所与の環境を含む広義の他者との間でどのような関係性を有しているのかを示すことを試みたものである。

潜水漁が存立しているのは、採捕対象となる資源の存在とそれらを商品として評価する市場の存在であり、海女の活動を支えているのはアワビなどを採捕するための知識や技能であり、海洋という自然界に対峙するために身体を保護する着衣などの存在である。そして、潜水漁の従事者が高齢者中心となっている現在では、加齢にともない身体の保護に関する着衣などの存在がより大きな意味をもってきている。

ウェットスーツの存在は、女性が中心だった潜水漁に男性が加わることを可能にした反

面、女性たちの間で巧まざる資源管理が行われてきた磯根資源に対して大きな負荷を与えることになった。さらに、高齢化した女性たちにとっても、潜水漁への従事が可能になったため、磯根資源への負荷は一層深刻なものになっている。老眼仕様の潜水メガネの存在もまた、高齢化した女性たちにとって潜水漁を続けることを可能にしてきた。

こうした指摘は、磯根資源の枯渇という課題を顕在化させる事だけが目的ではない。こうした新たな生活用具の存在が当該地域や当該集団にどのような影響を与え、それらに対して主体となる社会や集団がどのような対応や対抗を行っているのかという、新たな関係性を検証していくことが、現代社会における民具研究の責務であるということ述べたいのである。

6. おわりに

民具を文化財として評価するための要件として実測図を作製するという作業の始まりに立ち会った者の一人として、民具の標本化に与する作業を現在まで続けているが、その必要性を十分に承知しながら、その作業の形骸化を強く感じるようになって久しい。標本化された民具が何も語ってくれない現状は、民具を語る主体の不在を物語っている。

本稿では、老眼仕様の潜水メガネを題材として、民具が当該地域や当該集団を維持するために果たしてきた役割を示すことで、民具を題材として日常生活の成り立ちや移り変わりを検証することを試みたが、民具を主体と広義の他者との関係性を示す資料として捉えなおす試みを続けていきたいと念じている。

主体と他者との関係性を具体的に示す事物こそが、民具という研究概念として位置づけられるべきものであり、民具が内包している関係性を明らかにしていくことが民具研究であると考えている。

実測図の作製を前提としてきた民具研究は民具のハード面に特化したものであった。そこから、民具が有するさまざまな関係性に対する視座が欠落してしまったともいえる。

今後の民具研究の展開として留意すべきなのは、民具を含む日常生活の成り立ちと移り変わりを総体として捉えて、その関係性を素描していくことではないかと考える。

参考文献

『アイヌの民具』刊行運動委員会

1978 『「アイヌの民具」刊行運動ニュース』。

海の博物館・財団法人東海水産科学協会(編)・

2011 『日本列島海女存在確認調査報告書』、海の博物館・財団法人東海水産科学協会。

萱野 茂

1978 『アイヌの民具』(運動協力者版)、『アイヌの民具』刊行運動委員会。

小島 孝夫

1987 「アワビ採具からみた潜水採集活動—三重県志摩郡大王町畔名の事例」、日本民

具学会(編)『海と民具』(日本民具学会論集 1)、pp. 111-128、雄山閣。

2002 「潜水漁の諸相—加齢と熟練—」、香月洋一郎・野本寛一(編)『民具と民俗』(講座日本の民俗学 9)、pp. 109-128、雄山閣。

三重県教育委員会(編)

2012 『海女習俗基礎調査報告書—平成 22・23 年度調査—』、三重県教育委員会。

2014 『平成 24・25 年度海女習俗調査報告書—鳥羽・志摩の海女による素潜り漁—』、三重県教育委員会。

宮本 常一

1979 『民具学の提唱』、未来社。

Keywords

Female Divers , Goggles, Relationship

図版



写真1 海女の装具 (三重県志摩市安乗 2013年8月撮影)



写真2 作業中の海女 (三重県志摩市安乗 2013年8月撮影)



写真3 ウェットスーツ着用の海女（三重県鳥羽市神島 2013年8月撮影）



写真4 老眼仕様の潜水メガネ（三重県志摩市安乗 2013年8月撮影）

表1 素潜り潜水漁業者の現役期間の漁獲量および漁獲額※1

年度	年齢	アロアビ漁獲量(単位g/含有率%) ※2			ワザエ 漁獲量	ウニ 漁獲量	ホラ 漁獲量	フクラマ (1kg/ツ) 漁獲量	海藻類 漁獲量 ※3	ワカメ/ワカ シ 他漁獲量 ※4	年間漁獲額 ※5	フナトマエ (船頭代 他経費)	操業 日数 日	日平均 漁獲額 ※6	備考 ※7		
		総漁獲量	クロアロアビ/含有率	備アロアビ/含有率													
S35	32歳	2.44	不明	不明	221.4	37.1	0.0	4.2	不明	11,200	60,273	0	11	5,479	サカナ0875, タコ		
36	33	13.52	0.46	3.4	472.35	0.0	2.0	5.58	6.4	46,290	92,413	500	29	3,169	エビ0.45, サカナ, タコ, 貝殻		
37	34	17.41	不明	不明	588.0	216.8	0.0	10.1	不明	129,647	500	50	50	2,583	タコ, エビ		
38	35	92.8	8.2	8.8	577.8	219.4	0.0	116.15	127.5	48,475	201,330	1,000	83	2,414	タコ5.8, エビ, カレイ		
39	36	166.8	108.35	65.0	968.9	320.1	0.0	48.75	105.0	10,500	305,500	4,650	96	3,134	タコ		
40	37	254.85	215.5	84.6	41.63	163	760.15	164.4	0.0	40.4	120.85	10,035	390,700	不明	95	4,007	
41	38	499.1	288.38	57.8	124.4	24.9	327.75	105.3	0.0	8.4	158.1	461.00	540,000	不明	79	6,835	
42	39	666.35	349.55	52.5	107.4	16.1	362.0	79.3	0.0	15.6	243.9	57,621	661,370	36,600	107	5,839	タコ
43	40	600.55	203.05	33.8	47.85	8.0	268.31	70.5	0.0	12.85	139.6	12,800	777,460	18,950	112	6,772	
44	41	388.9	220.0	56.6	65.4	16.8	284.0	184.4	0.0	13.8	146.0	140,200	672,180	28,700	111	5,787	
45	42	378.85	183.75	48.5	108.1	28.5	187.8	137.8	0.0	9.15	213.85	120,300	715,260	4,600	108	6,580	鯉切り作業繁忙
46	43	318.45	151.35	47.5	90.4	28.4	175.89	78.0	0.0	11.0	156.0	66,890	682,600	37,100	99	6,520	5月にアラルガ性の潮
47	44	334.05	188.45	56.4	107.8	32.3	74.6	83.9	0.0	9.05	104.6	128,600	785,765	4,000	88	8,997	
48	45	370.91	200.3	54.0	124.6	33.6	122.45	115.9	0.0	11.9	100.7	119,339	1,131,279	9,000	113	9,932	
49	46	317.7	186.0	58.5	135.25	42.6	75.6	63.0	0.0	20.8	140.0	56,200	1,196,285	24,200	94	12,469	(鯉切り最盛期)
50	47	334.66	227.25	67.9	112.35	33.6	79.3	20.1	0.0	15.45	154.0	94,100	1,323,920	20,700	92	14,165	
51	48	380.5	231.5	60.9	136.55	35.9	293.2	13.2	0.0	20.9	194.4	201,110	1,510,000	16,000	90	16,600	血圧上がる
52	49	383.02	258.9	65.9	145.27	37.0	52.45	48.4	0.0	17.75	173.5	144,779	1,721,400	不明	92	18,711	
53	50	281.61	178.85	63.5	54.9	19.5	481.45	41.3	0.0	21.25	56.0	55,100	1,553,300	不明	85	18,274	
54	51	449.25	266.7	59.4	190.1	40.1	241.55	32.6	1.5	34.9	42.2	48,700	2,047,000	4,000	108	18,917	
55	52	379.55	274.25	72.3	64.95	17.1	123.6	12.85	6.1	24.8	84.2	165,570	2,285,500	不明	85	26,653	(池田と豊のフナドが合流)
56	53	561.5	313.5	55.8	72.5	12.9	142.35	0.0	12.1	17.8	153.0	202,602	2,578,400	11,000	113	22,720	
57	54	576.92	293.4	50.9	96.85	16.8	206.5	0.0	8.0	6.4	151.8	220,941	2,510,491	不明	99	25,358	
58	55	848.75	525.3	61.9	87.5	10.3	35.0	5.55	4.1	6.9	236.3	173,469	3,112,687	30,000	111	27,772	
59	56	670.06	410.2	61.2	85.76	12.8	7.5	14.1	0.0	7.65	不明	53,000	2,851,775	不明	99	28,606	
60	57	771.3	313.35	40.5	52.85	6.8	5.3	21.5	0.0	5.9	173.6	151,028	2,935,439	不明	111	26,445	
61	58	817.35	246.95	30.2	72.7	8.9	42.0	0.6	7.7	7.55	135.5	233,000	3,286,465	15,900	98	33,373	
62	59	1,281.49	212.65	16.8	86.2	6.8	119.5	0.0	15.5	0.5	35.0	81,480	4,806,400	113,800	119	39,425	(仮付きの潜水メガネを着用)
63	60	1,144.5	84.85	7.4	108.95	9.5	13.7	0.0	9.8	0.35	289.8	54,800	4,781,951	128,100	92	50,585	
H1	61	971.7	95.5	9.8	62.1	6.4	8.15	0.0	6.0	0.25	82.4	70,000	4,514,278	24,800	94	47,760	
2	62	827.2	143.1	15.4	56.35	6.1	24.75	1.65	8.2	0.3	80.25	97,760	5,964,863	280,800	100	56,841	
3	63	835.75	74.4	8.9	49.8	6.0	46.55	0.1	19.7	1.25	172.1	184,500	5,345,875	217,300	96	53,424	夫の看病のため短縮
4	64	695.7	57.7	8.2	34.7	5.0	25.85	0.0	8.5	0.0	80.0	87,000	4,506,237	55,500	67	66,414	
5	65	578.45	54.45	9.4	30.15	5.2	29.6	0.85	12.7	1.15	不明	52,271	3,911,963	18,000	80	48,675	
6	66	723.8	54.55	7.5	35.1	4.9	138.1	46.95	37.6	0.3	不明	77,704	4,791,631	不明	93	51,523	
7	67	335.55	24.85	7.4	18.25	5.4	46.65	85.55	49.6	1.7	30.0	29,000	2,911,112	16,500	84	34,460	(深く潜れなくなる)
8	68	114.4	10.4	9.1	2.06	1.8	241.2	0.55	17.3	0.35	不明	69,598	979,518	0	44	22,262	足腰が痛む。引退時、生涯日平均漁獲額 22,684円。
9	69	130.3	12.2	9.2	2.40	1.8	139.3	17.25	12.0	0.0	0.0	0	896,530	0	32	28,016	海女小屋離脱
10	70	228.8	119.0	52.0	4.60	2.0	18.3	16.80	2.0	0.0	0.0	0	849,247	0	34	24,997	海女小屋離脱
合計※8		18,654.61	6,787.14	※33.9	2,647.71	※7.13	8,040.65	2,255.60	240.0	531.13	4,086.65	3,422,062	80,286,144	1,122,200	3,393	※25,061	

※1 三重県志摩郡大玉町町名(現志摩市大玉町町名)在住の海女が潜水漁を開始した年から所属していた海女小屋を離脱した年までの、個人記録および町名漁業協同組合が定期的に個人宛に発行する「精算通知書」をもとにして作成した。記録が確認できない項目については、表中に不明と表記した。漁獲量の単位はkg、漁獲額の単位は円、操業日数の単位は日、平成10年分は海女小屋離脱後のデータ。

※2 クロアロアビ・備アロアビの含有率とは、アロアビの総漁獲量にそれぞれが含まれる割合

※3-4 磯の口開け前に行われるワカメ/ワカシ、漁期半ばで行われるテンガサ、磯開めのころに行われるアラシの漁獲量と漁獲額である。これらの採取作業は4名の海女の共同作業で行われるため、海藻ごとに表記が異なり、各漁獲量・漁獲額の記録の欠落がみられるため可能な限り併記した。

※5 各漁獲物に対して町名漁業協同組合が算出した金額に、本人が投入していた「ワカメ/ワカシ類他漁獲額」およびナイショリ(個人への販売)の金額を合算した数、ほぼこの10%が税金となった。

※6 (年間漁獲額-フナトマエ代金他経費)÷操業日数、で算出した。経費の大半は船頭に対する規定外の謝礼金。小数点以下は四捨五入。

※7 個人記録中にみられた家業や自身の体調に関する特記事項とその他の漁獲物の漁獲量(単位kg)を挙げた。()で示したものは本人からの聞き書きによる。

※8 クロアロアビ・備アロアビの含有率および日平均漁獲額の欄は生涯平均値

表1 素潜り潜水漁業者の現役期間の漁獲量および漁獲額

民具と民芸とモノの機能

濱田 琢司 (南山大学)

キーワード

民芸運動、民具と民芸、モノの機能、自在鉤

1. はじめに

民具と民芸とは、ともに、同じ時期にその枠組みが発生し、そして、しばしば類似の対象がその呼称のもとに含まれてきたものであった。すなわちいずれも、大正中後期から昭和にかけて、民衆の生活に関わる用具・雑器類を収集し、価値付け、分類していくという動きのなかで、位置付けられていったものであった。

その一方で、民具研究と民芸運動に関わった両者の担い手らは、それぞれを、自らとは異なったものとして自認することで、長く、実質的に没交渉のような状況にあった。おって簡単に触れるように、それぞれが（特に民具研究の側が）、相手との違いを強調するような語りを示すことはあっても、それが、議論や交渉へと発展することは（ほとんど）なかった。

社会学者の竹中均は、そうした状況を「平行線」とした上で、渋沢敬三の民具研究と柳宗悦の民芸運動との間に、柳田国男の民俗学を「補助線」として加えることで、平行線を交差させる可能性を提示している。しかし、平行線を交差させようとする、そうした取り組みは、「ようやく始まった」ところであるという（竹中 2003: 219-223）。これは、2003年の論文であるので、それから10年超が経過していることになる。けれども、その状況は、大きくは変わっていないように見える。

一方で竹中は、「柳田民俗学と民具研究とが一枚岩ではなく、その間に質的な差異があることに注目することが、「民俗学・民具研究・民芸の三者鼎立関係」への可能性を開くポイントであると指摘している（竹中 2003: 219-222）。すなわち、民具や民芸を、それぞれステレオタイプ化せずに論じること、あるいは、それらのステレオタイプ化された状況を解体することから、平行線を交差させる可能性が生じてくるというわけである。逆に言うと、それぞれに対する一枚岩的認識が、それぞれを「別のもの」として認識させてきてしまったということになるだろう。それは例えば、柳田と柳という創始者たち同士においてもそうであった。竹中も指摘するように、『月刊民芸』誌上で行われた両者の対談¹においても、「経験学としての民俗学」と「規範学としての民芸」という切り分けがなされ、両者がそれを受け

¹ 目次上は、対談となっているが、ここに、司会として式場隆三郎が、また「沖縄県人」として比嘉春潮が加わる形となっている。比嘉が、「沖縄県人」として参加しているのは、この対談が、柳らが1938年から40年にかけて引き起こした、いわゆる沖縄方言論争からの流れで実現したという経緯があるためである。

入れる形で、それぞれを（あえて）対峙させている（柳田・柳 1940: 26-28）。

しかし、実際は、民芸も民俗学も、また民具研究も、そのように一枚岩的に一元化できるものでは、もちろんない。それぞれの位置付けには、様々なゆらぎがあり、そのゆらぎの捉え方によっては、互いが、大きくオーバーラップするようなことも起こりうる。こうした点については、例えば、民芸については、1990年代の後半から柳らの業績を振り返るだけではない、分析的な研究が急激に増加したこと（例えば、金谷 1996、竹中 1999、土田 2007、濱田 2006 など）によって、一枚岩的理解は、ずいぶん変化してきたように見える。他方、民具研究をはじめとした周辺領域についても、丸山(2013)や加藤(2011)など、新しい視点を提示しようとする研究も複数見られるようになってきている。そこで本稿では、こうした研究も踏まえつつ、主に民芸を対象としながら、その位置付けのゆらぎについて検討し、それによって、民具と民芸とを交差させる動きへの始点としてみたい。

以下、いくつかの文献等から、これまでの民具と民芸の関わりを、ごくごく簡単に確認したうえで、それを踏まえつつ、民芸と民芸運動について、とくにモノの機能の扱い方という点に注目しながら、確認していくこととしたい。

2. 民具と民芸の対峙

民具と民芸とが、そのような平行線の関係になるのは、第一にそれぞれのモノの取扱いのあり方の違いにある。宮本常一は、『民具学の提唱』のなかで、次のように述べる。

民具の中に美を求めることは意義のあることである。しかし文化を研究するための資料としては民芸品を求めるまえにまず民具を集めたいのである。そして洪沢先生もいっているように民具の個々の美を求めるまえに、民具の統一された美と力を発見したいのである。（宮本 1979）

ここでは、民芸は「個々の美を求める」ものであり、対して、民具は「統一された美と力を発見」するものであるとされる。民具のなかに生活美を認めつつも、個々の美よりも集合的なものを重視するのは、この引用にもあるように洪沢敬三も主張していたところである。洪沢は、アチックミュージアムの収集品を念頭に民芸との違いを示している。

アティックに集められた物を概観して不思議に感ずるのは、多く集まれば集まる程、それが、ある統一へ向って融合して行くと同時に、其処には単一の標本の上から見出せない、総合上の一種の美を感ずることである。[中略] アティックのものは、一つ一つには随分と汚らしいものが多いが、集まるにつれて、一種特集の内的美を感ずるのは何であろうか。田方山方濱方の我々、又我々の祖先が、極めて自然裡に発明し使用して来た各種各様の民俗品の、全体を総合して考えた時、其処に我々の祖先を切実に観、又その匂ひを強く感じ、懐かしく思ふ意味に於て、自分にはアティックの収集は、その数量に於てたとへ僅少であっても、之は今述べた全体への一部分であつて、而も、それは確かに有機的な一部として、血も涙も通っているという気がしてならない。兎に角、アティックの標本は、ものそれ自体が多くの場合、売る為に作られたり、人に見せる為に作

られたりしたものではなく、我々の祖先から今迄、我民族の実生活に切実にピタリとついで居る点で、極めて特殊の味がある。之を下手物とか民芸品とか云って重んじる者は、そのものゝ単独の美を逐ふのである。我アティックは全体の一部として見て、之を作った人々の心を見つめようとする。(渋沢 1933: 7-8)

アチックの収集品は、一つ一つは、「随分と汚らしいもの」ではあるが、「総合上の一種の美」をみせるという。そしてそれは、「単独の美を逐ふ」民芸品を重んじる者とは異なるとしている。モノの取扱い方から見ると、確かに両者は、こうした対比の関係にある。

この点を、より鮮明に強調するのは神崎宣武である。神崎は、対象としての民芸と民具の共通性を指摘しつつ、次のように述べる。

たしかに、民芸の対象は民具なのだ、といってもよい。が、民具すべてが民芸の対象ではないのである。民具のなかの一部が民芸の対象となる、といえどもっと妥当であろう。

民芸については、「用の美」という表現がしばしばつかわれる。つまり、民芸は、民具類のなかの美的なものだけを選び、とりあげているのである。(神崎 1989: 127)

さらに別のところでは、モノの集め方という点から、さらにその違いを強調しつつ、指摘する。

[民具の収集において：引用者注] 行った先々でどうしても骨董屋さんあるいは民芸趣味の人に遅れをとることになります。例えば味噌蔵や醤油蔵をのぞきますと、蓋と酌は残っているけど甕がない。それから甕が残っていれば、それを小口で出した片口がない。片口が残っていればそれを銘々で食べた食器がないというようなことで歯抜け状態なんです。[中略] 民具研究というのは体系的とはいませんが、連続的に複数ものを組み合わせて捉えなければいけない。ですから、まず何でも集めてみる。

[中略] 例えば醤油甕でありますと、蓋も酌もそれから片口も、それからその片口から醤油をつぐ小皿も、という系列で捉えなければならない。(吉田・神崎ほか2002: 37 [発言者は神崎])

「総合」と「個々」という、両者の違いが、モノの集め方に反映されることで、民具研究の収集が疎外されるという。神崎がこうした収集を行っていた時期、いわゆる民芸ブームと呼ばれる、民芸品の一大消費ブームがおきていた(濱田 2006: 80-92)。ここで語られるような状況は、そうした時代性を背景としてもいる。個々の美を愛でるといふ民芸愛好のあり方が、各地の民具資料を歯抜け状態としてしまうことで、民具研究において重視される総合性がそこなわれてしまうという。そのような点から民具と民芸を対照させようとする神崎はだから、民芸に対して、極めて否定的であり、民芸運動(と民芸ブーム)が、民具研究の様々な障害ともなっており、その「罪科」は大きいとする(神崎 1989: 130)。

このように明確でないにせよ、とくに民具研究の側からすると、民芸(運動)は、「資料」か「美」かという観点から、あるいは「総合」か「個々」かという観点からして相容れない

ものであるとされることがしばしばあった。そして、その当事者らも、必ずしも積極的に互いを見ていこうともしてはおらず、上述のような「平行線」を辿ってきた。

3. 民具と民芸の交差

しかしその一方で、神崎が、「民芸の対象は民具」と指摘するように、両者には重なるところが多い。無論、それ故に対時的な語りが出てくるわけのだが、両者を交差させようとする試みも一定程度、なされてきた。比較的早い時期において、それに最も積極的であったのは有賀喜左衛門であろう。有賀は、渋沢を中心として、それを柳田および柳と比較した論文において、先に引用したアチックの収集品に対する渋沢の語りを示した上で、それに続き、柳の『工芸文化』における「美と生活とを結ぶものこそ工芸ではないか。工芸文化が栄えれば文化は文化の大きな基礎を失ふであろう。なぜなら文化は、何よりも先ず生活文化でなければならないからである」(柳 1942²: 351) という記述を参照し、「いっているのは基本的に敬三の考え方とあまり差はない」(有賀 1972: 32) としている。有賀は、1973年に『季刊柳田国男研究』において行われた座談会「柳田国男と柳宗悦」においても、民芸的なモノの捉え方に否定的な見解を示す谷川健一に対して、民芸(柳)の意図と意義を様々に解説している(有賀・宮本ほか 1973)。

「はじめに」で言及した竹中は、別の論文において、有賀を中心として「民芸と民具のあいだ」を検討している(竹中 1999: 93-115)。その中で竹中は、有賀にとって青春期の単なる一エピソードとして語られることもある有賀と柳との関わりについて、民芸が有賀の理論構築の核心部分を刺激し続けていた可能性を指摘する。また、金谷(1996)は、民具と比較しつつ、モノを旧来のコンテクストから切り離して価値付けるという部分に民芸のまなざしの重要な要素を読み取る。これを参照した濱田(2003)は、フォークロリズムという概念を活用し、民俗や民具、民芸における審美性の問題を検討しようとした。また、丸山泰明は、渋沢と今和次郎の二人を扱った、興味深い著書の中で、渋沢と今、あるいは竹内芳太郎の柳ら民芸運動同人らへの否定的な評価を示しつつも、両者を二項対立的に捉えてしまうことの非生産性を指摘する。そして民俗学、民具研究、民芸運動を、「それぞれグループ分けして対立的な図式でとらえるのではなく、[中略] 同一の地平に置き直して、それぞれの人物の思想と活動について検討していくこと」(丸山 2013: 96)の必要性を唱える。そして、渋沢と今について、これまであまり顧みられることのなかった側面、すなわち「美の観点」からこれらを捉えることで、それぞれの位置を再考することを試みている(丸山 2013: 88-130)。こうした研究においては、先の宮本や神崎にみられたような、自身の立ち位置への強い意識は後景へ退き、あくまで分析的に民具と民芸の相同相違を検討しようとしている。

一方、いくつかの企画、イベントにおいても、両者の比較が試みられることもあった。例えば、1997年には、浜松市博物館において「民芸と民具—「美」と「歴史」の発見—」という企画展が開催されている(浜松市美術館 1997)。ほか、2001年には、民族芸術学会の第17回大会が「特集 民具と民芸」として開催されている。後者に関しては、現在、国立

² 『柳宗悦全集』からの柳の引用・参照については、煩雑さを避けるため、文中には当該の文章の初出年を示し、文献一覧の中で、全集の刊行年を示すようにした。

民族学博物館に収蔵されているアチックの旧コレクションと日本民芸館のコレクションとをグラビアにて比較し、両者の類似性を探っている（熊倉・吉田編 2002）。具体的なモノを提示しての比較は、極めて興味深いものであった。例えば、一方では、両方に含まれる沖縄の紅型の風呂敷を並べて示しつつ、「沖縄の紅型の風呂敷をご覧いただければ明かなように、その所蔵先が入れかわっても、何の違和感もない部分がある」ことが、また一方では、民芸館の収蔵品に占める陶器の比重の大きさという相違などが指摘され、「収集されたものを前にしての議論」の重要性が示されている（熊倉・吉田編 2002: 8）。

4. 民芸とモノの機能

4-1. 民芸運動における「用」と「美」

こうした蓄積は、「はじめに」において竹中の指摘を受けつつみたとように、民具や民芸に対する「一枚岩」的理解を転換させようとしている（丸山の研究などは、その点を強く意識しているように見える）。そこでここでも、民芸運動におけるモノの機能の取扱いに注目しつつ、その「一枚岩」的理解を再考し、民具と民芸のさらなる交差へ向けての一助を提示したいと思う。

ところで、民芸（運動）を語る時に、「用の美」という言葉がしばしば使われる。それは、「用」を旨とする工芸が持つ美のことを示し、柳自身の言葉のなかにも、工芸の本分である「用」を満たすことから生じる美を重視する語りがしばしば登場する。例えば、後に『民芸とは何か』（柳 1941a）に収録された文章で、『柳宗悦全集』の解題において「好個の民芸入門となり得よう」（水尾 1980: 600）とされている「民芸の性質」という文章において、柳は、「民芸の美の特質」として六つの点を示しているが、その第一として「実用性」をあげ、「美が用途と結合してみると云ふこと」を指摘している（柳 1941: 268）³。そうした点から、「用の美」とは、しばしば「機能美」と同一のものとされ、さらには日常における「使いやすさ」と結び付けられて理解されてきた。

もちろん、それは、民芸と特徴付ける要素の一つであるが、しかし、いくつかの点において、民芸における「用」は、単なる「使いやすさ」とは異なっているように見える。例えば、その一つは、心理的な部分の重視である。柳は、次のように述べる。

実用とは実際的な用であるため、とかく物質的な用とのみ思はれ易い。特に肉体の働きを助けるもの、着たり、食べたり、住んだりするのを助けるのであるから、用を物質的な意味にのみ受取り易い。[中略] だが実用といふことを物質的に解するのは果たして妥当だろうか。一面的な見方に過ぎなくなはないか。[中略] 実用ということを物質的な意味に受取るのは、人間の暮しを余り狭隘なものに解し過ぎる。吾々の生活は肉体だけの生活ではない。精神を切り離れた肉体といふが如きものは何処にも存在しない。生活は体の暮しであり兼て又心の暮しである。[中略] だから生活に役立つといふことは、体の求めと共に心の求めも交ってくる。物質的用と心理的用とはいつも結ばれ乍ら働い

³ 他の5点は、（1点目と重複しているが）「実用品であること」および「平常性」「健康性」「単純性」「協力性」であるとされる。

てゐる。だから機能というふことは、物理的性質を示すだけではない。それは心理的機能をも有たねばならない。(柳 1941b: 307-308)

ここにあるように、柳(あるいは民芸運動)にとっての、機能には、物理的な使いやすさとは異なった側面が含まれていた。渋沢や宮本が、民具との違いとして感じていた「単独の美を逐ふ」あり方も、こうしたモノの見方と無関係ではないであろう。

また、もう少し別な面から、柳らの「用」を再考することもできる。それは、運動初期の収集に明確にみることができる。例えば、日本民芸館開館以前に刊行された『民芸叢書第一篇 雑器の美』(日本民芸美術館編 1927)をみてみよう。図1は、同書の表紙であるが、ここに掲載されているのは、尾張(瀬戸)の「行灯皿」と呼ばれるもので、運動初期の収集品においては、重要なものの一つである。もともとは、行灯の中に入れ、行灯から落ちる油を受けるための皿であるという。これは、行灯における油受けという用を持ち、人々の生活に密接に関わりながら消費されてきた。柳は、そこに民芸としての美の必然を見出す。あるいは、図2は、同書口絵に含まれる大工道具(墨壺)である。柳によるこの図版解説は次の通りである。

墨壺には既成品もあり、自分の手細工品もあるが、古いのは皆形よい。色々変化があり且つ何れもよき彫りが伴ふ。用途の上から云って持ちよく造られ、且つ応はしい強さがある。こゝに選んだのは珍しい形ではないが、一番代表的な形だと云へる。ごく簡素で無駄な所がない。[中略]今造るものは形が皆醜い。どうしてこんな所にも墮落が来るか。(柳 1927: 107-108)

「用途の上から云って持ちよく造られ、且つ応はしい強さがある」とあるように、行灯皿と同様に、機能をもととして作り込まれた形に、ある種の「用」の「美」があると述べる。このようにみていくと、「用の美」とは、実際の機能に則したものの、すなわち「使いやすい」ものを示すかのようにも思える。しかし、上記引用中の最後にあるように、この時点での柳の関心は、古いものにあり、その視点は、現行品の「使いやすさ」とは少し異なっている。すくなくとも運動初期において柳らが愛でるのは、すでに使用されなくなった(なりつつある)「古いもの」であり、さらに、「かつて」の用途のために作り込まれた、それらがもつ、その形である。事実、彼らは、行灯皿を実際に行灯の油受けとして使うわけではないし、また墨壺を大工道具として使うわけでももちろんない。その形それ自体を、なかばオブジェのように愛でるのであって、その点において、「用の美」とは、実際の使用に際しての「使いやすさ」とは異なってくるのである。

4-2. 民芸とモノの機能—自在掛けを事例に—

この点をもう少しみてみよう。柳らは、1931年に、運動の機関誌として『工芸』という雑誌を創刊するが、その第3号(1931)では、自在および自在鉤の口絵特集が組まれている。自在や自在鉤に関連する8点の写真とその「挿絵解説」、そして京都帝国大学の昆虫学者・山田保治による「北国の炉辺」(山田 1931)が含まれている。山田と民芸運動との関係については把握できていないが、本号の「編集余録」によれば、山田は「玉虫厨子」の研究

でも著名であり、それによって「吾々の間には親しい」人物であったという（柳 1931: 63）。

自在とは、囲炉裏に鉄瓶などをつるすための用具で、つるす際の高さを「自在」に変えられるところから自在と呼ばれたらしい。そして天井の梁の部分から、この自在を掛けるために据えられていたのが自在鉤（あるいは自在掛）である。生活の近代化にともなって囲炉裏が減少していくと使用されなくなるものであり、民芸運動がスタートした時期には、徐々にその数を減少させていたような対象であったが、運動初期においては、重視された（好まれた）収集品の一つであった。とはいえ、先の墨壺と同様、柳らは、これを囲炉裏の上でそのままに使用することを目的とはしていなかった（運動同人の濱田庄司は、自邸の囲炉裏において使用してもいたが）。例えば、図 3 は、京都の河井寛次郎の旧自邸（現河井寛次郎記念館）での写真である。テーブルセットの奥にみえるのが、自在鉤であり、それが逆さまにされオブジェとして展示してあることがわかる。ここでもその「用」は、過去のものであり、過去の用のための形それ自体が享受されている。初期の民芸運動は、前近代的な古いものを、モノそれ自体はそのままに、その使用法を変えることで現代生活に持ち込むための、いわば「見立て」を提供したわけであるが、この自在鉤は、その見立てによる転用の典型的な事例の一つであるといえる⁴。

とはいえ、彼らが、そのもともとの使用法に一切頓着ないかということ、必ずしもそうではない。むしろ、それには一定の注目を払っている。図 4 は、1932 年に日本橋の白木屋で開催された「全日本更正工芸展」という展覧会の目録（秋葉 1932）に付された写真であるが、もともとは、件の『工芸』第 3 号に図版として掲載されたものである。柳によれば、これは、石川県の宮六三郎という人物の自邸の実際の映像であるという。ここには、「長く冬に閉ざされる地方」における「生活と炉」とが一つとなっているような生活が示されており、その「炉になくってはならないもの」が「自在」であるという（柳 1931: 65-66）。また、山田の文章においては、その状況がより生活に則した形で語られている。

炉は普通「イロリ」と言われ、町では所謂茶の間に、在家では勝手の広間の何づれも多くは室の端に近い所に切られてあるが、大家では各室に切られてある所もある。形は四角か長方形であるが、大きさも様々で、三尺角或は四尺角、或は三尺に四尺、四尺に五尺位のところであるが、一帯に町の小さくて在家のは大きい。深さは一尺前後で、町では木炭を在家では薪を焚かれる。挿絵（一）[図 4: 引用者注]の茶棚に向って左は主人の席で、正面は客席、右は家族或は使用人の席で此所は炉に沿ひ二尺五寸位の幅で上敷が布かれ、すぐ土間になってゐて、此土間は手前玄関に奥は台所に通じて居る。

斯ふ云ふ具合に炉の周囲に於ける其れぞれの席は大抵きまって居て、親しき方との用談も、村の相談事も凡べて此周囲で茶を汲みながら其間に決められる。（山田 1931: 13-14）

自在および自在鉤が設置される囲炉裏の配置、および生活について、思いの外、子細に示さ

⁴ ちなみに、手前のテーブルは、白を逆さまにしたものであり、河井自身の考案による。これも、使用されなくなった前近代的なものを、(当時の) 現代的な生活に転用していかうとする運動の「見立て」のあり方を良く示している。現在も、京都の河井寛次郎記念館において見ることができる。

れている。この引用部の後、山田の文章は、「自在鉤」「釣手と縄」「大黒」と「恵比寿」「自在」「鉤」「歴史」「分布」というふうには、自在および自在鉤のおよその形態、分類、それぞれの用法や機能的特色、歴史的展開、使用分布の概要と、これをめぐる使用の状況と文脈を記述していく。

かつて金谷(1996)が指摘したように(そして、本稿で上述もしたように)、民芸運動は、モノを、その旧来の生産と使用の文脈から引き剥がし、近代的都市的生活のなかに新たな用法とともに持ち込んだ。ここで取り上げた、自在(鉤)も、図3に見られるように、運動のなかでのその主な位置づけはオブジェである。山田によるような解説も、新たな生活にそれを持ち込んだときの付加価値のように機能しているともいえる。実際、民芸運動の周辺や、後の愛好者らは、当該のモノの本来の用法を示す「本来語り」とセットで、モノを見、享受した。「本来語り」によってモノに付与される「近世らしさ」や「地方らしさ」とは、民芸を、都市生活者にとっての新たな商品たらしめる重要なイメージでもあったわけである。そしてそうした形でのモノの受容は、渋沢や宮本、あるいは神崎が違和感をもって眺めた「個々の美」の重視と連動していることも事実である。

その一方で、例えば、雑誌『工芸』を眺めていくと、ここで紹介した山田保治のように、運動の中心的な同人ではない、「専門家」が登場し解説をしていることを複数確認することができる。それは、「民芸」に付加価値を付ける「本来語り」かもしれないが、しかし、その記述には、モノの生産や使用の文脈を多く語るものもある。そこには、柳の文章からだけでは見えてこない、民芸運動におけるモノの扱い方の一端が確かに含まれており、また、同時にそれは、民具研究との交差の始点となりうるポイントでもあると思われる。

6. おわりに

ここまで、民具と民芸について、両者を比較する研究などを簡単に紹介しつつ、その交差の実現へのとりあえずの始点として、民芸運動が、モノの機能をどのように捉えていたかについて考えてみた。それは、いわゆる「用の美」に対する一般的な理解を、少し転換させるという意味において、民芸に対する「一枚岩」的認識を揺さぶることができるものであったかもしれない。結果的にそれは、これまでと同様に、民具と民芸の違いを強調することになるかもしれないが、しかし、例えば、「機能」という指標を導入することで、「資料」と「美」、「総合」と「個々」といった二項対立の間を横断するような考察も可能になるはずである。この辺りについては、またおって考えて行きたいところである。

ところで、昨年国立新美術館および国立民族学博物館において開催された「イメージの力—国立民族学博物館コレクションにさぐる」展(「イメージの力」実行委員会2014)は、本稿の関心からするととても興味深いものであった。すなわち、(企画者の意図からは少しずれた解釈かもしれないが)それは、民博にあるコレクションを、地域や用途・機能などから分類された民族学的展示のあり方から切り離し、モノそれ自体を「美術」のように見せるとどうなるか、ということを検証しようとした企画展であった(ように思える)からであり、民芸的なモノの扱い方を想起させるものであったからである。同時にそれは、生産や使用の文脈に則したモノの収集・展示と、文脈から切り離されたそれとが、いわばコインの裏表のようなものであることも示唆してくれたように思う。生活を復元する総体としての民具へ

のアプローチも、モノの本来的な附置とは違う文脈（すなわち生活を復元する資料という文脈）にそれを位置付けるものであり、その点においては、構造的には民芸運動のモノの扱いと同様であるとも言える。マテリアリティ研究の広がりなどから、近年、モノをめぐる検討が活発になってきている。「イメージの力」展もそうした動きを受けてのものであったかもしれないが、こうした状況のなかで、民具と民芸の関わりへの検討にも、新たな光が当てられることもあるだろう。本稿が、その小さな一助となれば幸いである。

参考文献

秋葉 啓

1932 『全日本更正工芸展覧会』、白木屋。

有賀喜左衛門

1972 「日本常民生活資料叢書総序 渋沢敬三と柳田国男・柳宗悦」、日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書第一巻』、pp.1-42、三一書房。

有賀喜左衛門・戴 国輝・宮本馨太郎・谷川健一

1973 「柳田国男と柳宗悦」『季刊 柳田国男研究』3: 2-82。

「イメージの力」実行委員会

2014 『イメージの力—国立民族学博物館コレクションにさぐる』、国立民族学博物館。

加藤幸治

2011 『郷土玩具の新解釈 無意識の“郷愁”はなぜ生まれたか』、社会評論社。

金谷美和

1996 「文化の消費」『人文学報』77: 63-97。

神崎宣武

1989 「やきものへの視点 民芸と民具学」、岩井宏實・神崎宣武ほか『民具が語る日本文化』、pp.125-156、河出書房新社。

熊倉功夫・吉田憲司編

2002 「カラーグラヴィア 民具と民芸」『民族芸術』VOL.18: 8-24。

渋沢敬三

1933 『祭魚洞雑録』、郷土研究社。

竹中 均

1999 『柳宗悦・民芸・社会理論 カルチュラル・スタディーズの試み』、明石書店。

2003 「郷土のもの／郷土のこと—民俗学・民藝・民具研究」、「郷土」研究会編『郷土表象と実践』、pp.204-225、嵯峨野書院。

土田真紀

2007 『さまよえる工芸 柳宗悦と近代』、草風館。

日本民芸美術館編

1927 『民芸叢書第一篇 雑器の美』、工政会出版部。

濱田琢司

2003 「民芸と民俗—審美的対象としての民俗文化—」『日本民俗学』236: 127-136。

- 2006 『民芸運動と地域文化 民陶産地の文化地理学』、思文閣出版。
丸山泰明
- 2013 『渋沢敬三と今和次郎 博物館的想像力の近代』、青弓社。
水尾比呂志
- 1980 「解題」、『柳宗悦全集 第9巻』、pp.593-603、筑摩書房。
宮本常一
- 1979 『民具学の提唱』、未来社。
柳田国男・柳宗悦
- 1940 「民芸と民俗学の問題」『月刊民芸』2(4): 24-33。
柳宗悦
- 1927 「口絵解説」、日本民芸美術館編『民芸叢書第一篇 雑器の美』、pp.103-121、工
政会出版部。
- 1931 「編集余録」『工芸』3: 63-67。
1940 [1980] 「民芸の性質」、『柳宗悦全集 第9巻』、pp.262-271、筑摩書房。
1941a 『民芸とは何か』、昭和書房。
1941b [1980] 「用と美」、『柳宗悦全集 第9巻』、pp.305-315、筑摩書房。
1942 [1980] 「工芸文化」、『柳宗悦全集 第9巻』、pp.345-542、筑摩書房。
- 山田保治
- 1931 「北国の炉辺」『工芸』第3号: pp.13-21。
吉田憲司・神崎宣武・熊倉功夫ほか
- 2002 「パネルディスカッション」『民族芸術』VOL.18: 35-57。

Keywords

The Mingei(Folk Crafts) movement, Minge and Mingei, function of objects, Jizai-kagi

図版

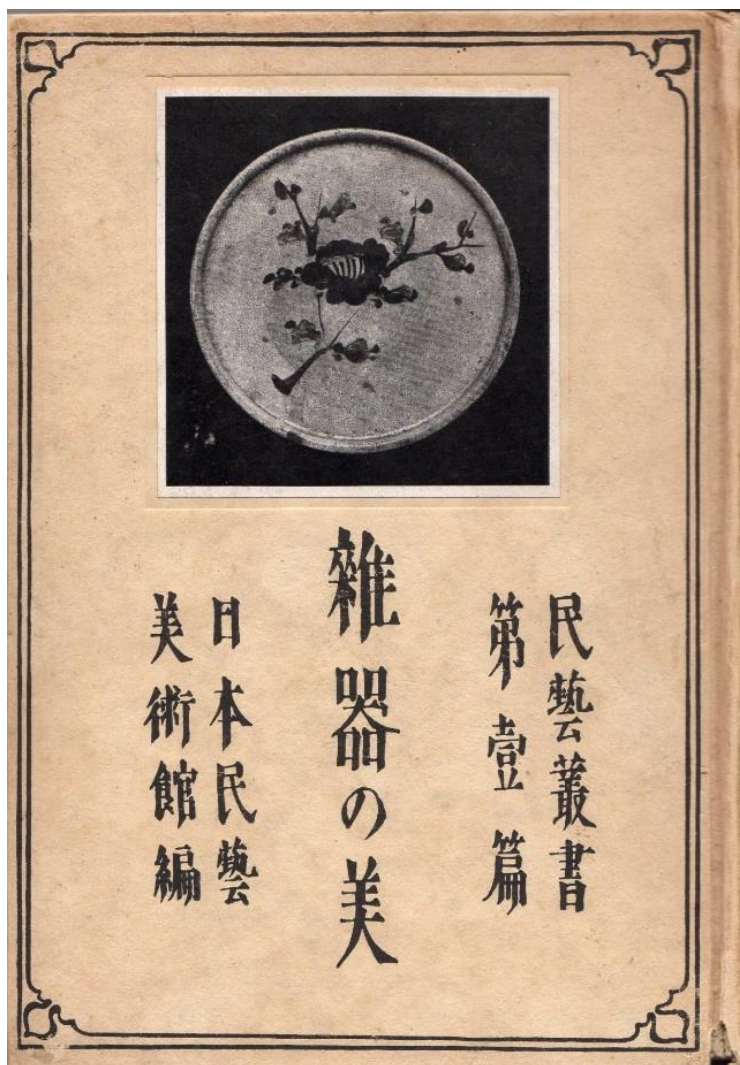


図1 『雑器の美』(日本民芸美術館編 1927)

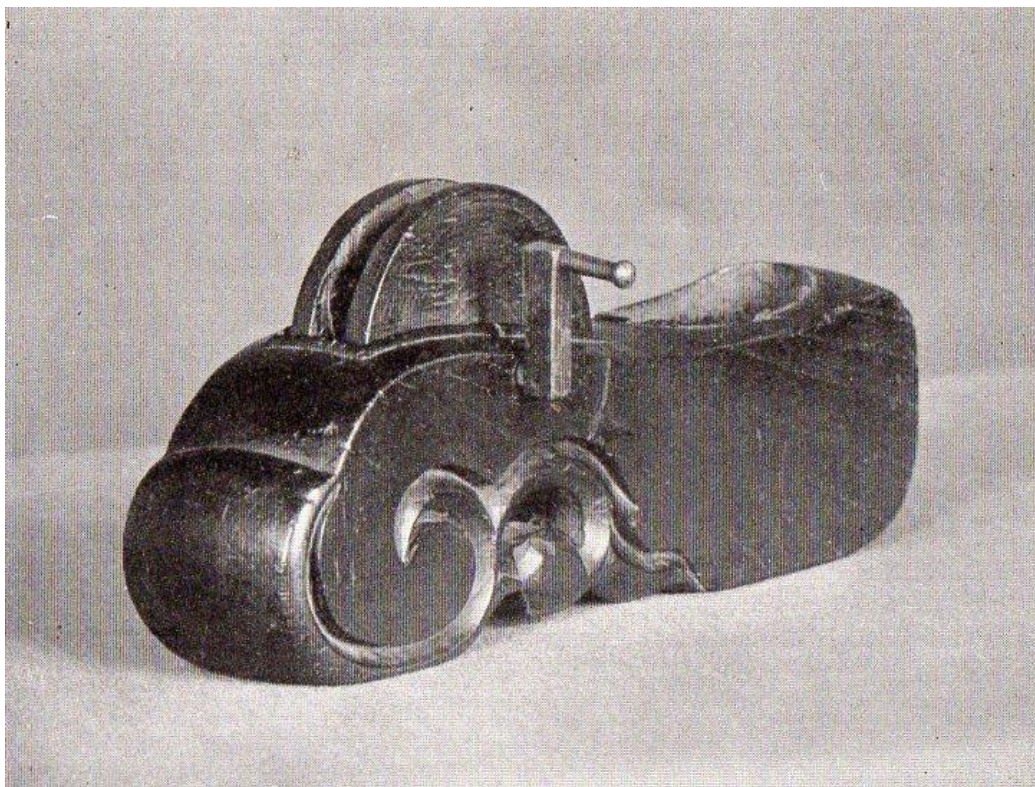


図2 民芸運動における収集品の墨壺 (日本民芸美術館編 1927 より)



図3 河井寛次郎記念館における自在鉤の展示

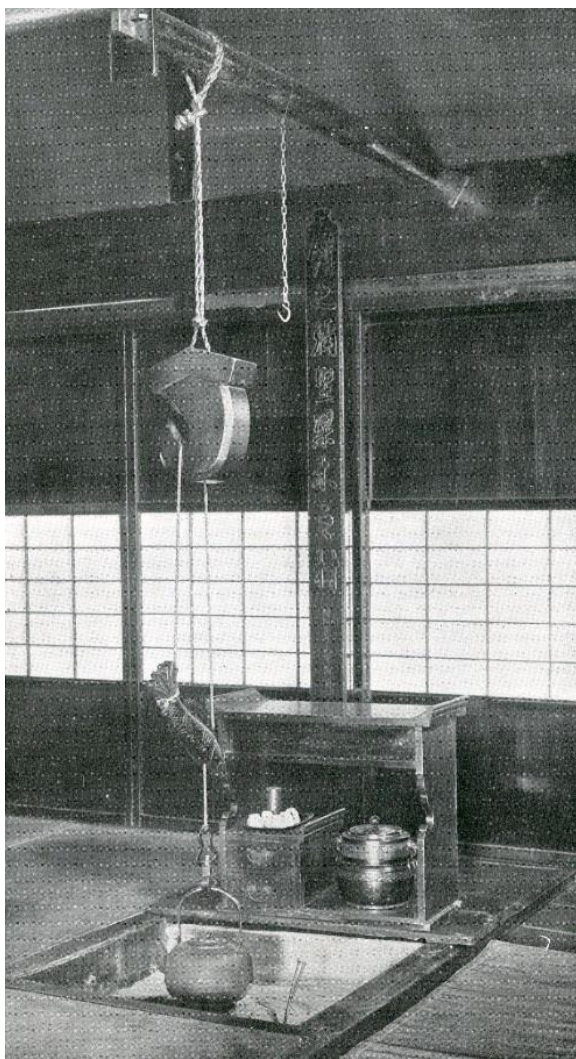


図4 囲炉裏における自在および自在鉤（秋葉 1932 より）

民芸運動と台湾原住民の工芸
——学説史及び集積された資料の整理に向けて——

角南 聡一郎 ((公財) 元興寺文化財研究所)

キーワード

民芸運動、台湾原住民、学説史、工芸

1. はじめに

日本民俗学と台湾、特に台湾原住民との接点は、学説史上からすると多いとは言い難い(角南 2013a)。しかし、柳田国男(1875-1962)や折口信夫(1887-1953)が、台湾総督府が刊行した『蕃族調査報告書』、『番族慣習調査報告書』など、台湾原住民の調査報告書を熱心に読んでいたことが指摘されており、柳田の「山人」や、折口の「異人」などの概念形成に、台湾原住民の調査データが果たした役割は大きかったとされる。また、台湾原住民の研究に先鞭をつけた、岩手県遠野出身の伊能嘉矩(1867-1925)は柳田と親交があった。伊能の遺稿を編集した『台湾文化志』の刊行を柳田が支援したことなどからも、柳田の台湾原住民に寄せる興味関心が、大きかったことを物語るものである。一方、渋沢敬三(1896-1963)を中心とした、アチック・ミュージアムの活動においては、台湾原住民調査が重要なものであったことは、収集資料中に台湾原住民のものが多くことから明らかであろう。コトバの民俗学である柳田民俗学において、日本という空間を跨いで台湾原住民を直接取り上げることは難しいことであつたらう。モノの民俗学である渋沢ミンゾク学においては、これらを日本のものと並べ比較してみることに、一つの意味を与えた。それが後に民具学と呼ばれる一潮流となつていった。

台湾における民芸運動の代表的なものに、戦時下の台湾で刊行された雑誌『民俗台湾』がある。『民俗台湾』の運動についての研究は、近年少なからずなされている(阿部 2009、黄 2010、張 2012)。しかし、その言及の対象は、漢族の習俗や民具がほとんどであり、台湾原住民を抽出して論じられることはほとんどない¹。物質文化研究という点においても、『民俗台湾』は、民俗学・民具学と民芸運動とを接合する、極めて重要な運動である。『民俗台湾』の中心的存在であつた、人類学者・考古学者の金関丈夫(1897-1983)は、民芸運動に共鳴し『民俗台湾』誌上で台湾の工芸品を紹介していた。また、台湾原住民にも深い関心を示し、その生活道具を紹介するなど、実は台湾原住民研究とも接点を有するものであつた。

¹ その中でも唯一とあって良いのが、林承緯の研究で、民芸運動の中の台湾原住民資料について詳しく言及している(林 2006)。また、最近、天野朗子によって柳の台湾での足取りが検証されている(天野 2014a~2014f)。

そこで、本稿では、民芸運動における台湾原住民関連の学説史を整理し、その中で収集された資料の行方を検討することを目的とする。

また、柳宗悦（1889-1961）をはじめとした民芸運動に関わった人々（研究者、収集家）により、日本国内へともたらされた台湾原住民資料がかなり存在する。しかしながら、これらの資料について全体的な言及はまだ見られない。そこで、学説史をまとめることにより、現在国内に所在する資料の来歴を検討するための基礎的研究を試みることができるのではないかと考える。

2. 柳宗悦と台湾原住民

民芸運動の中では、朝鮮、沖縄、アイヌといった国外、異文化の民芸についても大きく取り扱われていた。このような流れの中で、台湾原住民の工芸も捉えられていたのであろう。

民芸運動の中で、台湾原住民の工芸に柳がはじめて台湾民芸に注目したのは、1914年に大正天皇の即位を記念して東京・上野公園で開催された東京大正博覧会であったという（柳 1914）²。ここで博覧会に出品された台湾原住民の工芸を高く評価した。ここに出品された台湾原住民の工芸品には、タイヤル族、サイシャット族、ブヌン族、パイワン族、ヤミ族、アミ族の衣類・装飾品・武器・生活用具であった（ピヤマン編 1914）。民芸運動の黎明期に柳が既に台湾原住民の工芸に関心を抱いていることは興味深い。では『月刊民芸』誌上で最初の台湾原住民関連文献は何だったのだろうか。それは田中俊雄（1914-1953）によるものである。田中は、米沢の織物製造業を営む家に生まれた。柳主宰の民藝運動に参画した田中は、1939年に沖縄を訪れて以来、生涯に3度、離島を含む沖縄を訪問して沖縄織物の研究をし、その成果は『沖縄織物裂地の研究』としてまとめられた（田中・田中 1952）。

田中は、ライ社（屏東県来義郷来義）を経てクナナウ社（現同郷古楼）のパイワン族の織物調査に赴き、以下のように彼らの織物の価値について述べている。

「丁度このまえにここで葬式があつたさうで、うつくしい喪服がいつばいにだしてあつた。手にとるもの、すべて神品といふ気がひしひしする。あのヨーロッパのコプト織などに比肩して決してみおとりのしないものが、ざらにあり、おぼえず胸がときめかざるを得ない。頭目のつけたものだといふモモヒキもうつくしかつた。これらの織物類は蕃人の唯一の財産なのださうで、蕃人のあひだで五十円、六十円といふ高値で売買されてゐるといふ」（田中 1939）。

続いて金関丈夫が台湾工芸全体を概観する中で、以下のように台湾原住民の工芸品についても言及をした。

「織物として見るべきものはタイヤル、パイワン等北部及び南部の高砂族、及び台中州の平埔族の技術であらう。（中略）刺繍はまた、台中、台南、高雄州の平埔族、及びブヌン、パイワンの如き中南部の高砂族にもあり、苗、黎などのものと共通の技術を有してゐる」（金関 1942）。

また木具の項で以下のように、日本統治による彼らの工芸への悪影響に対して苦言を呈している。

² この点をはじめ指摘したのは、林承緯である（林 2006）。

「東部のタイヤルに「二宮金次郎」や「兵隊さん」を彫ることを教えた指導者の名が判れば、筆者は彼に喧嘩を吹きかけるつもりである」とし、「従来台湾の指導家は、工芸指導と云へば土産物の製作であると考えてみたらしい。その結果が今日見る所謂蕃産品であり、蛇皮製品であり、牛角製品である。これらの醜悪な製品を一掃するには先ず指導者の頭脳を改革しなければならない」(金関 1942)³。

つまり、当時の台湾では「蕃産品」つまり、台湾原住民の工芸品が、日本人によって土産物にアレンジされていたことに対する強い反発が示されている。

柳は、台湾の生活用具を調査する目的で、1943年3月14日から4月17日の約1ヶ月間台湾に滞在した。この際に台北をはじめとした各地へと旅し、民芸品を見て歩いている。終始、松山虔三が付き添った他に(松山 1943)、金関丈夫もそのほとんどの行程で同行した。

『民俗台湾』には、金関が記録した柳の台湾工芸に対する種々のコメントが掲載されている。その中で台湾原住民の工芸品についての記述を抜粋してみよう。

「赤絵の小皿 高砂族のうちにだつて尊敬すべきものが数々あることを知らなければいけない。われわれに出来ない立派な技術をもつてゐるつてことを、素直に認めなければ」(柳 1943c)。

「本島のものに非常に尊敬すべきものが多いと云ふことが判つて大変愉快に思つてゐる。先づ高砂族では織物が圧倒的に優れてゐる。若し三百年前にこれが日本に渡つてゐたら、疑ひもなくこれは大名物裂れになつてゐるに違ひない。また若し数千百年前に渡つてゐて、これが勿体ないたとへではあるが、仮に正倉院の御物に混つてゐたとしても、何人もその価値を疑ひはしないに違ひない。今ごろは大騒ぎして研究されてゐるに相違ない」(柳 1943c)。

「高砂族を原始民族として、低いものに見るのは一面当然でもあらうが、われわれの方が頭を下げて教へを乞はなければならない点があると云ふことは、これまた当然認めなければならない」(柳 1943c)。

「潮州ライ社にて かう云ふ立派なもの(パイワンの織物)を見ると、これを作り出す生活を尊重して生かしてやり度いと云ふ気がすぐ起る。さうしなければ済まないやうな気がするんだが、それがほんとなのぢやないかなあ」(柳 1943c)。

「羅東郡寒溪のタイヤル族 寒溪はタイヤルの特色がよく生かされてゐる。そして村や住居が清潔で衛生的に改善されてゐてなかなか立派だ。この点はアミ族の場合とは対蹠的だ。寒溪は理蕃政策に一つの解答を与へてゐる。及第点に達してゐると云つてもいい。衣服なども苧麻を染めて手織りで作つてゐるが、非常にいいものが出来る。美しいものを作る本能がまだ残つてゐるんだね」(柳 1943c)。

柳はアミ族の集落も訪れているが、具体的な言及はほとんどされていない。アミ族の生活改善が著しく、柳の印象は今一つであったようだ。

また同誌の巻頭言にも以下のようなコメントを寄せている。

「高砂族の織った織物を、美しいと見る人は多い。併しそれを産んでくれた人々に驚きを感じる人が稀なのは不思議である。彼等を未開人と軽蔑してゐる人は、その布の美しさを知つてゐる人とは思えない。ましてあんな原始人にどうしてこんな美しい布が織れるのかと考える如きは僭越の至りである。さうして又、なぜこんな事が吾々に容易に出来ないのかと考

³ この部分は後に本文が収められた『南方文化誌』では削除されている(金関 1977)。

える如きも、うぬぼれから来るのである。吾々には出来にくく、彼等には出来る力が当然あるのだと、そこまで考へてくれる人が稀なのは淋しい。美しさの魅力は、現れた姿よりも、匿れてゐる力にこそ潜んでゐる。物に驚きがあるなら、それを産んでくれる人に、一段と驚きを感じられねばならない。物をのみ愛して、人に冷かなのは、真に物を愛していない証拠ではないだらうか」(柳 1943b)。

柳は「高砂族」、つまり台湾原住民の工芸品、特に織物に対して、これが正倉院御物に混在していても違和感がないという例えのように絶賛をしている。柳にとって台湾の工芸品の中で印象に残ったものの一つが台湾原住民の織物であったといえよう。

また、渡台時に開催された座談会において、柳は台湾訪問の目的を次のように述べている。「さあ、何かからお話ししたらよろしいやら…お話しします上に、私がこちらに参つた目的は、この本島人の生活に用ゐられて居る工芸品を見度い云ふ事と、高砂族の品物をよく調べて見たいと云ふ事でありました」(柳ほか 1943)。

つまり、柳の中では台湾を訪れる前から、台湾原住民の工芸をじっくりと見てみたいという目的があったことがわかる。

更に座談会に出席をした中村哲(1912-2003、当時台北帝国大学にいた政治学者で、『民俗台湾』にも寄稿していた)の「高砂族の物で面白いものはありませんでしたか」の問いに、次のように答えている。

「高砂族の物はさつきもお話したが、パイワンのライ社に行きましたが、あれ等が着てゐる物は仲々立派なものです。織方も普通で。今のものは材料は少し悪くなつて来てゐますが…。交易所に出て来る時なんか、とて美事なものを着て出て来ます。之は然し在来のやり方をやつて居るわけですが、それよりも一つ興味を引いたのは、羅東の奥のタイヤルで寒溪と云ふ部落です。苧麻で布を作つて居りますよ。材料は良いし織機は昔風のもので、如何にも良いものを作ります。今でもいい物を作る力があるのです。ただ缺点是染料ですが、化学染料の染粉でやつてゐるので、直ぐ色が褪せましてね。昔風の自然染料でやればもつと良いものができると思ひますね」(柳ほか 1943)。

台湾原住民の織物は、古来の形状を留めていることを高く評価しており、最近はその素材に変化が生じていることを指摘している。柳が訪れた台湾原住民の集落は、寒溪(宜蘭県大同郷寒溪)(タイヤル族)、クナナウ社、ライ社、大武(現台東県大武郷)?、知本(現台東市)?(パイワン族)、具体的な場所は不明であるが、台東?、花蓮?、田浦社(現花蓮市)(アミ族)、それに花蓮県新城郷に立ち寄っているので、タロコ族にも出会った可能性がある(柳 1943d; 天野 2014a、図 1)。クナナウ社とライ社を訪れたのは、先の田中俊雄による調査を参考とした可能性が高い。

3. 民芸運動と台湾原住民工芸

では柳以外の民芸運動に参加した人々は、台湾原住民工芸をどのように捉えていたのだろうか。以下、それぞれの著作などから抜粋してみよう。

民芸運動の主要人物であった芹沢銈介(1895-1984)は、台湾原住民の織物・装飾品などを収集していたことが知られる。これらは現在、静岡市立芹沢銈介美術館及び仙台市の東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館に収蔵されている(乾 1982)。

染織家・岡村吉右衛門 (1916-2002) と収集家・張永欣 (1912-1977) の共著による『台湾の蕃布』は、民芸運動の中の台湾原住民工芸の一つの到達点である。『台湾の蕃布』上巻の序で張と岡村は、次のように記している。

「台湾に於ける山胞の生活は、他の原始民族と同じく精神文化と一体になっており、原始信仰に支配された宗教文化が生活面にそのまま形をとって現われるものである。本書でこれから述べようとする織物も勿論その例を逸脱するものではなく、むしろ彼等の宗教が骨格を形作り、社会制度が肉づけした文化相を明らかにしていこう。この文化に対し、台湾省人と日本人の二人の著者が、彼等に代ってそれぞれの立場から記述しようとするものである。(中略) 特に織り上げた布を眺めるとき、「蕃」として賤しむ理由のない美しさの前に心を打たれ、非常に高度であった美的情操と、仕事に対する偽満のない点に感動しない訳にはゆかないのである。高度の精神文化の精華としての織物に対して、蕃布の字は適当ではないとも考えられるが、翻って蕃と云う文字が茂る、殖えると云う意味であることを考慮に入れるとき、心が壮んであり、美しさが繁る布と云う解釈も充分成り立ち得ると思う。その意味に於て、蕃布の文字を使うことにした。蕃布の中の一部はエジプトのコプトや中南米のプレンカの織物にも匹敵し得るものが見出させる」(岡村・張編 1968)。

岡村は本書作成のため、1967年11月6日から11月22日と1968年4月5日から5月28日まで、渡台し現地調査をおこなった⁴。2度目の調査には郡上紬で知られた宗広陽介が伴った。

張永欣とは張耀燦の筆名である。張は1912年、台中県大雅郷(現在の台中市大雅区)に実業家の家に生まれ、台北において66才で病没した。張は日本に赴き19歳で日本の名教中学を卒業した。1936年に台北帝国大学理農学部に進学した。卒業論文は「岸裡大社與臺中平原的開發」で、後にその古文書1132点を母校に寄贈した。岸裡社とは現在の台中市神岡区のことである。戦後は実業家としての本業の傍ら臺中県文獻会の委員として、また古董文物の収集家として活動した。張は特に原始宗教信仰と台湾の民族芸術に関心を示した。後に弟の張添根が鴻禧美術館を設立した。

『台湾の蕃布』所収資料総数56点の内訳は、東京の日本民芸館蔵16点、奥野敏雄蔵15点、張永欣蔵8点、岡村吉右衛門蔵7点、岡田弘蔵4点、畑中基良蔵4点、芹沢銈介蔵1点、瀬川孝吉蔵1点である。

日本民芸館蔵のものは、柳宗悦収集資料であろう。奥野敏雄は京都の古民芸店店主であった。畑中基良は京都の書店・有秀堂のオーナー、岡田弘は東京の民芸品店・備後屋の店主である。瀬川孝吉(1906-1998)は、植物学者であるが、台湾原住民の研究者、資料収集家としても知られる。

岡村の収集した織物は、後に沖縄県立芸術大学に収められ、それを記念した展示も催された(沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館編 1997)。

台湾工芸の父と呼ばれる顔水龍(1903-1997)は、台南下營郷紅厝村(現台南市下營区紅厝村)に生まれた。絵画を学ぶため国立東京美術学校西洋画科(東京芸術大学美術部絵画科油画専攻の前身)に入学し、卒業後にパリへ留学した。後に大阪のスモカ歯磨の広告デザイ

⁴ 岡村らの調査の様子は、東京民芸協会刊行の『民芸手帖』に連載された(岡村 1968a～岡村 1968h)。

ンで有名となった。台湾へ戻った後は美術やデザインの教鞭を執るかたわら、『民俗台湾』の運動にも参加した。顔は柳が台湾に来た際にも、台中と台南の案内人を務めた。柳は顔の台南の自宅で、タイの籐製の蹴鞠などを見ている（柳 1943c）。その頃の顔は、総督府嘱託の身分で、台南での工芸調査を進め、本格的な工芸指導を開始していた（天野 2014a）。

顔は、戦後著した『台湾工芸』の中で、原住民各部族の生活用具を工芸品として取り上げている（顔 1952）。顔は 1935 年 5 月に蘭嶼を訪れたのを契機に、原住民を題材とした作品を描くようになった。蘭嶼のヤミ族の他にも、タイヤル族、サイシャット族、ブヌン族、ツオウ族、パイワン族、ピユマ族、ルカイ族、アミ族などであった。顔は現地で生活用具の収集や撮影もおこなっていた。蘭嶼以外では屏東のパイワン族、三地門のルカイ族がよく描かれている（涂 1993）。

丸山太郎（1909-1985）は、長野県松本市の出身で、自らの収集品をもとに松本市に松本民芸館を設立したことで知られる。丸山は、1936 年に東京に開館した日本民芸館の開館を報じる新聞記事であったという。その後、日本民芸館を訪れ、この運動に共鳴し、後に民芸協会長野県支部の設立にも参加した。丸山は台湾原住民の工芸にも関心を抱き、実際に現地へと足を運んでいる。丸山は民芸協会の会員でもあった、台東市で古物商を営む、黄順義の協力で資料を収集し持ち帰った。これらは現在、松本民芸館に収蔵されている。

以上のように、柳が台湾原住民の工芸を評価し、『民芸』誌上で紹介したことなどにより、国内では民芸運動の中での台湾への興味関心が高まったと考えられる。そして丸山など各地の収集家が台湾まで赴いて、工芸品を求めている。こうして持ち帰られた資料は現在、日本国内に所在する、台湾原住民資料となっている。つまり、国内に所在する理由の一つとして、柳をはじめとした民芸運動による、台湾原住民工芸の評価があったのではなかろうか。

4. 民芸運動周辺の人々と台湾原住民工芸

民芸運動に直接関わったわけではないが、柳と前後して台湾原住民の工芸を愛で、収集した人々がある。ここではその中の代表的な数名を取り上げておきたい。

画家で収集家でもあった宮武辰夫（1892-1960）は、台湾原住民の資料にも興味を抱き、パイワン族、タイヤル族、ブヌン族、ヤミ族の村を訪れて収集をしている（角南 2013b）。民芸運動と呼応し、『月刊民芸』や関西の民芸関係者が多く携わった『阪急美術』などに寄稿している。宮武が収集した資料は、大阪府箕面市の自宅に「原始芸術蒐集室」を設け展示されていたが、後に神戸市の豊雲記念館に収められた。

杉山寿栄男（1885-1946）は、はじめ図案家として出発したが、工芸史の研究者として、収集家として著名となった。杉山の略伝（藤沼・小山 1997）から台湾関係のものを抜き出してみる。原始工芸、アイヌ工芸に特に関心を示し、研究をおこなった。原始工芸の側面では、考古学者と行動を共にした。また、民芸運動の関係者では、アイヌ工芸関連で芹沢銈介、式場隆三郎と交流があった。杉山は、1927 年 3 月に松村瞭、甲野勇が人類学的調査で台湾に赴くのに同行している。この時の見聞を同年 5 月 21 日に東京帝国大学人類学教室で開催された、東京人類学会第 400 回例会にて、「台湾旅行談」として講演した。この要旨は『人類学雑誌』に掲載された。また同年 6 月 22 日に東京大学山上会議所で開催された日本考古学会例会にて「台湾蕃族の工芸」の題目で講演を行った。この内容は翌月の『考古学雑誌』

に掲載されている。翌1928年7月にも台湾旅行をおこなったことが確認されている。この他に台湾原住民関係の文献に、主にヤミ族の工芸について述べられた『文明協会ニュース』掲載の「台湾蕃族の土俗工芸を採ねて」、『台湾蕃族工芸図説』がある。杉山が収集した台湾原住民関係資料は、現在、多賀城市東北歴史博物館に収蔵されている（藤沼・小山 1997）。

小林保祥（1893-1984）は、幼少の頃に、植物学者・牧野富太郎に絵の手ほどきを受けたという。後に渡台して、台湾総督府臨時台湾旧慣調査会に就職し、台湾原住民の調査に従事した。その後も台湾に留まり、パイワン族の集落に画房を設けて製作の傍ら、同族の調査をおこなった（岸田 1985a）。1938年に帰国している。帰国後、小林は1944年に柳田国男の助力によって『高砂族パイワヌの民芸』を上梓する。書名に「民芸」とあるが、柳田とは親交のあったものの、民芸関係者とは接点はなかったようだ。

岡村吉右衛門は宗広陽介から本書を教えられたといい、「標記の著書の執筆者、小林保祥氏の名は、柳師訪台の折りなにかと便宜を計られた張永欣氏、顔氏からも研究者として小川尚義氏の名は教えられたが小林氏の話は聞いていない。長期にわたって高砂族の中で生活した同氏は、柳師渡台の前に帰国していたことにもよろう」（岡村 1996e）。

岡村は小林の視点について次のように讃えている。

「柳師提案の民芸は、民衆的工芸の略である。小林氏の著書の民芸は、民族工芸の略である。共に民芸という表記になってはいても含みが違う。言葉は造語者の意見通りには育たない。が、小林氏のいう民芸は、健全であり、土産物代名詞に堕ちた今日流行語の“民芸”の佛のないのはせめてもの幸いと思う。読者も小林氏の善意を汲んでほしい」（岡村 1996e）。

小林は直接、民芸運動とは関わらなかったが、台湾原住民の工芸を見る視点は、民芸運動に近いものがあつたといえよう。

5. 民芸運動と国内所在資料の来歴

以上概観したように、民芸運動及びその周辺では、台湾原住民に少なからずの関心を抱いていたことがわかる。前述したように、柳宗悦収集品は日本民芸館に、芹沢銈介収集品は静岡市立芹沢銈介美術館及び東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館に、岡村吉右衛門収集品は沖縄県立芸術大学に、丸山太郎収集品は松本民芸館にそれぞれ収められている。また、民芸運動周辺の人々では、宮武辰夫収集資料は豊雲記念館に、杉山寿栄男収集品は東北歴史博物館に所在する。

台湾原住民の工芸品は、紀年銘を持つものは皆無に等しい。そのような条件では、資料の来歴が非常に重要となってくる。つまり、誰によっていつ収集されたかが年代観を決定する大きな要素となってくる。しかしながら、所蔵館では台湾原住民の工芸品の専門家がないなどの理由から、資料が展示されることは少なく、図録などに掲載されることも多くはない。資料とともに収集時の記録を保管することは非常に大切なことであり、両者は不可分なセットであるといっても過言ではない。こうした民芸運動と関連する資料は、おおよそのコレクションの成り立ちが判明しているものが多い。これらを収集年度を勘案しつつ、総合的に検討すること、時期別の変遷を明らかにすることが可能であろう。民芸関係の収蔵資料は、織物の数が抜きん出ているようである。これは柳が当初より、台湾原住民の織物を高く評価し、自身も収集したことによるものだろう。加えて後に岡村らによって『台湾の蕃布』が上

梓され台湾原住民の織物の素晴らしさ、芸術的価値などが広く世間に周知されたこともあってではないかと考えられる⁵。

今回試みてみたような学説史上の整理を行いつつ収集資料の来歴を確認するという基礎的研究を構築することにより、更に研究の可能性が広がると考えられる。従来は民芸運動関連の資料は、民芸というデシプリンの中で言及されることがほとんどであり、モノそのものの検討がなされることは少なかった。基礎的研究の先には、民芸運動関係者によるコレクションは、アチック・ミュージアムによって民族学的、民具学的視点から収集されたもの、東京大学理学部人類学教室によって民族学的、人類学的視点から収集されたものなどと、同一の基準で比較検討することが可能となるであろう。物質文化研究という大きな枠組みの中では、分野を跨いでモノとしての情報を純粋に吟味することが出来るだろう。

6. おわりに

本稿では、大正期に起こった民芸運動の中で台湾原住民の工芸がどのように捉えられていたかを、学説史と収集されたコレクションの来歴などを整理する中で考えてみた。民芸運動では台湾原住民の工芸は高く評価され、中でも織物が最も人気があったことを明示した。このような傾向は、戦後も断絶することなく継続していったことが見て取れる。台湾が中国と大きく異なり台湾であることの要素として、台湾原住民の存在があることは、戦後も同様であった。また張永欣のような民芸運動に呼応した台湾人収集家の存在や、日本語が通じるということも、収集家にとっては訪れやすい海外であったと考えられる。いずれにせよ、多くの台湾原住民資料が日本国内に所在しているが、総合的な検討を行うには至っていない。資料を保管しきれなくなった収集家がコレクションを売却、寄贈することがしばしばある。こうした保管者・保管先が変わったコレクションの行方をしっかりと把握することも、今後の課題の一つであろう。

本文中は学説史の整理検討という性格上、先学の敬称を略した。本稿を成すにあたっては、林承緯先生に多大なるご指導・ご教示を賜った。また、資料の調査及び検討については山田仁史先生のご教示・ご協力を得た。また本研究には、文部科学省科研費平成 19～21 年度基盤研究(C)「20 世紀前半に日本人が収集した中国民具についての文化人類学的研究」、文部科学省科研費平成 25～27 年度基盤研究 (C)「日本国内所在・台湾原住民族資料とその来歴の基礎的研究」による成果を含んでいる。

参考文献

阿部 純一郎

2009 「戦時下台湾における三つの「地方文化」構想—『民俗台湾』と日本民芸協会の民芸保存活動を事例として—」『ソシオロジ』54 巻 2 号：71-88。

天野 朗子

⁵ 無論、織物が嵩張らず軽くて持ち運び易いことも、大きな要因であっただろう。

- 2014a 「台湾の工芸と柳宗悦－柳宗悦の台湾調査」『民芸』737号：6-15。
2014b 「台湾の工芸と柳宗悦(2)－台湾北部の旅」『民芸』738号：64-67。
2014c 「台湾の工芸と柳宗悦(3)－台湾中部の旅」『民芸』739号：51-55。
2014d 「台湾の工芸と柳宗悦(4)－台湾南部の旅」『民芸』740号：55-58。
2014e 「台湾の工芸と柳宗悦(5)－原住民の工芸」『民芸』741号：64-67。
2014f 「台湾の工芸と柳宗悦(6)－調査を終えて」『民芸』742号：55-59。
- 池田 敏雄
1977 「台湾の台所道具」『民芸手帖』228号：12-19。
- 伊藤 清忠
1969a 「台湾の民芸とデザイン」『民芸手帖』133号：8-13。
1969b 「台湾の民芸とデザインⅡ」『民芸手帖』134号：20-26。
- 乾 由明
1982 『歩：芹沢銈介の創作と蒐集』紫紅社。
- 岡村 吉右衛門
1968a 「台湾紀行1」『民芸手帖』116号：50-52。
1968b 「台湾紀行2」『民芸手帖』117号：24-35。
1968c 「台湾紀行3」『民芸手帖』118号：18-27。
1968d 「台湾紀行4」『民芸手帖』119号：20-31。
1968e 「台湾紀行5」『民芸手帖』120号：26-33。
1968f 「台湾紀行 最終回」『民芸手帖』121号：22-27。
1968g 「紅頭嶼紀行1」『民芸手帖』124号：8-17。
1968h 「紅頭嶼紀行2」『民芸手帖』125号：46-53。
1996a 「台湾先住民の織布(一)」『民芸』517号：50-55。
1996b 「台湾先住民の織布(二)」『民芸』518号：50-56。
1996c 「台湾先住民の織布(三)」『民芸』519号：50-55。
1996d 「台湾先住民の織布(四)」『民芸』520号：50-55。
1996e 「『高砂族・パイワヌの民芸』」『民芸』522号：50-55。
- 岡村 吉右衛門・張永欣編
1968 『台湾の蕃布』上・下 有秀堂。
- 沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館(編)
1997 『台湾原住民の織布展－岡村吉右衛門コレクション』沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館。
- 奥野 敏雄
1965 「台湾の旅」『民芸』148号：18-20。
- 金関 丈夫
1942 「台湾工芸瞥見記」『月刊民芸』43号：22-26。
1977 『南方文化誌』、法政大学出版局。
- 顔 水龍
1952 『臺灣工藝』、光華印書館。
- 岸田 幸吉

- 1985a 「台湾高砂族の織—小林保祥氏の戦前における調査記録より:その 1—」『月刊染織 α』1985 年 5 月号 : 62-65。
- 1985b 「台湾高砂族の織—小林保祥氏の戦前における調査記録より:その 2—」『月刊染織 α』1985 年 6 月号 : 23-25。
- 1985c 「台湾高砂族の織—小林保祥氏の戦前における調査記録より:その 3—」『月刊染織 α』1985 年 7 月号 : 62-65。

黄 淑芬

- 2010 「看圖說故事:思想起『民俗台灣』—以民藝解說與民藝之研究為中心」*Bulletin of Asian Design Culture Society : International Symposium of Asian Design Culture Society*, pp.529-540。

小林 保祥

- 1944 『高砂族パイワヌの民芸』、三国書房。

ジー・シー・ピヤマン (編)

- 1914 『東京大正博覧会出品目録』、英文日本案内社。

涂 瑛娥

- 1993 『蘭嶼・装飾・顔水龍』、獅子図書。

杉山 寿栄男

- 1927a 「台湾旅行談」『人類学雑誌』42 卷 6 号 : 240。
- 1927b 「台湾蕃族の工芸」『考古学雑誌』17 卷 7 号 : 473-494。
- 1929a 「台湾蕃族の土俗工芸を探ねて(上)」『文明協会ニュース』4 号 : 60-73。
- 1929b 「台湾蕃族の土俗工芸を探ねて(下)」『文明協会ニュース』6 号 : 79-94。
- 1929c 『台湾蕃族工芸図説』第 1 輯第 1 卷、工芸美術研究会。

角南 聡一郎

- 2013a 「台湾におけるミンゾク学の萌芽と日本民俗学—研究者の動向と物質文化研究に着目して—」『東アジア民俗学史シンポジウム予稿集』。
- 2013b 「芸術家・宮武辰夫の調査と蒐集」『日本民具学会第 38 回大会発表要旨集』。

竹下 賢一

- 2011 『丸山太郎—美しいものが美しい』、ほおずき書籍。

田中 俊雄

- 1939 「台湾の蕃社」『月刊民芸』7 号 : 34-39。

田中 俊雄・田中 玲子

- 1952 『沖縄織物裂地の研究』、明治書房。

田中 豊太郎 (編)

- 1963 『民芸図鑑』3、宝文館出版。

張 永欣

- 1965 「台湾民芸の現状」『民芸』148 号 : 5-12。

張 修慎

- 2012 「戦時下台湾における「郷土意識」と柳宗悦の「民芸思想」—雑誌『民俗台湾』と『月刊民芸・民芸』との比較」『桃山歴史・地理』47 号 : 38-67。

陳 炎正

- 2000 「岸裡社史料」『臺灣源流』19号：63-73。
- 藤沼 邦彦・小山 有希
1997 「原始工芸・アイヌ工業の研究者としての杉山寿栄男(小伝)」『東北歴史資料館研究紀要』23号：1-29。
- 松本市立博物館附属施設松本民芸館 (編)
2009 『松本・民芸・丸山太郎—丸山太郎の仕事:丸山太郎生誕100年記念特別展』松本市立博物館附属施設松本民芸館。
- 松山 虔三
1943 「たいわんところどころ-民藝館長柳宗悦先生に随行して-」『台湾公論』8巻5号：108-111。
- 丸山 太郎
1969 「台湾の民芸品を買いに」『民芸手帖』139号：18-20。
1976 「台湾に旅して」『民芸』281号：10-36。
1977a 「再び台湾に旅して (一)」『民芸手帖』229号：26-28。
1977b 「再び台湾に旅して (二)」『民芸手帖』230号：34-36。
1977c 「再び台湾に旅して (三)」『民芸手帖』231号：32-34。
- 三山 陵
1997 「台湾工芸運動の先駆者顔水龍先生を訪ねて」『民芸』537号：60-64。
- 林 承緯
2006 「台湾の民芸と柳宗悦」『デザイン理論』49号：63-73。
2006 「柳宗悦與台湾民藝」『文資學報』2号：71-88。
2008a 「台湾における民芸運動の受容」デザイン史フォーラム編『近代工芸運動とデザイン史』、pp.177-291、思文閣出版。
2008b 『民芸運動の理論と実践：柳宗悦の台湾観と沖縄観を中心に』大阪大学。
2008c 「顔水龍の台湾工芸復興運動與柳宗悦—生活工芸運動之比較研究」『藝術評論』18号：167-195。
2010 「從金關丈夫的民藝書寫看民藝運動對臺灣工芸研究萌芽的影響—以雜誌《民俗臺灣》之〈民藝解說〉為中心」『臺灣文獻』61巻2号：35-56。
- 柳 宗悦
1914 「我孫子から 通信一」『白樺』5巻12号：72-82。
1943a 「台湾の民芸に就いて (上)」『民俗台湾』23号：2-6。
1943b 「巻頭言」『民俗台湾』24号：1。
1943c 「台湾の民芸に就いて (下)」『民俗台湾』24号：12-16。
1943d 「台湾の生活用具について」『月刊民芸』50号：2-6。
1955 「台湾高砂族の織物」『民芸』26号：26-27。
1965 「台湾の民芸を語る」『民芸』148号：13-15。
- 柳 宗悦・金関 丈夫・大倉 三郎・中村 哲・立石 鉄臣
1943 「生活と民芸座談会—柳宗悦氏を囲んで—」『台湾公論』8巻6号：53-71。
- 渡辺 正一・佐々木 芳人・小田部 温・中川 隆史・横井 智 ほか
1968 「座談会台湾の民芸旅行」『民芸手帖』117号：8-22。

【図版典拠】 図1 天野 2014a を一部改変。

Keywords

Mingei Movement , Formosan Aborigines , doctrinal history , Arts and Crafts

図版



図1 柳宗悦渡台時の訪問地

アメリカ民俗学におけるフォークアート

後藤 明(南山大学人類学研究所)

キーワード

フォークアート、プリミティブ・アート、民具、アメリカ民俗学

1. はじめに

アメリカ民俗学における物質文化研究の泰斗 H. グラッシーはアメリカ的民俗文化の特徴は、完全には適応できない環境へ、たくさんの異なった文化が到来したことであるとする。具体的にはヨーロッパ各地からの移民、さらには奴隷に由来するアフリカ系移民の文化などから短期間で形成されたのがアメリカ民俗文化の特徴であるというのだ。さらなる特徴としては、恒常的な移動、かなり早い段階から社会の基盤が田舎から都市になったこと、あるいは農園から工場になったことである。また諸集団の孤立ないし分離の原因が地理的なものから経済的なものへと変化したこと、異なった環境と社会集団における許容性と実践可能性の葛藤、また限定的な民俗的要素と矛盾する大衆的要素を同じくらい併せ持つ多文化的個人のなかの緊張などが指摘できるとした (Glassie 1968: 241-242)。

そしてグラッシーはアメリカ文化は相異なった文化の共存、すなわち民俗文化 (folk culture)、大衆文化 (popular culture; mass or normative)、学園ないしエリート (academic culture; elite, progressive) 文化の三種類から捉えようとした (Glassie 1968: 5)。これら三種類の文化は地域的あるいは社会階層的に分離する場合もあったが、社会階層のレベルの違いと理解してはならないとする。というのは一人の個人の中に相対立する指向性がありうるからである。もちろん異なった指向性には社会階層や職業によって強弱は存在した (Glassie 1982: 130)。この考え方は柳田國男が社会ではエリートである人物が家に帰っては浴衣を着て常民的な指向性を兼ね備えることは珍しくないといったことと相通ずる。

またグラッシーは建築を例に、大衆文化の影響を受けても作り方は民俗的である場合を指摘している。そして造られたときに民俗的でないものは、使い方が民俗的あるいは民俗的なモノと併用ないし付置されたときは民俗的といえるのか否か、あるいは民俗的に造られたモノは、非民俗的に使われても民俗性を失わないのか否か、などをいろいろな事例において検討している (Glassie 1982: 11-12)。

さらにグラッシーは芸術といえる民俗文化は何かを考察して「現在のデザイナーは同時に人工物の美学と実践的な機能を認識している。人間は自らの美観を適応せずに、あるいはそれと対話せずにモノをつくるものではない。まったく芸術性を欠いた人工物などありえない」という (Glassie 1982: 135)。

アメリカの黒人移民のフォークアート研究書 (Valch 1991) の著作のある J. ヴェルチは次のように論ずる。フォークアートは本来、集合的な表現であるので、あるアートが民俗的と同定されたとき、研究者はひとつの作品の情報ではなく、その背景にある、たくさんの作品の情報を得る。またフォークアートは歴史的には先例があり、既存のパタンの限られたセ

ットに適合し、いくつかのバージョンにおいて出現する傾向がある(Valch 1985: 65)。

顕著な個性をもっている特定の職人の作品は、その作品を使う広範囲な公的な人々との接触にわれわれを導く。フォークアートは社会からかけ離れたモノとするのではなく、共有された世界観あるいは共同体が生活に対してもっている視点を表現するものと理解すべきである。また職人の顧客に依存する感覚は決して彼の才能と天才を減ずるものではない。彼の創造性は生き生きと印象的なままであるが、保守的な民衆的需要を満足させるためのカタチに流れ込む。それは共同体的な興味をターゲットにしている(Valch 1985: 68-70)。

2. フォークアート職人に関する 5つの神話

K.エームス(Ames)はフォークアート研究の中心地ウィンタートウル(Winterthur)博物館の特別展に対する解説書『必要性を越えて：民俗伝統におけるアート』(1977)の中でフォークアート(民俗芸術)、あるいはそれを作る職人集団に関する 5つの神話(偏見)を指摘する。フォークアートというある種ノスタルジックな響きを持つ概念には 5つの神話があるという(Ames 1977: 21)。

(1) 個人性という神話(the myth of individuality)

フォークアートの担い手である職人は通常個人としてアートを作り、またそれを売り、いわば個人経営主である。したがってその作品は職人ごとにユニークであるはずだ、という考え方である。博物館の展示においては「代表作」の断片的な展示によってそのような印象が作られる。その時代の類似した傾向を持つ職人の作品、あるいはそれに先行する時代の作品を並べないこのような展示方針では、どの時代の職人も様々な地域的時代的脈絡の中でアートを生産していることが忘れられる(Ames 1977: 22)。

この神話は人間の心の創意に富んだ(inventive)性格を強調するあまり、実際にアートを作るときになされる意志決定についての配慮を欠いている。椅子の事例でいえば、ひとつの椅子工房でなされた意志決定がいかにか他の工房の決定に影響を与えるかということが忘れられている。すなわち個人性の神話は人間の自由意志と個人的に無限な選択肢という現実にはあり得ない神話を形成している(Ames 1977: 22-23)。

主にヨーロッパからの移民で成立したアメリカ社会では、いかにアメリカで発案されたと思われるアートも多くの場合、その職人の出身である母集団に原型があることは、ドイツ系移民の職人が考案したとされる驚の意匠によっても示される(Ames 1977: 224-25)。

(2) 貧しいが幸せな職人の神話(the myth of the poor but happy artisan)

多くの研究者の言うようにフォークアートであるためには、その作品は上層階級と区別された集団のアートである。したがってそれを作る職人は経済的には貧しい傾向があったであろう。飲んだくれで定住せず、身を滅ぼしたようなライフヒストリーを持つ職人は少なからずいたであろう。しかし彼らは一様に「貧しいが幸せだった」と決めつける根拠はない。このような考え方の元には、職人が誰もが単調な仕事を繰り返すが幸せであった、あるいはそれを不幸と考えなかった、といった先入観が研究者にはあった。これは仕事ではなく余暇や趣味としてフォークアート作りをする現代人の感覚を過去に投影した偏見である。1920年代までが「貧しいが幸せな」時代、それ以降は退廃的であるというジャズ音楽に対する偏見と同じようにである。

(3) 手作りの神話(the myth of handicraft)

フォークアートは手作りであり、機械作りの作品はそうでないという思考方式である。T.ヴェブレン (Veblen) が『有閑階級の理論』で論じたように、手間が掛かっているからこそ買うような人々がいる。たんに財政的な理由で購入品を選ぶのは下手な買い方で、必要以上に使う(浪費する)ことができることを見せびらかすことで、経済力や地位を示す行動が取られる(顕示的浪費)。また R.トレント (Trent) は手間が掛かっていることが重要であるとする。そして現在の費用対効果から考えると実現不可能なような手間のかけ方に価値を見いだす人々がいるとする。

機械化や産業化が人間を疎外したという議論とは別に、轆轤や電動のこぎりを含め多くのフォークアートが機械化とまったく無縁であったはずはない。逆にエリートアートがまったくの手作りである場合も少なくない。

(4) 葛藤のない過去という神話(the myth of a conflict-free past)

フォークアートは過去、とくに平和な葛藤のない過去を自然主義的に表現したという誤ったイメージがある。フォークアートは職人が感じた時代状況をさまざまな技法で表現したものである。それは富裕な学術的芸術家(academic artists)とくらべ現実を表現する程度はそれ以上でもそれ以下でもない。この意味で、アフリカから来た奴隷や家庭内での女性の地位など見えにくかった集団やジェンダーの追究が重要なテーマとなる。

(5) 国家的独創という神話(the myth of national uniqueness)

アメリカが二百年間培ってきたアメリカ的生活の優位性を表現するのがフォークアートであるという観念である。自由で民主的で個人表現に富むというアメリカ文化の神髄をフォークアートに見るという態度であり、その意味でヨーロッパのフォークアートより先んじていたという自信にもつながる。しかし初期のアメリカの物質文化がヨーロッパの伝統からの変容であることをグラッシーが跡づけたように (Glassie 1968)、移民たちがアメリカという新しい土地に来て突然過去と決別して新しいモノを作り始めたわけではない。

このあとエームスはフォークアートにおける伝統(tradition)、装飾(decoration)、能力(competence)について論じている。そしてフォークアートは人間の心の作用(the operation of mind)に関する重要な切り口であり、そのすぐれた事例として本稿で紹介するジョーンズ (Jones 1975)、グラッシー (Glassie 1975)、さらにトレント (Trent 1977)ら を挙げている (Ames 1977: 99; cf. Martin and Garrison 1985)。

作品の魅力論ずる際「少ない方がいい (less is more)」、すなわち過度な装飾よりもシンプルな方が美しい場合もある。一方で、民具などを考えるときに純粋に機能的な解決などありえない (Ames 1977: 85)。芸術とは絵画や彫刻のみであると主張することで研究者は、モノの魅力は視覚的な価値だけではなく、その形態、色合い、バランス、対称性、割合(釣り合い)、触感などにもあることを忘れてしまいがちである (Ames 1977: 87)。

西欧人が日本刀の美しさを論ずるときに、とくに刃の機能美というかそのシンプルな形態に芸術性を感じ、驚くという。たとえば A.ルロア＝グーランは「日本刀の刃は機能上の均衡の奇跡」という (ルロア＝グーラン 1973: 297)。またボアズが論ずるように籠網などでは規則的な体の動きが美しい編み目を作り出す。逆に籠の場合、規則的に編んでいかないと構造が保てないことはインゴルドの指摘する通りである (Ingold 2000)。これをインゴルドは張り構造 (tensile structure) と呼んだ。同じ形態にたどり着くためには編み方は幾通

りか存在するのだが、何らかの規則にそって編んでいかないと実用にはならない。そしてそれは自然に美しい構造物になるのだ。

さて以下ではフォークアートとしての椅子を題材にした対照的な研究をふたつ紹介していこう。

3. 連続体から探るフォークアート

アメリカ物質文化研究の金字塔とされる作品にグラッシーの民俗建築のモノグラフがある(1975)。グラッシーによれば、物質文化はおおむね無識字層であった庶民の歴史を描く手段である。また彼の文献史学への批判はフランス・アナル学派を採用した「ニュー社会史」集団と呼応するものであった(Glassie 1968)。物質文化はそれを生み出す規則があり、また同時にコミュニケーションの一形態である。物質文化は単に読まれるべきテキストではなく、独自の語彙と文法を備えたテキストであると。彼の著作は物質文化研究者に自信を与えた。

グラッシーは言う「文化とは心の中のパタンで、文章あるいは家のようなモノを作るための能力である」(Glassie 1975: 17)と。また「モノは作られるがモノに関する概念は外部的なモノに関する内的な観念と関係している」(Glassie 1975: 17)。「論理的に能力(competence)は先行している。というのは脈絡から独立した行為としての能力を想像することはできるからである。一方脈絡に身を置く個人の問題に対するあらゆるアプローチはモノを創出する彼の能力(ability)の理解に依存するからである」(Glassie 1975: 17)。

彼はバージニア中部における歴史建築の分析を通して基本的な部屋の大きさは連続的に増大ないし減少するのではなく、ヤード yard(約 90 センチ)を基本にキュービット cubit(中指から肘までの長さを原理とする 50cm 程度の単位)さらにスパン span(親指と小指の間の長さで約 23cm)という単位を加算ないし減算して決められたらしいことを見いだした。つまりヤードの半分はキュービット、その半分はスパンという具合である。さらに部屋を足して行くルール、一つの部屋を分割していくルール、さらに部屋の間に関(pearcing)=通路を作って繋ぐときの原理などを抽出して、多様な建築構造を数少ないルールの組み合わせで説明しようとした。この考え方は構造言語学というよりもチョムスキーの生成文法モデルとしている。

このような分析手法を椅子について行ったのが R.トレントである。トレントが行ったのは博物館に収蔵されている 1720 年代から 1840 年代にかけて、アメリカ・コネチカット州ニューヘイブンにおける「ハート型と王冠 (Heart-and-Crown) 伝統」に属する椅子の分析である。トレントはグラッシーの方法論に影響をうけ、「ハート型と王冠伝統」に属する椅子の基本的プロポーシオンを、規準的寸法とその等分の寸法の足し算のような比較的単純な原理で説明しようとした。このような方法によってグラッシーと同様、トレントはその時代に創り出された椅子には変異の中に、職人たちがもっていたある種の製作原理を見いだそうとしたのだ。製作原理は基本的な構造を決定するが、一方、変異や新たな構造を生み出すための原動力になると理解される。このように、著名な芸術家個人ではなく、職人集団というマスの中に共有される伝統こそがフォークアートの特徴といえるだろう。

4. 一人の職人から探るフォークアート

グラッシーの民俗建築に関する記念碑的な著作 (Glassie 1975) と同じ年に出たジョーン

ズの『手作りのモノとその製作者』(Jones 1975)はもうひとつの記念碑だと筆者は考える。

T.シュレレスは80年代初頭にかかれたアメリカ物質文化研究のレビューでジョーンズに言及して次のようにいう。ジョーンズは、個々人はその信仰、価値観、技量あるいは同意においてユニークであるという仮定のもと、モノの創造主である個人に焦点をあてた。そして認知的・行動的な過程、個人的な創造性および美的な衝動を理解し説明しようとした。すなわちジョーンズは安易に文化を説明要因にしないで、対象はそれをつくった人を知らずには十分には理解できないとした。そして対象物は何かのための道具であると同時に目的でもある。すなわち対象物は美的な効果と同時に実践的な意味を持つ。このような立場からジョーンズは芸術家 (artist)、職人 (craftsman)、生産者 (producer)、創造者 (creator)、椅子作り (chairmaker) などの概念を区別せず、交換可能な概念として使った。

彼のアプローチは人間の意識を構造化する普遍的なパターンを希求する構造主義者（これはグラッシーなどを意識している）が目指す斉一性ではなく人間の創造性の多様性を強調する。両方のアプローチは、ともに工作人（ホモ・ファベール）の心的型にたどり着くために「モノの作り手の心」に入り込もうとするが、構造主義者が大量のデータの蓄積に向かうのに対して（例 R.トレント）、トマス・アドラー (Thomas Adler) やサイモン・ブローナー (Simon Bronner) のようなジョーンズ的行動主義者は少数の職人とその作品に集中する。このような彼の方法は、職人の生産物の生産、使用あるいは販売に対する職人の信仰、価値観そして情熱の同定を目指すものである。それによってジョーンズの方法論はニューエスノロジー、民族意味論、あるいは認識人類学の魁ともいえる (Schlereth 1982: 58-61)

以下、ジョーンズ自身の言葉を追いながら彼の視座を見ていこう。

この著作『手作りのモノとその作り手』はケンタッキー州に住む、チャーリーという一人の椅子職人を題材にしている。まずこの著作を開くと驚きがある。文字が筆記体というか「手書き」のような印象をうけるからだ。だが実際はD.コムスタック (Comstack) という人物の考案した活字を使っているようである。かなり凝ったあるいは拘った書物だと感じさせる。

さてチャーリーは教育がなく、ほとんど文字が書けない人物であり、家計もけっして楽ではなかった。しかし彼に直接依頼して椅子を求めた顧客がおり、チャーリーは顧客のニーズや希望に応じて椅子を作っていた。さらに余裕があれば自ら新しい構造の椅子作りに挑戦するような創造性も持ち合わせていた。

まず序章でジョーンズは自分の基本的スタンスについて次のように説明する。一人一人のアーティストは、たくさんの方に動機づけられた複雑な個人なのである。そしてどのような対象の製作、使用あるいは評価も分析し理解するのは難しい研究対象なのである (Jones 1975: vi)。さらに、人間行動の研究は人間そのもので始まり終わるべきである。すなわち個人に焦点をあてるべきである。対象はそれを作った人の知識なしには理解し評価できないからである。そしてその対象の特徴は、続く時代の性質を生み出したと言われている前の時代の先行する作品への言及のみでは説明しえない (Jones 1975: vii)。

そしてジョーンズは職人の製作するモノの本質について次のように論ずる。モノは何らかの実践的な結果を成し遂げるための道具であると同時に、同じくらい目的そのものである。研究者は技術的過程と同様に、芸術的あるいは創造的な過程から目を背けることはできない。生産物は美的という目的に合致するだけでなく、実践的な目的にもそっている。そして生産物の評価は外見と同時に使用しやすさも考慮される。そしてアートとクラフトには人工的な区別はなしえない。また創造する (to create) ことは、形成する (to build) こ

とや、構成 (to construct) することと同義で使われる (Jones 1975: vii-viii)。

ジョーンズは具体的な分析項目として、一人の職人に着目して生産に影響を与える次の要素を検討する。すなわち、道具、材質、製作技術、他の生産者から習ったデザイン、顧客の好み、間違い、突発事態、そしてとくに職人の信念、価値観、願望(野心)などである (Jones 1975: viii)。

さらにジョーンズはアメリカ先住民やオセアニアのプリミティブアート研究に積極的に言及する。この点がアメリカにおけるフォークアートの特徴である。原始芸術には非個人性、匿名性という偏見がある。F.ボアズ (Boas) はアートそのものではなく、アーティストに注目すべきと言った。英国の A.ハッドン (Haddon) も原始芸術の形態が何を意味するのかを追究することに終わらずに、なぜそうなのか、その背景の動機などにも注目すべきといった。そしてボアズは、ものづくりにおける技能の発達と芸術的な活動との間に密接な関連があることが明らかであると考えていた (ボアズ 2011: 26-27)。

次にジョーンズはフォークアート研究の真髓について、形態を解釈し、なぜそうになっているのかを見いだすことが肝要であるとする。これらの目的を果たすためにわれわれは対象を検討するだけではなく、その対象の製作者と彼らが他の人々で行っている交流を検討しなくてはならない。しかしフォークアートの製作者を非個人的に見る傾向、あるいはフォークアートは同質であるとする傾向が研究者の間に指摘できる。同様に、フォークアートやプリミティブアートはそれ自体として研究されてこなかった。あるいは人間行動のよりよい理解のために研究されてこなかった。いつも他の目的のため、たとえば文化伝播の証拠とか特定の民族集団の同定のために研究されてきた (Jones 1975: 9-10)。

製作における心的プロセスは何よりも、生産者自身のコメントと彼がその道具を扱い、あるいは仕事の進み具合を確かめるやり方、表面のクオリティー、バランス、あるいは部分的要素の調和を確認するやり方から推測できる。換言するとわれわれは関心をいかにモノそのものが最初に関心を引いてもモノそのものではなく、個人とその行動に向けるべきである (Jones 1975: 11)。

ジョーンズは自分に関心を持つのはモノを造り、何かをする個人であり、他の人と交わりながらそれらを買って使う人々である。彼はいう「私に関心を喚起したいのはときには矛盾し、いつも刹那的でとらえどころがないが、われわれが必要なのは個々人の経験と観念に注意を向けることである。それらの経験と観念は彼らが造るモノとその手段に関係し、またそれに表現される。そしてそれらを造り出すのに必要な技法のために評価される日用品に私は焦点を置きたい」と (Jones 1975: 217)。

椅子作りは手によって対象を製作するという結果に終わる産業であるので、個々の生産者は、顧客の願望が影響しているとしても、モノを作ることに関与した行為主体であり、彼の感情、価値観、経験、信仰そしてニーズが彼の作るモノの中に表現されており、またかれの作り方に表現されている。研究者は椅子作りの著作権は知らないにしても、作者不詳 (anonymous) とは意味が違うのだ (Jones 1975: 223)。

ジョーンズは最初の著作から十数年たって、同じ対象である椅子職人についてまったく別の著作を著した (Jones 1989)。その中で論ずる：人々が作るたくさんのモノは何らかの実践的な目的を遂げるための手段であると同時に、それ自体が形態を賞賛されるべき目的である。技術的な過程と創造的な過程はそれゆえ絡み合っている。生産物の評価は使用に対する適正と外観の両方の考察を認める (Jones 1989: xi)。

また伝統という概念について論ずる：伝統は創造性、技術革新、あるいは変化の敵ではない (Jones 1989: xi)。技術は力ではなくいかにものごとをなすかについてのアイデアの源泉

なのである。伝統的な形態と過程は過去に於いて効果的と証明されあるいは人々とそのやり方の定義とされることでモデルとして供されるかもしれない(Jones 1989: 250)。

5. おわりに：「プリミティブアート」研究からの視点

本稿を終えるにあたり、何がフォークアートで何が民具なのか、などと議論することは生産的でないように思われる。人類史を論じたフランスの先史学者ルロア＝グーランによると、人類は進化過程において道具の洗練と美的感覚の発達は同時進行で起こったとされるからだ。彼によると人類の技術には(1)各機能が満足すべき形へと進化する、(2)さまざまな機能の間に妥協が行われ、それが理想への接近度の多少はあれ、形を維持する、(3)〈装飾〉定式で表現される、生物の、あるいは民族の過去から受け継いだ上部構造の働きがある(ルロア＝グーラン 1973: 294)。たとえばアフリカ・サハラ地方の鍬の系列を調べてみるとそこには驚くべき多様性が見いだせるので、「経験的に知覚された機能の輪郭の周辺で、材料の拘束を通して、材料と妥協しながら鍬を造る刻み手の個人プレイが明らかに感じられる」(ルロア＝グーラン 1973: 298)。

すなわち機能の美学と象形の美学がどの文化でも混じり合っているのであり、「機能が形の自由にまかせる狭い余地のなかにひそみあって、様式をたもちつづけている」(ルロア＝グーラン 1973: 299)のである。

またボアズは「技法上の必要性和規則正しい身体運動の習慣を通して生じた」模様のすばらしさを指摘し(ボアズ 2011: 76)、また「かたちへの思い入れ、つまり、自分がつくったもののかたちを強調するように人類を駆り立てる美的衝動」の存在も指摘する(ボアズ 2011: 78)。

これらの観察より彼は装飾芸術のあり方を決定する要因として、技法上の動機に多少なりとも密接に結びついた要因、身体の生理的な条件と結びついた要因、また感覚的な経験の一般的な性格と結びついた要因、など複合的な要因を指摘する。そして結論する「かたちへの根本的で美的な関心が本質的に重要であり、芸術の純然たる形態においては、芸術は必ずしも目的ある行為へのあらわれであるとは限らず、むしろ、かたちへの反応に基礎を置いており、その反応は技法の熟練を通して発達する」(ボアズ 2011: 84)。

以上アメリカ民俗学あるいはアメリカンスタディーズにおけるフォークアート研究の流れを見てきた。それを理解する視点として民俗学がアメリカにおける特異な位置づけ、すなわち人類学におけるプリミティブアート研究との関連性をさらに追求する必要がある。

参考文献

Ames, Kenneth L.

1977 *Beyond Necessity: Art in the Folk Tradition*. Winterthur: The Winterthur Museum.

ボアズ、フランツ

2011 『プリミティブアート』、言叢社。

Bronner, Simon J. (ed.)

1985 *American Material Culture and Folklife: A Prologue and Dialogue*. Ann Arbor: UMI Research Press.

Glassie, Henry

1982 "Folk Art," In: T. J. Schlereth (ed.), *Material Culture Studies in America*. pp.124-140, Nashville: The American Association for State and Local History.

- 1999a *Material Culture*. Bloomington: Indian University Press.
1999b *The Potter's Art*. Bloomington: Indian University Press.
- 後藤 明
2011 「民具研究の視座としての chaîne opératoire 論から物質的関与論への展開」『国際常民文化研究機構年報』2:201-218。
2013 「序論：モノ・コト・時間の人類学研究——物質文化の動態的研究」『南山大学人類学研究所・研究論集』1:1-32。
2014 「現代のモノ作り論からみた技術と学習に関する研究ノート」『交代劇：ネアンデルタールとホモサピエンス交代劇の真相：A-02 班研究報告書』No.4:pp.87-114。
- Ingold, Tim
2000 “On weaving a basket,” In: T. Ingold, *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*. pp.339-348, London: Routledge.
- Jones, Michael Owen
1975 *The Hand Made Object and Its Maker*. Berkeley: University of California Press.
1989 *Craftman and Cumberlands: Traditions and Creativity*. Lexington: The University Press of Kentucky.
- ルロア＝グーラン、アンドレ
1973 『身ぶりと言葉』、新潮社。
- Quimby, Ian M.G. and Scott T. Swank (eds.)
1980 *Perspectives on American Folk Art*. New York: W.W. Norton.
- Schlereth, Thomas
1982 “Material culture studies in America: 1876-1976,” In: T.J. Schlereth (ed.), *Material Culture Studies in America*. pp.1-75, Nashville: The American Association for State and Local History.
- Swank, Scott T.
1980 “Introduction,” In: I.M.G. Quimby and S.T. Swank (eds.), *Perspectives on American Folk Art*. pp.1-12, New York: W.W. Norton.
- Valch, John Michael
1985 “The concept of community and folklife study,” In: S.J. Bronner (ed.), *American Material Culture and Folklife: A Prologue and Dialogue*. pp.63-75, Ann Arbor: UMI Research Press.

Keywords

folk art, primitive art, folk artifacts, American folklore

町工場の機械工がもつ熟練技術
——金属切削加工の「段取り」を事例に——

加藤 英明 (南山大学大学院)

キーワード

町工場、熟練技術、金属切削加工、段取り

1. はじめに

現代社会において、機械でつくられた製品は日常生活のなかで広く浸透しており、私たちが生活するうえで欠かすことができないものになっている。また、そのような製品は機械工場で生産されており、製作段階においても機械との関わりは自明のものとなっているといえよう。しかし、民具と民芸にとって機械製品は、つくり手の手作業や創造性が欠如しているものとして考えられ、研究や蒐集対象としてきた伝統の生活用具の対立項として捉えられてきた。

本稿では、このような背景をふまえて、機械をつくり手との関わりの中で考察し、民具と民芸において機械を捉えるひとつの視点を提示したい。機械を理解するためには、つくり手が機械に関わることで現れるさまざまな問題をどのように解決しているのかを拾い上げる必要がある。そのために、機械の構造や機能について分析するのではなく、機械を使用する工場のつくり手に注目し、つくり手が機械をどのように使用しているのか、その行為に注目し分析する。そこで本稿では、愛知県の刈谷市にある金属切削加工を営む町工場を事例に、工場で働く機械工たちがモノづくりをどのようにおこなっているかを分析する。具体的には、機械工が部品をつくる一連の行為を概観し、そのなかでも製作全体を構想する「段取り」に焦点を当てることで、町工場の機械工がもつ熟練の技術について明らかにしていく。そして、機械を使用する現場において人間が機械に対して従属的な位置に置かれているのではなく、悪戦苦闘し随所に創意工夫をおこなう機械工の主体的な行為があらわれていることを示していく。つくり手の主体的な行為を機械使用のなかで見出すことで、民具や民芸のなかで積極的に扱われてこなかった機械や工業製品を研究対象として位置づける足がかりを提供したいと考える。

近年、とくに民具研究において古典的な民具概念には含まれなかった自動車や電化製品など、複雑な構造をもつ機械を研究対象とする試みが模索されている(川村 2008; 朝岡 2008; 近藤 2002; 新井 1993)。これらの研究は、民具の減少に伴う研究領域の縮小を背景に、日常生活で必要とされている工業製品に注目しながら、伝統の生活用具との連続性や変容の過程を記録する必要性を主張するものである。本稿においては、暮らしのなかの機械

自体を考察するのではなく、つくり手の技術的側面に焦点を当て分析を進める。大量生産される機械部品は、職人がつくる一品モノに比べると、つくり手の顔がみえず画一化されたものとして捉えられがちである。しかし、その製作過程をみると、その過程のひとつひとつにつくり手の今までの経験が反映されており、製作する部品によって異なる様相があらわれている。

現代の機械工業が関わる町工場において、1970年の後半からエレクトロニクス装置を搭載したNC工作機械が浸透し普及していった(河邑 1997)。NC工作機械は、従来の汎用工作機械とは異なり手動で操作するレバーやハンドルが無くなり、身体をもって機械を動かす必要がなくなった。しかし、このことで人の作業が消失し、機械が人の作業を代行するというわけではない。町工場における機械工のつくる過程に注意を向けると、機械工の注意や判断、ある種の巧みさを伴う熟練技術をみることができる。

このような熟練技術は、機械でモノを加工する手前の段階である「段取り」に色濃くあらわれるようになっている。この「段取り」は、調査対象としている町工場のなかでは、機械の設定や道具、材料を準備する行為として捉えられている。本稿では、この狭義の意味だけでなく、「段取り」の意味をより拡張し、機械工が注文主や機械や道具の性質、予測される加工後のモノの変化など、製作に関わるさまざまな要因を考慮に入れながら製作全体を体系立てながら構想する行為として考える。この点を踏まえて現代の町工場におけるモノづくりを捉えていきたい。

2. 愛知の機械工業

愛知の機械工業の歴史と調査地である三河地区の機械工業の現状を記述する。愛知の機械工業は、明治時代に名古屋を中心に西洋からの機械の輸入を契機にはじまった。とくに当時の名古屋は、機械工業が定着する2つの特徴をもった地域であった。1つ目は、名古屋が江戸時代から続く工業・商業・雑業などを営む手工業を中心とした職工5人以下の家内工業¹が分厚く存在していたことであり、これらの広範な家内工業が、西洋からの機械の移植を根付かせる役割を担うことになった(新修名古屋市史編集委員会編 2000a: 434-436)。2つ目は、名古屋が江戸時代から続く木材の集積地であったことである。明治から昭和初期にかけての機械は、土台や骨組みに木材を使用していたため、機械を製造するために木材を安く調達することが重要であった。このことは、名古屋での機械製造の発達や、外部からの資本家による鉄道車両や航空機などの機械工場の誘致を促進させる要因になり、愛知の機械工業の基礎を築きあげていった(鶴田 1982; 塩澤・斉藤・近藤 1993)。

大正時代から昭和にかけて、軍需を背景に、航空機に代表される軍事機械を製造する巨大企業の誘致が加速した。軍事機械の生産増加は、金属による機械部品を大量に必要とし、機械工業を発達させるものとなった(新修名古屋市史編集委員会編 2000b: 59-60)。その後、第2次世界大戦期には、資材・資金・労働力が軍需産業へ投入され、とくに三菱重工業と愛

¹ 名古屋の家内工業には、足袋や組ひも、指物・扇子・うちわ・提灯・竹塗箸・仏壇・鼻緒・履物などの近世以来の雑工業や、からくり人形や指物師・鋳師などの多様な専門職工が存在していた(新修名古屋市史編集委員会編 2000a: 434-436)。

知時計電機の2大航空機メーカーを中心として、多くの関連会社・下請会社群が形成されるにいたった (ibid.: 760)。それとともに、繊維工業なども軍事産業へと転換が進められ、名古屋は一つの航空機生産工場へと収斂されていった (ibid.: 763-764)。

戦後の愛知の機械工業は、トヨタ自動車による自動車製造を中心に発達した。その産業構造は大規模工場と小規模工場に二極化しており、その特徴として、300人以上の従業員からなる大規模工場が大阪や東京に比べて多い² (表1)。そのため、自動車関連の大規模工場から発生する自動車部品や試作部品、設備に使用する治工具などの仕事をおこなう金属加工に専門特化した小規模工場が多く存立する。そのような工場は、1つの地域に集積するというよりは、広い三河地区において、市の中心地や密集した住宅街、また市街から外れた郊外、工場団地などさまざまな場所に散らばって存立している。

現在、愛知の機械工業における小規模工場は、バブル崩壊やリーマンショックによる経済不況の影響、2000年からはじまったトヨタ自動車によるコスト削減の波及、そして海外への積極的な工場の移転などさまざまな出来事が重なり、1990年をピークに年々減少している (表2)。このような状況のなかで筆者は、三河地区にある金属切削加工を営む小規模工場を2012年3~4月、8月と2014年5月から現在に至るまで断続的に調査をおこなった。本稿は、2012年4月から継続的に参与観察をおこなっているT社の事例をもとに機械工の作業を考察したものである。

	3人~299人	300人以上	合計
愛知県	8658	213	8871
東京都	5588	33	5621
大阪府	9234	62	9296

表1 愛知県、東京都、大阪府の機械製造業に関わる事務所数 (2010年) (通商産業大臣官房調査統計グループ編『工場統計表 市区町村別編』各年版より筆者作成)

² 機械工業の範囲について、日本の標準産業分類では一般機械器具製造業・電気機械器具製造業・輸送用機械器具製造業・精密機械器具製造業の4つの機械がつく中分類業種と武器製造業の5中分類業種の中の器具を除いた完成品がほぼそれに当たることを示している (渡辺 1997: 44)。2008年より、一般機械器具製造業と精密機械器具製造業は再編され、汎用機械器具製造業と生産用機械器具製造業、業務用機械器具製造業が新設されている。また、機械工業の問題を考えると金属製品製造業に含まれる部品のプレス加工やメッキ・熱処理・溶接・塗装も関わってくる。本稿では、機械工業に関わる工場を網羅していくために、はん用機械器具製造業と生産機械器具製造業、業務用機械器具製造業、電気機械器具製造業、輸送用機械器具製造業の5つの機械がつく中分類業種と金属製品製造業を範囲として考えていく。

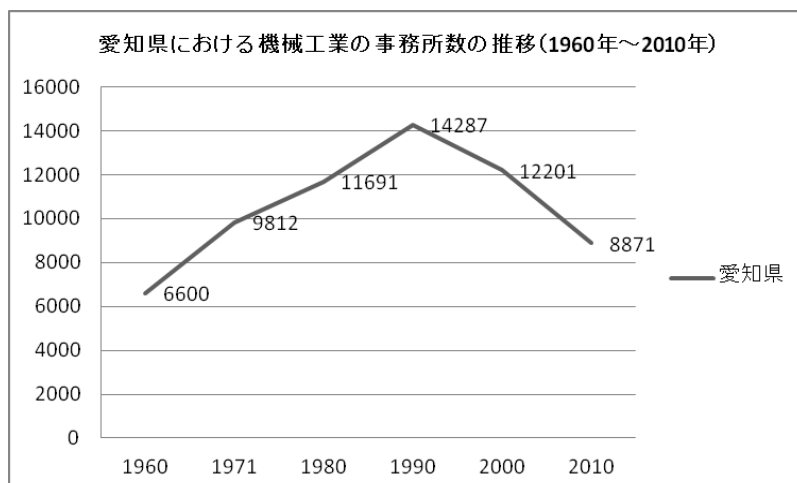


表 2 愛知県における機械工業の事務所数の推移 (1960 年～2010 年) (通商産業大臣官房調査統計グループ編『工場統計表 市区町村別編』各年版より筆者作成)

3. 町工場 T 社

3-1. T 社の概要

調査工場である T 社は、愛知県刈谷市にある家族で営む典型的な町工場である。工場では、インフォーマントである H 氏 (42 歳)、H 氏の妻 (42 歳)、H 氏の父親である社長 (65 歳) と H 氏の母親 (64 歳)、従業員である N 氏 (68 歳) が働いている。T 社は、現在の社長の父親が 1971 年に当時働いていた工場から独立し、刈谷市内にある親戚の納屋を借りて機械加工をはじめたのがきっかけだった。その後、現在の場所に工場を移し、1990 年に工場を法人化させた。工場では、設備や自動車に使用される機械部品、また開発現場で使用される試作部品を製作している。工場で働いている人々の仕事の時間や内容は、個人によって異なる。社長は、朝 7 時から 15 時 (月・水・金)、また朝 7 時から 17 時 (火・木) の時間帯に仕事をしており、主に部品加工をしている。N 氏は、毎日出社し仕事をしているが、午前中に仕事を切り上げることが多い。社長と同じく部品加工をしている。また、H 氏の母親や H 氏の妻は、朝 8 時から 16 時まで仕事をしており、主に加工のアシスタントや経理、完成品の納品をおこなっている。H 氏は、その日の仕事量によって異なるが、朝 8 時から 19 時、忙しいときには 22 時ぐらいまで仕事をしている。部品加工をおこなっており、工場内でもっとも多く仕事をこなしている。

3-2. T 社の金属切削加工

T 社でおこなわれている金属切削加工について、H 氏の NC 旋盤での作業を中心に概観する。金属切削加工は、機械で加工する前の準備段階と機械による自動加工に大別される。機械で加工する前の準備段階は、主に (1) 図面をみる、(2) 材料・機械・道具の選択、(3) プログラムの設定からなる。準備を終えた後に、(4) 機械による自動加工によって実際に部品が加工される。機械による加工がはじまると、人の手が入る余地がなく、設定し

たプログラムに従って加工され完成に至る。本節では、加工する前の準備と機械の自動加工に伴う作業内容を示して、T社における金属切削加工の性格を明らかにする。

(1) 図面をみる

T社の部品製作は、注文主から図面がFAXされることではじまる³。図面には、部品の形や材質、切削加工の後工程に位置づけられる熱処理や表面処理の有無が記載されている。また、図面の余白部分に注文主が手書きで製作個数と納期を書いており、注文書としての役割も担っている。H氏は、図面に記載されている製作に必要な情報に目をとおして、材料・機械・道具の選択、機械のプログラムの設定をおこない製作準備を進める。

(2) 材料・機械・道具の選択

材料は、図面に記載されている材質と製作部品の大きさから選択される。T社にある材料は、地元の鋼材屋から購入しており、また鋼材屋によって材質ごとにペンキで色分けされている。それらの材料は、T社の材料庫に保管されている。H氏は、図面により指定された材質の材料を鋼材屋が塗った色から判断する。そして、測定具で材料を測り、加工する部品より少し大きめのサイズのものを選択する。

工作機械は、部品の形や製作する手順、また工場の仕事量などに応じて選択される。T社には、NC工作機械5台、汎用工作機械が10台ある。表3は、T社が所有している工作機械の種類とその機能と使用者の一覧である。工場内の作業者がメインで使用する機械は決まっており、H氏は、NC工作機械であるNC旋盤、複合旋盤、マシニングセンタを主に使用し、社長とN氏は、汎用工作機械である旋盤を使用している。また、使用頻度の少ない工作機械については、共同で使用している。

機種名	加工用途	台数	使用者
NC旋盤	数値制御をもって円筒形の工作物を回転させて加工する。	2台	H氏
マシニングセンタ	数値制御をもってフライス工具を回転させて、四角い工作物の平面、曲面、みぞなどを加工する。	2台	H氏
複合旋盤	NC旋盤とマシニングセンタの機能をもつ工作機械。四角い工作物と円筒形の工作物を加工する。	1台	H氏
旋盤	円筒または円盤状の工作物を回転させて加工する。	2台	社長、N氏
フライス盤	フライス工具を回転させて、四角い工作物の平面、曲面、みぞなどを加工する。	3台	共同使用
ボール盤	ドリル工具を回転させて穴をあける。	2台	共同使用

³ 数は少ないが図面とは別に注文書を正式にFAXする注文主もいる。

ベンチ	小型の旋盤。円筒または円盤状の工作物を回転させて加工する。	2 台	共同使用
のこ盤	材料を切断する。	1 台	共同使用

表3 T社の工作機械一覧（工場調査をもとに筆者作成）

次に NC 旋盤に取り付ける道具について示していく。道具は、削るための切削工具と固定するための治具があり、それを機械に取り付けて使用する（写真 1）。切削工具は、外面や内面加工、切断、穴やネジ加工用とあり、工具の先端にあるチップと呼ばれる刃やドリルを交換して使用する。チップとドリルは、規格により加工用途に応じた形・材質・サイズが細かく規定されており、部品の形や材質などの製作内容を考慮に入れながら選択される。選択したチップは、バイトの先端に取り付け、ドリルは、ホルダと呼ばれる保持具に取り付け、それぞれを機械の刃物台にセットして準備が完了する。

治具は、材料や半製品（製造途中の製品）を加工するために固定する道具である。旋盤の場合は爪と呼ばれる治具を使用する。爪は、1 台の機械に 3 個使用し、3 方向からモノを固定する治具である。H 氏は、材料や半製品の形にあった爪を道具棚から選び、作業台に用意する。爪は、工具商から生爪と呼ばれる原型の爪を購入し、それを自分の使いやすい形に成形する。H 氏は、爪の形を複雑にせずできるだけシンプルにして、汎用性をもたせることでさまざまな形をしたモノを固定できるようにすることが重要であると述べている。また、H 氏は、爪を 80 種類ほど所有している。T 社では、多種多様な形をした部品の注文を受けている。そのため爪の種類が多いことは、それだけ対応可能な部品の範囲が広がることになる。また、工場内にある爪で対応することができない場合は、別の用途で使用する保持具を使用することや新たに治具を専用に製作することもある。

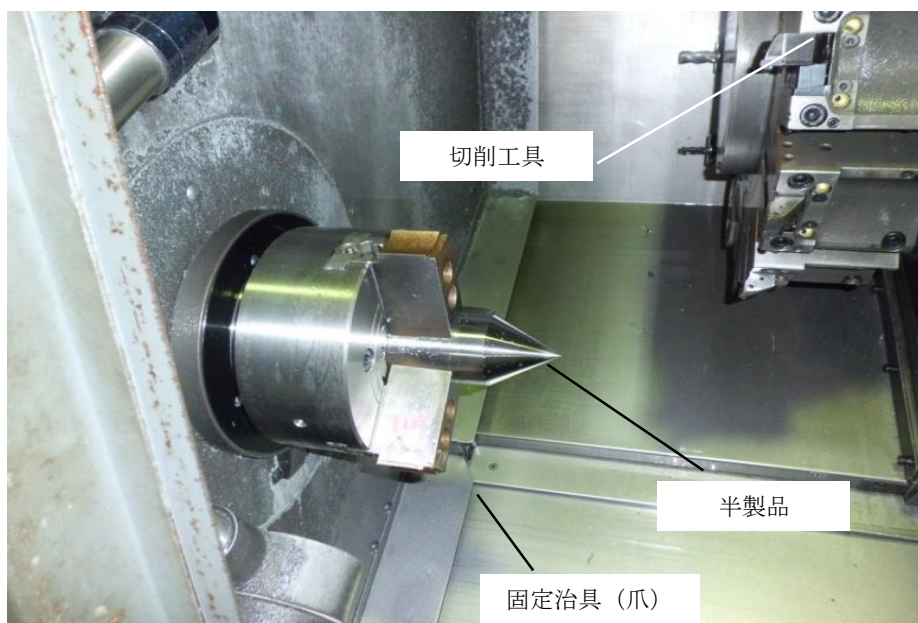


写真1 NC旋盤（2012年8月 筆者撮影）

(3) プログラムの設定

プログラムの設定は、工作機械を自動で動かすために加工条件や工具の加工経路を機械にプログラムする作業である。この作業では、①工具の加工経路、②送り速度（加工する対象物を削るときの速度）、③切削速度（工具の移動する速度）、④回転数（固定部が1分間に回転する回数）、⑤固定するときの圧力を設定する。設定作業は、まず①工具の加工経路について、原点の位置座標を設定し、次に原点から加工経路の軌跡の終点を決めて、2点を結ぶ工具の経路をつくりあげる。この設定作業を繰り返すことで、製作部品の加工経路をつくりあげていく。そして、加工時の送り速度、切削速度、回転数を決定する。送り速度、切削速度、回転数を高い数値に設定すると早く加工することができ、作業の時間を短縮させることが可能になるが、同時に加工対象物に負担をかけることになり、加工後の製品の表面が粗くなる原因にもなる。

（4）機械による自動加工

機械による自動加工は、材料・機械・道具の選択、またプログラムの設定を終えたあとにおこなわれる作業である。具体的には、作業者が機械に材料を固定させ、起動ボタンを押すことでプログラムの設定したとおりに機械が動き材料が加工される。その後、加工が終了した製品を図面の規定値のなかに入っているかどうか測定具で測定する。以上の一連の作業が機械による自動加工であり、工場では1工程として認識されている。作業者は、加工対象物を固定するときに、固定する部分に付着している微細な鉄屑をエアガンで吹き飛ばし、また「バリ」と呼ばれる加工した後に出るわずかな出っ張りがないか手で触り確認する。加工対象物を固定する際に鉄屑が治具と加工対象物の間に挟まっていたりすると、ずれて固定される可能性がある。この状態で加工すると、プログラムに入力したとおりの寸法で加工することができない。そのため加工対象物を手のひらで入念にさわりながら鉄屑や「バリ」がないかどうかを確認する作業は、T社では重要なものとして認識されている。

以上、H氏のNC旋盤での金属切削加工について、加工する前の準備と機械による自動加工に大別して紹介した。その基本的な作業内容は、図面がH氏の手元に届いたところからはじまり、図面を見ながら、材料や道具である切削工具・爪、また機械のプログラムを設定する。そして、機械で加工するために材料を機械に固定しボタンを押し、その後、加工が終了した部品の寸法を測定する、といったものである。

次章では、具体的な部品の製作の事例をとおして、H氏の「段取り」を考察する。「段取り」は、工場の仕事量、注文主との関係を考慮に入れながら、機械や道具、工程を選択し製作全体を考えていく作業である。金属を削る作業では、機械や加工する対象物についてさまざまな問題が発生し、たびたび製作全体を作り直す必要に迫られる。この過程において、仕事の状況全体を把握し、加工するために最適な判断をおこなうところに機械工の熟練の技術をみることができる。この点をH氏のNC旋盤による部品製作の事例をもとに明らかにしていきたい。

4. 機械工の「段取り」—H氏のNC旋盤による製作事例を中心に

本章では、部品製作の「段取り」の事例を2点取り上げる。1つ目は、注文主からの引き

合いに対して、予想される問題を検討し製作を構想した事例である。2つ目は、製作途中で問題が発生し製作全体を再構成した事例である。

4-1. 事例① 絞り部品の切断—固定するための H 氏の選択

絞り部品は、O 社から注文を受けた部品⁴で、注文個数は 2025 個であった。O 社が絞りの作業に失敗し、部品の淵に大きな「ひだ」ができたもので、この「ひだ」の部分を切断する仕事であった（図 1）。しかし、切断する部品は、厚みが薄いものであり、機械で固定する際に、その力で変形する可能性のあるものであった。以下は、引き合いがあったときに、H 氏が絞り部品の淵に発生した「ひだ」をどのように切断するか検討している場面の一部である。

H 氏「絞りのやつ、1 個 X 円でできないかって・・・、そもそもおさえることができないよ。つかむと死んでくし。ベンチでもいいけど、うまくつかめるかどうか(1)、あと、バリもでるし・・・(2)。治具費は出してくれるみたいだけど(3)。」

社長「(苦笑しながら) 何 mm？」

H 氏「77mmをたしか、50 何mmにすると思うんだけど(4)」

会話の(1)～(4)の意味

- (1)絞り部品は表面が薄いため固定すると変形する可能性があった。ベンチと呼ばれる手動の小型旋盤で製作することを考えたが、ベンチでは部品を固定できるかどうかわからないことを述べている。
- (2)「バリ」を除去する仕上げ作業が必要になることを述べている。
- (3)固定するための道具の費用を注文主が払ってくれることについて述べている。
- (4)77mm の長さの絞り部品を 55mm に切断する加工内容について述べている。

上記の会話は、固定することで変形する可能性のある絞り部品に対して、どの機械を使用し、どのような方法で固定すればよいか、また効率よく仕事をおこなうにはどうすればよいか考えているものである。

H 氏は、最終的に NC 旋盤と切削工具の修正、また工場にある治具を使用して切断作業をおこなうことになった。H 氏が工作機械や切削工具、治具を選択した過程を示していく。まず工作機械の選択である。2025 個の絞り部品の注文は、普段 1 個から 20 個ほどの仕事をメインでおこなっている T 社にとって、かなり多いものであった。そのため、使用頻度の高い NC 旋盤を長時間使用して他の仕事ができなくなることを避けて、あまり使用していないベンチで切断することを考えた。しかし、会話のなかで「ベンチでもいいけど、うまくつかめるかどうか」と述べているように、ベンチは、部品を固定する圧力を自由に調整することができない機械であった。絞り部品は、固定部分の厚みが薄いため、固定したときに機械の力で変形しないように低い圧力で固定する必要があり、圧力の調整ができないベン

⁴ 絞りとは、一枚の薄い金属の板に圧力を加えて、中央をくぼませて容器のような形にする技法である。O 社は自動プレス機で金属の板を絞って部品を製作している。

チではこのことが困難であった。そのため H 氏は、圧力の調整が可能な NC 旋盤を選択した。

次に、切削工具と治具の選択である。NC 旋盤を選択し、圧力を下げることで、逆に固定する力が弱くなり、切断時に固定が不安定になる可能性があった。そのため、切断刃の先端を削り丸くし、加工対象物との接触面を大きくすることで切断時に過度の力が加わらないようにし、固定の不安定さを防ぐ作業をおこなった。また治具の選択において、会話で「治具費は出してくれるみたいだけど」と述べているように、固定を確実にこなうための治具の製作費用を注文主が捻出してくれることも述べられている。しかし、工場の仕事量が多く新しく治具を製作する余裕がなかったため、既存の治具を使用して固定することを考えた。

H 氏は、固定することで変形する可能性のある部品の問題に対して、工作機械や機械の圧力の設定、また切削工具の修正や既存の治具を使用することを考えた。その選択過程において、H 氏は、加工後に生じる変形を極力防ぐため、機械による固定に関する技術的な部分だけでなく、工場全体の仕事量も含めて最適な方法を考えた。絞り部品の切断は、一見すると単純な作業に見えるが、H 氏の「段取り」の過程をみると、技術的部分と仕事の効率に関わる仕事量の問題をめぐって葛藤しながらも、機械が切断する対象物に与える影響を検討し、製作全体を構成していることがわかる。

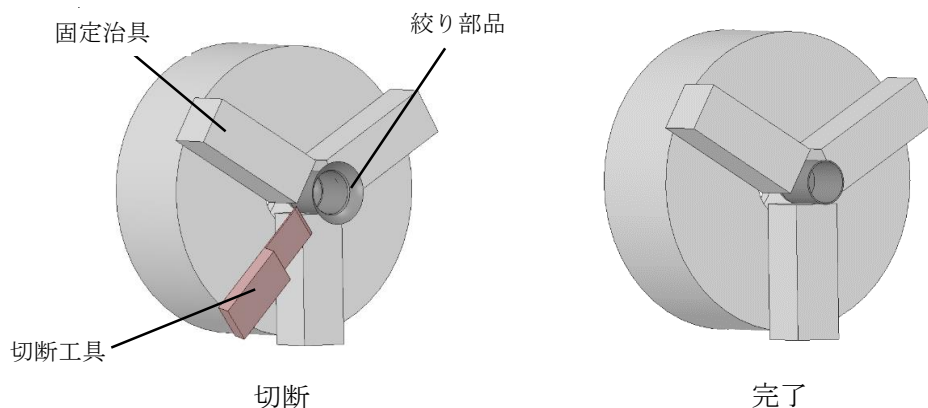


図1 切断工程（工場調査をもとに筆者作成）

4-2. 事例② 補給部品の製作—振動をなくすための H 氏と社長の工夫

補給部品⁵の製作事例は、加工途中に問題が起こり、製作方法の変更を余儀なくされた場面を示したものである。T 社の取引先である D 社から発注された部品であり、製作個数は 200 個であった。2014 年 7 月 24 日に T 社に発注され 8 月 8 日までに納める必要のあるものであった。H 氏が考えた加工方法は、長さ 400mm×径 40mm の円柱形状の材料を何本か購入し、NC 旋盤の固定治具の中空部に入れて固定し、固定治具から必要な長さ (45mm) を外に出して、その先端部分を削り形にするというものである。その後、削った先端部分を切断し、完了する作業であった (図 2)。製作工程は 1 工程のみであり、できるだけ時間を

⁵販売が終了した自動車に使用されている部品。

短縮させて加工したいという H 氏の意図があった。その理由として、7 月中に完成させて、7 月までに売上げを計上したいという考えが H 氏にあった。

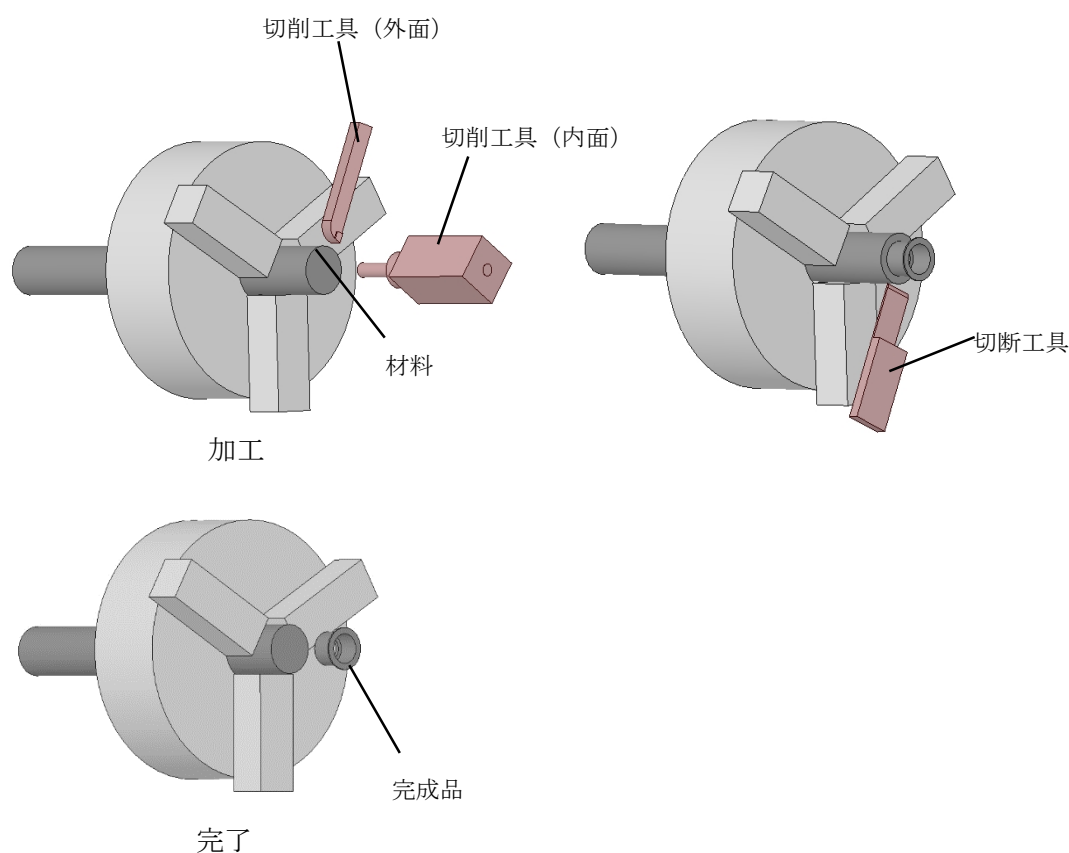


図 2 改善前の工程（加工と切断）（工場調査をもとに筆者作成）

しかし、20 個ほど製作した段階で、急に加工後の部品の表面全体が白く濁ったような色になった。この現象は、加工したときに削る切削刃と削られる加工対象物との間でかすかな振動が生まれて、部品の表面が畳のようなギザギザを伴い、そのギザギザの凹凸が深くなる時にあらわれるものであった⁶。

以下の会話は、同業他社である N 工業で、凹凸を測定機械で測定する際に N 工業の従業員と T 社の社長が、表面が白く濁る不具合について話し合っている場面の一部である。

社長「(部品をみせ指で加工経路をたどりながら) こうやって・・・端面をひかないといけない(1)」

N 工業の従業員「(測定機械で不具合品をセットしながら) S25C なんて端面むりだわな

⁶ この表面の凹凸は、面粗度と呼ばれ数値化されるかたちで図面に記載されている。面粗度が悪い機械部品は、部品同士がかみあったときに凹凸により接合部分がこすれて早期の磨耗につながるため、図面により管理されている。

(2)」

社長「いっばつでできんか(3)」

N工業の従業員「・・・」

社長「こういうバイト（両手で尖った形のジェスチャーをしながら）で切り粉もからんでくる(4)」

N工業の従業員「(測定データの断面曲線をプリントアウトしながら) やっぱだいぶ荒い。深いから磨いたぐらいじゃとれんぞ(5)」

会話の(1)～(5)の意味

- (1)現状の加工工程をN社の従業員に説明している。
- (2)材料の材質について述べている。鉄のなかではS25Cはやわらかい材質のため、切削刃がくいこみひっかかりやすく、削る刃と削られる金属のあいだで振動をおこす可能性が高くなる。
- (3)1工程（現状の製作方法）で製作可能かどうかを聞いている。
- (4)切削刃の形や「切り粉」と呼ばれる削りくずの発生について述べている。「切り粉」が、切削刃に絡むと刃こぼれを起こし振動につながる。
- (5)測定の結果、凹凸が深くやすりで磨いた程度では凹凸を修正することは困難であることを述べている。

以上の会話は、T社の社長がN工業の従業員と現状の不具合について話し、凹凸を引き起こす原因を探っている場面である。社長は、現状の製作工程や材質（S25C）、切削刃の形などを挙げており、製作全体の中から個別にそれぞれの要素に目を向けて、どこに問題があるかを把握しようとしている。測定の結果、凹凸の深さは、図面の規定値を大きく外れており非常に深いものであった。そのため、やすりなどを用いたその場しのぎの修正では凹凸をなめらかにすることが不可能だとわかり、製作方法の変更を決定した。そして、社長は工場に戻る途中でH氏に測定結果を電話で連絡して製作方法の変更について話し合った。

H氏は、社長との話し合いから工程を2工程にし、さらに新たな道具を加える変更をおこなった。1工程目は、従来どおりNC旋盤を使用し、材料の外面と内面を削るものだが、さらに2工程目を追加し、1工程目で加工した表面をコレット⁷と呼ばれる治具で保持し、内面を加工し仕上げる工程を追加した（図3）。

H氏と社長は、1工程から2工程にすることで、1回で削る量を減らし加工する際にかかる負荷を軽減させ、振動を防ぐことができると考えた。その結果、加工後の凹凸が減るだろうと推測した。また、2工程目で新たに追加したコレットは、加工対象物の全面を密着させながら固定することができる。変更前に使用していた爪は、加工対象物を3箇所⁷で固定するのみであり、全面を密着させて固定するコレットに比べて固定が不安定なものになる。H氏と社長は、コレットを使用し1工程目が終了した半製品にはめることで全面を密着させ、

⁷ ここで使用されたコレットは通常、工作機械にドリルを取り付けるために使用するものであり、加工対象物を固定する用途では使用しない。H氏は、通常の使用方法とは異なる方法でコレットを使用している。

加工時において固定された半製品の振動を減らすことができ凹凸の改善につながるだろうと考えた。このように、振動を減らすために H 氏と社長は、(1)「2 工程への変更」—「1 回の切削量を減らす」—「振動が減る」、(2)「コレットを使用し全面に密着させるように固定する」—「振動が減る」と推測し、振動を減らすために仕上げの工程とコレットを追加した。この変更で表面の凹凸が発生する不具合を改善することができた。

補給部品の事例をまとめると、H 氏は売上げを 7 月に計上するために、早く作業を終わらせることを優先に製作方法を考えた。しかし、この製作方法では表面の凹凸が深くなり製作の方法を変更する必要に迫られた。製作方法の変更過程は作業全体の機械や道具、材料、製作工程を個別に振り返りながら、どの部分に原因があるか考える作業であった。そして、H 氏と社長は、凹凸を引き起こす振動を抑えるために仕上げの工程とコレットを加える製作方法に変更した。H 氏と社長による問題を解決する過程は、振動の原因と考えられるすべての要素を変えようというわけではなく、工程と道具の要素に絞り部分的に変更し製作全体を再構成していくものであった。

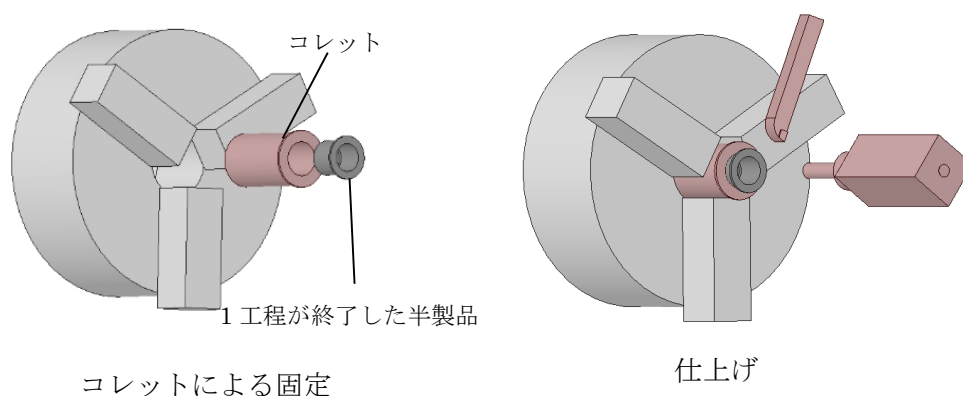


図 3 改善後に追加した工程（工場調査をもとに筆者作成）

5. おわりに

本稿では、愛知県の刈谷市における金属切削加工を営む町工場 T 社で働く H 氏の製作活動を中心に概観した。そして、部品製作の「段取り」の事例をとおして、H 氏が問題を解決する過程を示した。1 つ目の事例である絞り部品において、H 氏は切断する部品を固定するときに、機械の力で部品が変形する可能性があり機械や道具の特性を考えるだけでなく、工場の仕事量を考えて効率の良い製作方法を構成し問題を解決した。また、2 つ目の事例である補給部品において、H 氏は加工後の部品の表面が白く濁る問題に対して、機械の振動と関連づけて、工程と道具を追加する方法へと再構成することで解決した。以上の、H 氏がおこなった「段取り」のなかで問題解決のプロセスを中心にみることで、現代の町工場における機械工の熟練の技術の特徴が明らかになった。

その技術の特徴は、2つある。1つ目は、町工場の金属切削加工において、製作する前におこなう製作全体を構想する能力が仕事のなかで重要な位置を占めているということである。たとえば、北村は、町工場の熟練技術について、経験と勘に基づく職人技以外にも、工場の仕事における問題解決能力や構想能力も熟練技術と捉えるべきである（北村 2005: 140）と指摘している。事例で示したように、金属切削加工において加工により生じる金属の変形や機械と加工対象物の接触から引き起こされる振動などの事象が頻繁に起こる。これらの事象は、科学的に数値化することも、また身体を伴う感覚や視覚をもって捉えることもできない。このような問題に対して、機械工は、さまざまな原因を個別に考えながら、ある一つの原因を特定し、その原因を解決するために機械や道具、製作手順を再構成する。筆者は、補給部品の問題が解決した後に、あらためて H 氏に白く濁り凹凸が深くなった理由について聞いたとき、H 氏の最初の一言は「わからない」というものであった。その後、H 氏は、凹凸の原因について機械の条件、切削刃、材料のばらつきなどさまざまであり、1つに特定しその1つを改善したからといって凹凸がよくなるとは限らないと補足し筆者に説明した。金属切削加工においては機械と加工対象物との接触の中で、さまざまな要因が複雑に絡み合いながら問題が発生するため、H 氏自身も明確な原因がどこにあるかわからないことが多い。H 氏の技術は、そのなかで原因を1つに仮定し、その原因を解決するために、機械や道具、加工対象物、製作工程との関係を吟味しながら、解決策を予測し製作全体を構想するものであった。

2つ目は、「段取り」のなかで工場の人々が、工場全体の仕事量や売上げの計上に関する経営の側面と関連づけながらモノづくりをおこなっていることである。町工場で働く機械工は、少人数で働いているため大企業のように経営と工場の作業が分離しているというわけではなく、経営者でありながらも工場の作業者でもあり、金額や他の仕事の管理の部分も考えながら仕事をおこなっている。そのため、機械や道具、製作の手順の選択を含む技術に関する問題について考えるだけではなく、工場全体の仕事がうまくまわるような方法を常に視野におさめながらモノづくりをおこなっている。

以上のような機械を使用し工業製品をつくる工場における機械工の活動を示すことは、民具と民芸に関わる研究において少なからず有用な資料を提供できるのではないかと考える。とくに民具研究において工業製品は、それ自体についての議論がおこなわれつつあるものの、機械を使用してつくる人々の行為については、十分な議論がされていない状況である。伝統的な職人による手仕事のわざと対比されるかたちで、機械の仕事は体系化された知識しかなく、長年の経験を伴う勘や巧みさは完全に機械によって失われたものとして捉えられている。現代の NC 工作機械が浸透した町工場働く人々は、日々のモノをつくる過程で機械に関わり、日々、機械と葛藤しながら仕事をしている。H 氏は、よく NC 工作機械について「(笑いながら) 使えない道具だよ」と言う。機械は便利なものでもなく、また人間の代わりになるほどの機能も持ち合わせていない。機械をとおして、試行錯誤しながら使用する機械工の活動を詳細にみることで、その中で機械に対する人間の主体的な行為をみてとることが可能になるだろう。そして同時に、工業製品をつくる一連の行為を調査することで、伝統の生活用具と現代の工業製品の違いを比較するための資料を提供できるのではないかと考える。

参考文献

朝岡 康司

2006 「「民具」と「道具」を考えてみたが…」『民具研究』138号: 82-88。

新井 清

1993 「民具と機械の間」『民具研究百号』100号: 5。

河邑 肇

1997 「NC 工作機械の発達を促した市場の要求 — 日米自動車産業における機械加工技術」『経営研究』47巻第4号: 103-122。

川村 周

2008 「「身近卑近の道具」再考——新しい道具は民具か」『民具マンスリー』40巻10号: 1-12。

北村 敏

2005 「熟練技術と現代産業——町工場から世界へ」『日本民俗学』242号: 139-141。

近藤 雅樹

2002 「民具の定義とイメージ」、赤田光男他（編）『講座日本の民俗 第九巻 民具と民俗』、pp.15-31、ドメス出版。

小関 智弘

2000 『鉄を削る — 町工場の技術』、ちくま文庫。

新修名古屋市史編集委員会（編）

2000a 『新修 名古屋市史 第五巻』。

新修名古屋市史編集委員会（編）

2000b 『新修 名古屋市史 第六巻』。

塩澤 君夫、斉藤 勇、近藤 哲生

1993 『愛知県の百年 県民百年史 23』、山川出版社。

鶴田 忠生

1982 『自動車王国前史 — 綿と木と自動車』、中部経済新聞社。

渡辺 幸男

1997 『日本機械工業の社会的分業構造 — 階層構造・産業集積からの下請制把握』、有斐閣。

参照ウェブページ (2014年12月30日取得)

通商産業大臣官房調査統計グループ（編）『工場統計表 市区町村別編』

http://www.meti.go.jp/statistics/tyo/kougyo/library/library_2.html

Keywords

small factory, expertise skill, metal cutting, setup

執筆者紹介（掲載順）

濱田 琢司 （南山大学人類学研究所・人文学部日本文化学科准教授）
佐野 賢治 （神奈川大学日本常民文化研究所・経済学部経済学科教授）
小川 直之 （國學院大學折口博士記念古代研究所・文学部日本文学科教授）
印南 敏秀 （愛知大学総合郷土研究所・地域政策学部教授）
小島 孝夫 （成城大学民俗学研究所・文芸学部文化史学科教授）
角南 聡一郎 （（公財）元興寺文化財研究所）
後藤 明 （南山大学人類学研究所所長・人文学部人類文化学科教授）
加藤 英明 （南山大学大学院人間文化研究科博士後期課程）

編集委員

人類学研究所所長 後藤 明
第2種研究所員 濱田 琢司
研究補助員 加藤 英明、松永 神鷹、坂下 凌哉

人類学研究所 研究論集 第2号

2015年3月30日 発行

編集責任者 後藤 明・濱田 琢司

南山大学人類学研究所

名古屋市昭和区山里町18 〒466-8673

電話 (052)832-3111 (代表)

E-mail: apai-nu@ic.nanzan-u.ac.jp

印刷 株式会社ウェルオン 電話 (052)732-2227

カバーデザイン T・Y